

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅲ

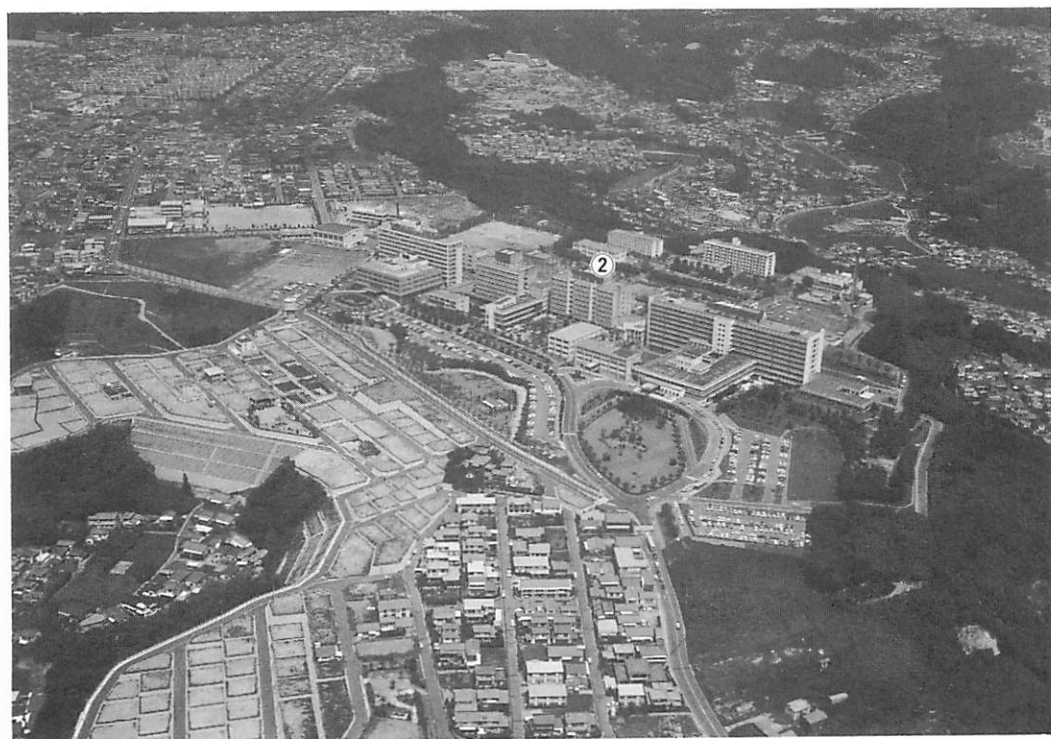
昭和62年度

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

1988年 3 月



鹿児島大学郡元団地（北から）



鹿児島大学宇宿団地（南東から）

①電子計算機室増築に伴う発掘調査地 ②医学部臨床研究棟増築に伴う発掘調査地

序

昭和62年度の鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅲが出版されるに当たり、その衝に当たられた関係各位のご努力に心からなる感謝の念を捧げると共に、鹿児島大学の文化活動のレベルを示すものとして、高く評価をしたいと思います。

本年度は郡元地区では、古墳時代、平安時代の様相が解明され、また、宇宿地区では弥生時代の集落跡が確認され、その近傍に縄文時代、古墳時代、中世の遺跡が錯綜して存在する可能性が指摘されました。

これらはいずれも鹿児島地方の先史文化に新しい知見を加えるものであり、学問的に見てもわが大学の誇るに足る成果と自負したいと思います。

鹿児島大学特に郡元キャンパスでは、今21世紀を目指し長期将来計画を立案中ですが、文化財保護法の精神と、地域文化のセンターとしての大学の責務を基礎に、機能的な学問の府としての調和のとれたキャンパスを夢みしていますが、その中でも埋蔵文化財問題は最も大きな課題と考えています。この問題は全国すべての大学で同じ悩みとなっており、同じ課題ならば私は鹿児島大学が全国の大学の範となるべき積極的な対策を取りたいと念じています。その意味でもこの報告書がわが大学の埋蔵文化財に対する大きな熱意を示し、学内のこの問題に対する理解を一層深め、学問の府として最も理想的な対策が実行出来る基となることを切に期待して、私の序としたいと思います。

昭和63年3月31日

鹿児島大学学長

井 形 昭 弘

例 言

1. 本年報は鹿児島大学構内において鹿児島大学埋蔵文化財調査室が昭和62年2月1日から昭和63年1月31日までに行った調査活動の成果をまとめたものである。調査報告は昭和61年度分（昭和62年2～3月）を第Ⅰ部、昭和62年度分（昭和62年4月～昭和63年1月）を第Ⅱ部とする。
2. 昭和60年6月1日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれからの埋蔵文化財調査に便であるように鹿児島大学構内座標を郡元団地と宇宿団地とに設定した。
その設置基準は以下のである。
 - (1) 郡元団地では、国土座標第2座標系（ $X = -158.200$, $Y = -42.400$ ）を基点として一辺50mの方形地区割を行った（図版1参照）。
 - (2) 宇宿団地では、国土座標第2座標系（ $X = -161.600$, $Y = -44.400$ ）を基点として一辺50mの方形地区割を行った（図版2参照）。
3. 本年報において報告を行った調査地点については、図版1・2にその位置を示している。
4. 本年報の執筆は第Ⅰ部・第Ⅱ部第1・2章を松永幸男が、第Ⅱ部第3・4章を坪根伸也が担当した。また、第Ⅱ部第3章のうち5(4)については松永が執筆した。
5. 遺構・遺物の実測・製図・写真撮影は松永・坪根・金子千穂枝が行ったが、医学部臨床研究棟増築地の調査においては遺構の実測について、雨宮瑞生（筑波大学大学院生）・下山寛・中摩浩太郎・八木沢一郎・上村純一・後藤方彦・豊見山楨・松尾宏（以上、鹿児島大学法文学部考古学研究室）諸氏の御協力を得た。
6. 電子計算機室増築地の調査に際しては西井上剛資氏（鹿児島大学教養部講師）に花粉分析を依頼し、その分析結果について玉稿を賜うことができた。分析結果は、付編として掲載している。また、池畑耕一氏（鹿児島県歴史資料センター黎明館）には、本遺跡について数多くの有益な御教示を賜った。
7. 医学部臨床研究棟増築地の調査において、森脇広（鹿児島大学法文学部助教授）・本田道輝（鹿児島大学法文学部助手）・成尾英仁（鹿児島市立玉竜高校教諭）の諸氏には、調査期間中、現場に來訪いただき多くの御教示を賜った。特に、森脇氏には、局部断層の観察にあたって、懇切丁寧な御指導を賜った。
8. 医学部臨床研究棟増築地の調査によって検出した石器石材の鑑定は旭慶男氏（鹿児島県教育委員会文化課）にお願いした。また、その際、牛ノ浜修氏（同）にも黒曜石の産地について御教示を賜うことができた。
9. 本書の編集は上村俊雄の指導を受けて、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が行った。
10. 巻頭図版写真については鹿児島大学事務局の提供を受けた。

目 次

第Ⅰ部 昭和61年度（昭和62年2～3月）鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告	
第1章 昭和61年度（昭和62年2～3月）調査の概要	2
第Ⅱ部 昭和62年度（昭和62年4月～昭和63年1月）鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告	
第1章 昭和62年度（昭和62年4月～昭和63年1月）調査の概要	4
第2章 鹿児島大学郡元団地G・H-9・10区（電子計算機室増築地）における発掘調査報告	6
1. 調査に至る経過	6
2. 調査の経過	6
3. 基本層序	7
4. 遺構	7
5. 遺物	16
6. まとめ	18
第3章 鹿児島大学宇宿団地I-8区（医学部臨床研究棟増築地）における発掘調査報告	27
1. 調査に至る経過	27
2. 調査組織	27
3. 調査の経過	28
4. 基本層位	29
5. 遺構と遺構出土の遺物	30
6. 遺構外出土遺物	47
7. まとめ	61
第4章 昭和62年度（昭和62年4月～昭和63年1月）鹿児島大学構内における立合調査報告	63
• 鹿児島大学構内遺跡調査要項	66
• 受贈図書目録（1987年2月1日～1988年1月31日）	69
付 編	
鹿児島大学郡元団地G・H-9・10区（電子計算機室増築地）における花粉分析結果	81
1. 花粉分析の方法	81
2. 花粉分析の結果	81

挿 図 目 次

・鹿児島大学郡元団地G・H－9・10区（電子計算機室増築地）における発掘調査

第1図	発掘調査区位置図	6
第2図	4層以上検出遺構	8
第3図	掘り込み・1号土塋・2b号溝出土土器	10
第4図	2b号溝・3a号溝・1・2号土塋平面図	11
第5図	3b号溝・3号土塋及び水田相当層上面	13
第6図	3a・3b号溝出土土器	14
第7図	包含層出土土器	16
第8図	土錘・有孔滑石製品・軽石製品	17

・鹿児島大学宇宿団地I－8区（医学部臨床研究棟増築地）における発掘調査

第9図	調査区位置図	28
第10図	基本土層模式図	29
第11図	検出遺構全体図	31
第12図	1号住居址実測図	32
第13図	2号住居址実測図	33
第14図	住居址内出土遺物	34
第15図	3号住居址実測図	34
第16図	土塋6平面・断面実測図	35
第17図	土塋6内出土管玉	35
第18図	土塋7出土土器	36
第19図	土塋7平面・断面実測図	36
第20図	土塋9平面・断面実測図	36
第21図	土塋14内出土土器	36
第22図	土塋14平面・断面実測図	37
第23図	土塋14全体図	37
第24図	土塋内出土遺物	38
第25図	2号溝断面実測図	39
第26図	2号溝・3号溝出土遺物	39
第27図	5号溝平面・断面実測図	40
第28図	5号溝出土遺物	41
第29図	5号溝断面実測図	42
第30図	6a・6b号溝断面実測図	42
第31図	e－⑤・⑥区南壁土層断面図	43
第32図	8号溝断面実測図	43

第33図	8号溝出土石器	43
第34図	6a号・6b号・7号・8号溝出土遺物	44
第35図	局部断層分布図	45
第36図	No.1・No.13局部断層	46
第37図	縄文土器	47
第38図	遺物分布図	49
第39図	弥生土器(1)	50
第40図	弥生土器(2)	51
第41図	弥生土器(3)・古墳時代の土器	52
第42図	須恵器・陶磁器類	53
第43図	出土石器	54
・昭和62年度立合調査		
第44図	A地点検出遺構位置図	63
第45図	土層柱状図	64
・付編		
第46図	花粉・孢子組成図	81

付 図 目 次

付図1	鹿児島大学郡元団地G・H－9・10区（電子計算機室増築地）遺跡 土層図
付図2	鹿児島大学宇宿団地I－8区（医学部臨床研究棟増築地）遺跡 土層図(1)
付図3	鹿児島大学宇宿団地I－8区（医学部臨床研究棟増築地）遺跡 土層図(2)

写 真 目 次

・郡元団地G・H－9・10区（電子計算機室増築地）における発掘調査	
写真1	特殊遺物 18
・宇宿団地I－8区（医学部臨床研究棟増築地）における発掘調査	
写真2	5号溝遺物出土状況 40

表 目 次

・郡元団地G・H－9・10区（電子計算機室増築地）における発掘調査	
表1	方形掘り込み一覧 9
表2	土器観察表 20
・宇宿団地I－7区（医学部臨床研究棟増築地）における発掘調査	

表 3	住居址一覧	30
表 4	土壌一覧	35
表 5	石器観察表	54
表 6	土器観察表	55

図 版 目 次

図版 1	鹿児島大学郡元団地構内図	85
図版 2	鹿児島大学宇宿団地構内図	86
図版 3	郡元団地 G・H-9・10区（電子計算機室増築地） a-④区北壁, c-②区東壁, d-③区南壁, b-④区西壁	87
図版 4	郡元団地 G・H-9・10区（電子計算機室増築地） 2 a号溝完掘状況（北から）, 2 b号溝完掘状況（北西から）, 同（西から）, 礎石を持つ掘り込み, 1号土壌, 2号土壌	88
図版 5	郡元団地 G・H-9・10区（電子計算機室増築地） 2 b号溝・3 a号溝全景（西から）, 同（東から）, 3 a号溝埋土断面, 同（部分）, 3 a号溝土器出土状況, 同, 3 a号溝埋土 5 層中植物遺存体, 3 a号溝埋土断面（部分）	89
図版 6	郡元団地 G・H-9・10区（電子計算機室増築地） 3 b号溝全景（西から）, 3 b号溝全景（東から）, 3 b号溝底面（西から）, 3 b号溝底面（東から）	90
図版 7	郡元団地 G・H-9・10区（電子計算機室増築地） 水田層上面（西から）, 水田層上面（部分）, 水田層上面（東から）, 砲弾検出状況, 同, 砲弾	91
図版 8	郡元団地 G・H-9・10区（電子計算機室増築地） 方形掘り込み・1号土壌・2 b号溝出土土器, 3 a号溝出土土器	92
図版 9	郡元団地 G・H-9・10区（電子計算機室増築地） 3 b号溝出土土器, 包含層出土土器	93
図版 10	宇宿団地 I-8 区 調査区全景（南から）, 調査区全景（西から）, j-⑤区深掘り部南壁, d-④区北壁, d-⑥区北壁, f-⑦区西壁, d-③区東壁, j-⑥区南壁	94
図版 11	宇宿団地 I-8 区 1号住居址（西から）, 2号住居址遺物出土状況（北西から）, 2号住居址完掘状況（西から）, 3号住居址（西から）	95
図版 12	宇宿団地 I-8 区 土壌 6 内管玉出土状況, 土壌 7 内石鏃出土状況, 土壌 14 南半部完掘状況（南東から）, 土壌 9（東から）, 土壌 7 完掘状況（北東から）, 土壌 14 北半部完掘状況（西から）	96

図版13	宇宿団地Ⅰ－8区	97
	1号溝全景(北西から), 5号溝完掘状況(北西から), 2・7・8号溝(南東から), 5号溝遺物出土状況(北から)	
図版14	宇宿団地Ⅰ－8区	98
	6a号溝(北から), 2・7・8号溝(東から), 8号溝(南東から), 6a・6b号溝(南から), 6a・6b・7号溝(北から)	
図版15	宇宿団地Ⅰ－8区	99
	No.1局部断層(東から), No.1局部断層断面, No.13局部断層(北から), No.13局部断層断面	
図版16	宇宿団地Ⅰ－8区	100
	住居址・土塙出土土器, 溝出土土器(1)	
図版17	宇宿団地Ⅰ－8区	101
	溝出土土器(2), 溝出土土器(3)	
図版18	宇宿団地Ⅰ－8区	102
	包含層出土土器(1), 包含層出土土器(2)	
図版19	宇宿団地Ⅰ－8区	103
	包含層出土土器(3), 包含層出土土器(4)	
図版20	宇宿団地Ⅰ－8区	104
	遺構内出土土器, 包含層出土土器	

第 I 部 昭和61年度(昭和62年 2 月～ 3 月) 鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告

第1章 昭和61年度（昭和62年2月～3月）調査の概要

昭和62年2月～3月においては、下記の立合調査を実施した。

- ・工学部液体チッソ貯槽置場工事に伴う立合調査（2月3～4日）

本工事は工学部電気工学科・電子工学科実験研究棟南側のシラス研究室に北接する地点において行われた。当該地点の北側には電子計算機室、東側には理学部2・3号館、西側には機械工学科実験研究棟が位置するが、これらの建設にあたっては鹿児島県教育委員会及び鹿児島大学埋蔵文化財調査室によって事前の埋蔵文化財発掘調査が行われ各種の遺構・遺物が検出されている。理学部3号館建設地においては古墳時代の集落址が、電子計算機室建設地及び機械工学科実験研究棟建設地においては古代～中世の溝等が検出されている。本工事地点はこのような諸遺跡群のほぼ中央に位置し、立合調査の実施にあたっては教養部から理学部にかけて広がる古墳時代集落址の範囲等を検討する上に有効な所見が得られることが期待された。

本工事に伴って3m×3mほどの範囲において約40cmの掘削が行われた。その結果、当該部分が既に攪乱を受けていることが判明し、当初期待していたような成果を得ることはできなかった。遺物の出土もなかった。

（参考文献）

鹿児島大学埋蔵文化財調査室『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅰ』 1986年

鹿児島大学埋蔵文化財調査室『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ』 1987年

第Ⅱ部 昭和62年度(昭和62年4月～昭和63年1月) 鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告

- 第1章 昭和62年度(昭和62年4月～昭和63年1月)調査の概要
- 第2章 鹿児島大学郡元団地G・H－9・10区(電子計算機室増築地)における発掘調査報告
- 第3章 鹿児島大学宇宿団地I－8区(医学部臨床研究棟増築地)における発掘調査報告
- 第4章 昭和62年度(昭和62年4月～昭和63年1月)鹿児島大学構内における立合調査報告

第1章 昭和62年度(昭和62年4月～昭和63年1月)調査の概要

昭和62年度は、昭和63年1月までに、以下の本調査2件及び立合調査3件を実施している。

・本調査

電子計算機室増築に伴う発掘調査(郡元団地G・H-9・10区 6月2日～8月12日)

医学部臨床研究棟増築に伴う発掘調査(宇宿団地I-8区 9月1日～12月15日)

・立合調査

農学部同窓会館エアコン電源工事に伴う立合調査(郡元団地H・I-5・6区 6月15～16日)

鹿児島大学情報処理センター新営通信設備工事に伴う立合調査(郡元団地全域 10月9日～11月20日)

自家給水施設改修工事濾過ポンプ据付および配管工事に伴う立合調査(郡元団地H-10区 11月24～26日)

農学部附属農場盤抜工事に伴う立合調査(郡元団地E・F・G-9・10区 12月15～16日)

電子計算機室建設地は、既にその新築に伴って昭和58年8月8日から9月3日にかけて、鹿児島県教育委員会による発掘調査が行われている。今回の調査区はこれに接してその西側に位置するもので、昭和58年調査時の所見をもとに発掘調査を進めることとなった。前回の調査においては、平安時代前期の溝やこれに削られた水田層等が検出されているが、今回の調査においてもこれらの存在を確認するとともに平安時代を中心として良好な資料の出土をみている。

医学部臨床研究棟増築に伴う発掘調査は、昭和62年1月に行った試掘調査の結果をもとに計画・実施されたものであるが、その結果、アカホヤ火山灰層上面において弥生～古墳時代の諸遺構が検出された。弥生時代の遺構としては円形土壌・円形住居址等が、古墳時代のものとしては溝等が検出されている。出土遺物の大半は土器であるが、円形土壌から検出された管玉は鹿児島県においては出土例が希少であり注目される。今回の調査においては、アカホヤ火山灰層より下位の層から縄文時代早期の文化層が検出されることが期待されたが、残念ながら攪乱部出土遺物を除くと、土器小片一片と石斧片一点が出土したに過ぎなかった。しかし、アカホヤ火山灰層よりも下位においてはいわゆる「局部断層」が多数検出され、古環境の復元のための好資料を提供している。

昭和62年度においては、昭和63年1月までに上記の4件の立合調査を実施している。農学部同窓会館エアコン電源工事は工事実施部分が玉利池の埋め立て部分に当たり、埋蔵文化財への影響はなかった。情報処理センター新営通信設備工事は郡元団地のほぼ全域において実施された。光ファイバーケーブルの埋設にあたっては可能な限り既掘部分を利用して作業が進められたが、農学部RⅠ施設前道路・獣医学科中庭・農業工学科研究棟北側部分・大学本部前・電子計算機室南側・理学部2号館と電子工学科電気工学科実験研究棟との間の道路・教養部理科実験研究棟北側・工学部流体内燃精密実験室東側・附属図書館北側・教養部文科研究棟南側・第二体育館南側道路等において新たな掘削部を生じることとなった。このうち農学部RⅠ施設前道路では自然河川の痕が検出され、また、教養部文科研究棟の南側においては成川式土器が多量に出土する等埋蔵文化財への少なからぬ影響が見られた。濾過ポンプ据付工事は変電室の南側において行われたが、当該部分は既に攪乱

を受けており、埋蔵文化財への影響は認められなかった。農学部附属農場の盤抜工事は農場研究実習棟南側の実験実習地において行われたが、50cmほどの盛土の下にプライマリーな層が良好な状態で堆積していることが確認された。なお、本地点の立合調査時に須恵器小片が一片出土している。

以上において、昭和62年4月～昭和63年1月に実施した調査の概要について記してきたが、今年度の調査においては、まず、電子計算機室増築地の調査における土師器・青磁等の出土及びこれを伴う遺構の検出が注目される。鹿児島大学郡元団地遺跡は古墳時代を中心とした遺跡として既に著名であるが、古墳時代の文化層の上には古代～中・近世の各時期の水田層も広がっている。これらの水田層は古墳時代の遺物包含層が希薄である農学部や教育学部東半部にも認められ、郡元団地のほぼ全域に広がっているものと考えられる。ところが、本遺跡出土の該期の遺物については古墳時代のそれに比べて量的にかなり少ないことや公表された資料が極めて限られていること等からあまり注意を引いていないようである。しかし、古代の資料が量的にまだ不十分である南九州地方⁽²⁾において、鹿児島大学郡元団地遺跡の重要性はいっそう高まるであろう。今年度の電子計算機室増築地における調査成果は、昨年報告が行われた機械工学科校舎建設地の調査成果⁽³⁾とともに、鹿児島大学郡元団地遺跡に対する認識を新たにさせるものである。

鹿児島大学宇宿団地はキャンパス造成直後に鹿児島大学考古学会の学生によって多数の遺物が採集されている。しかし、本遺跡は造成によって消滅したのと考えられ、その後ほとんど注意されることはなかった。わずかに本田道輝氏によって採集遺物の報告⁽⁴⁾がなされ、遺跡としての重要性が喚起されたのみであった。このような評価が一般的であった中で、鹿児島大学埋蔵文化財調査室では昭和62年1月に医学部へい獣焼却炉建設地における事前の埋蔵文化財発掘調査及び医学部臨床研究棟増築予定地における試掘調査を実施した。いずれも小規模な調査であったが、アカホヤ火山灰層を挟んで、下から縄文時代早期の遺物が、上から弥生～古墳時代の遺物が出土している。このような調査結果は本遺跡が造成工事によって消滅したわけではないことを明確に示しており、宇宿団地における開発に際して埋蔵文化財への考慮を促すための具体的な根拠となるものであった。今回の医学部臨床研究棟増築地における調査はこのような経過を受けて実施されたものであり、その結果上述のような成果をあげることができた。長い間等閑に付されてきた宇宿団地遺跡であったが、今回の調査によって、本遺跡が薩摩半島部では検出例の少ない弥生時代の住居址をはじめとする諸遺構を伴う遺跡であることが確認されたのである。

－ 註 －

(1)坪根伸也「鹿児島大学宇宿団地Ⅰ－7・8区における試掘調査」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ』1987年

(2)池畑耕一「古代の薩摩大隅」『大宰府古文化論叢』1983年

(3)池畑耕一・中島哲郎・松永幸男「鹿児島大学工学部機械工学科校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ』1987年

(4)本田道輝「脇田亀ヶ原遺跡について－鹿児島大学宇宿キャンパス及びその周辺地区に於ける採集遺物の紹介－」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅰ』1986年

第2章 鹿児島大学郡元団地G・H－9・10区（電子計算機室増築地）における発掘調査報告

1. 調査に至る経過

鹿児島大学郡元団地内は周知の埋蔵文化財包蔵地であるが、このキャンパスにおいて昭和62年度事業の一つとして電子計算機室の増築工事が計画された。当該地は本キャンパス内でも特に遺構・遺物が密に検出される教養部から理学部にかけての地域の北西に位置し、昭和58年の電子計算機室新築工事に先立って行われた鹿児島県教育委員会による埋蔵文化財発掘調査においては古墳時代の水田址や平安時代の溝等が検出されており、南九州における古代史研究のための貴重な資料を提供している。

今回、電子計算機室を西側へ増築することが計画されたが、当該部分には上述の諸遺構が連続して存在することが確実であり、このため鹿児島大学埋蔵文化財調査室では増築工事に先立ち事前の埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。調査は下記の体制で、昭和62年7月2日から8月12日にかけて行われた。

調査主体者 鹿児島大学長 井形昭弘

調査担当 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室長 上村俊雄

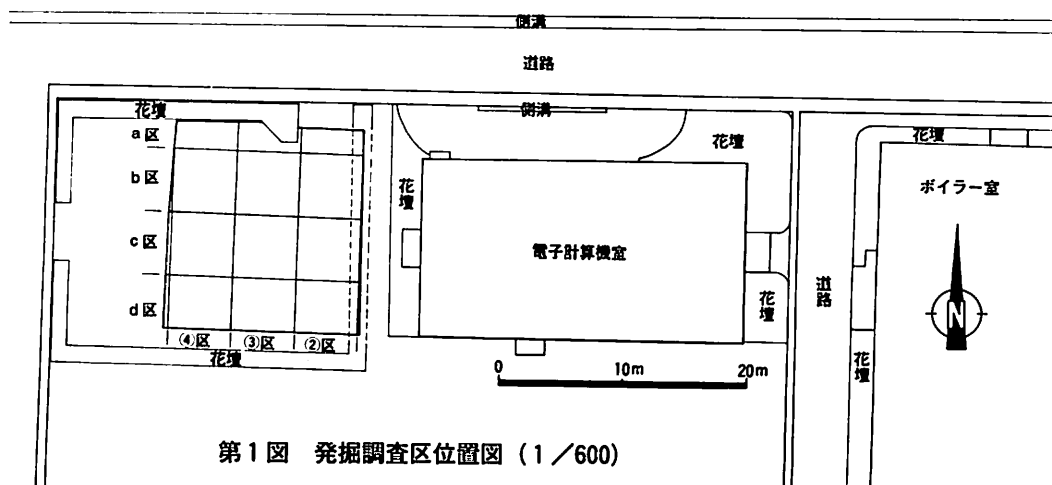
室員 松永幸男・坪根伸也・金子千穂枝

発掘調査作業員

上田平寛 岩戸エミ子 岡崎カスミ 狩集エミ子 東條フミ 名越ヒデ子 野下セツ子 野下萬里子 野下ヨブ子 原口オウト 福永敬子 福永花江 前田スガ 盛満アイ子 盛満ヨシ子 山内いずみ 脇タミ子 脇ツルエ 脇俊子

2. 調査の経過

調査にあたっては、電子計算機室建物北辺延長線と、同建物西辺を西へ5m平行移動させたライ



ンを基準線として一辺 5 m のグリッドを配した。その結果、北から南へ a・b・c・d 区、東から西へ①・②・③・④区が設定されることとなった（第 1 図）。

本地域は駐車場として利用されていたため全域にわたって表層にはアスファルト舗装がなされていた。また、調査区東側の c・d-①区を中心として前回の建設工事の際に掘削された部分がみられた。このため、以上の部分をパワーショベルによって除去した後調査に着手することとなった。

調査の結果、現代の溝・礎石を持つ掘り込み・ピット群、および平安時代の溝が検出されたが、昭和58年の鹿児島県教育委員会による調査で検出された水田遺構については水田層対応層を確認するにとどまった。また、5b層に突きささった状態で西南戦争時のものと考えられる砲弾が出土している。

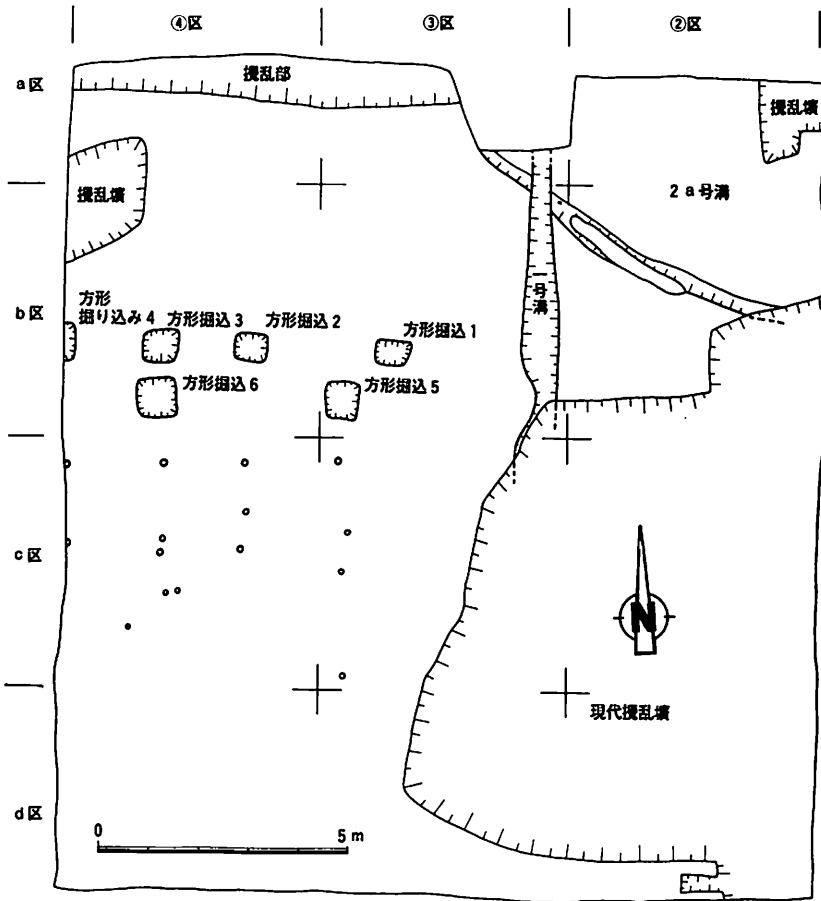
3. 基本層序（付図 1）

今回の調査においては、以下の17層を基本土層としている。

- 1 層：攪乱層
- 2 層：客土
- 3 層：濁灰褐色砂質土層（炭粒・軽石小粒を含む、パミスも若干含む）
- 4 層：明褐色砂質土層（鉄分の浸透があり、パミスを含む）
- 5a層：濁灰褐色砂質土層（鉄分の浸透がみられ、粘質土の極小ブロックが含まれる）
- 5b層：濁淡灰褐色砂質土層（5a層と同質であるが、やや白色味が強い）
- 6 層：灰褐色砂質土層（5a・5b層と同質であるが、若干黒色味が強い）
- 7 層：褐色粘質土層
- 8 層：淡黄白色シルト質土層
- 9 層：暗灰褐色砂混じりシルト質土層（鹿児島県教育委員会による昭和58年の調査において検出された水田層に対応する）
- 10層：白灰色細砂層（部分的に鉄分の浸透がみられる）
- 11層：白灰色粗砂層（軽石を多く含む）
- 12層：黄白色粘土層（鉄分の浸透がみられる）
- 13層：黒色粘土層
- 14層：白色粗砂層（軽石を含むが、その大きさは11層に比べて小さく量も少ない）
- 15層：黒褐色粘土層（植物繊維を多量に含む層で粘性があまり強くない泥炭質を呈する）
- 16層：青灰色粘質細砂層（植物繊維を多量に含む層で、上部に軽石を多量に含む）

4. 遺構

今回の調査においては平安時代以後の遺構が検出されており、時期的に新しいものとしては3層上面で鹿児島農林専門学校時代のものであらうと考えられる溝・煉瓦や塊石を礎石とした掘り込み等がみられる。ここでは便宜的に現代の所産であると考えられる4層以上で検出された諸遺構と5層以下検出遺構とに分けて説明を行っていく。また、昭和58年に行われた鹿児島県教育委員会によ



第2図 4層以上検出遺構 (1/150)

る調査で検出された水田層に相当する9層の状況についても本項で説明を加える。

(i) 4層以上検出遺構 (第2図)

1号溝・煉瓦や塊石を礎石とする方形掘り込み、およびピット群が検出されている。以下、この順に説明を行う。

① 1号溝

③区東縁部をほぼ直線的に南北方向に延びる溝であるが、南側3分の2程を昭和58年の電子計算機室建設工事に伴う掘削によって破壊されている。南北両端での比高差は15cmを測り、南から北へと傾斜する。溝の深さは20～25cmを、幅は50～100cmを測り、その断面形は「U」字形を呈する。3層上面で検出され濁灰色砂質土を埋土とするが、この埋土中からは煉瓦片や磨滅した土器小片が出土している。

② 煉瓦や塊石を礎石とする方形掘り込み

b-③・④区において、6基を検出している。掘り込み内からは直立した状態で柱根が検出され

ており、これらが柱穴であったことが容易に推定できる。また、これらは平面形が一辺約70cmのほぼ方形を呈する掘り込みで、規模および形状をおおよそ同じくしていることが注目される（表1）。この方形掘り込みの底には人頭大の塊石や煉瓦あるいはコンクリート塊が据えられているものが多いが、これらは掘り込み内で検出された柱根の存在から考えて礎石としての役割を果たしていたことが推測される。

表 1 方形掘り込み一覧

No.	検出区	平面規模	現存深度	備 考
1	B-③区	70cm×50cm	40cm	拳大の凝灰岩多数が底面に置かれている
2	B-④区	63cm×55cm	40cm	
3	B-④区	68cm×62cm	20cm	人頭大の凝灰岩2個が底面に置かれている
4	B-④区	70cm× ?	20cm	人頭大の凝灰岩1個が底面に置かれている
5	B-③区	68cm×75cm	52cm	凝灰岩塊石が底面に置かれている
6	B-④区	70cm×78cm	52cm	凝灰岩塊石・煉瓦・コンクリート塊が底面に置かれている

これらの掘り込みは3層上面より上方から掘り込まれたもので、平面的にみると東西方向に二列に並ぶことが看取される。これが掘り込み列の南側に散在するピット群と関連をもつのか、あるいは単独で上部構造を支えたのかということについては不明である。また、この構築物を特定することは困難ではあるが、鹿児島農林専門学校配置図によるとこの掘り込み列が存在する地点は昭和20年の戦災によって焼失した農具室の所在地に一致するようである。その後、今回電子計算機室が増築されるまで当地においては建物の建設が行われていないことから考えて、上記の推定はほぼ妥当なものであろう。

・出土遺物（第3図1）

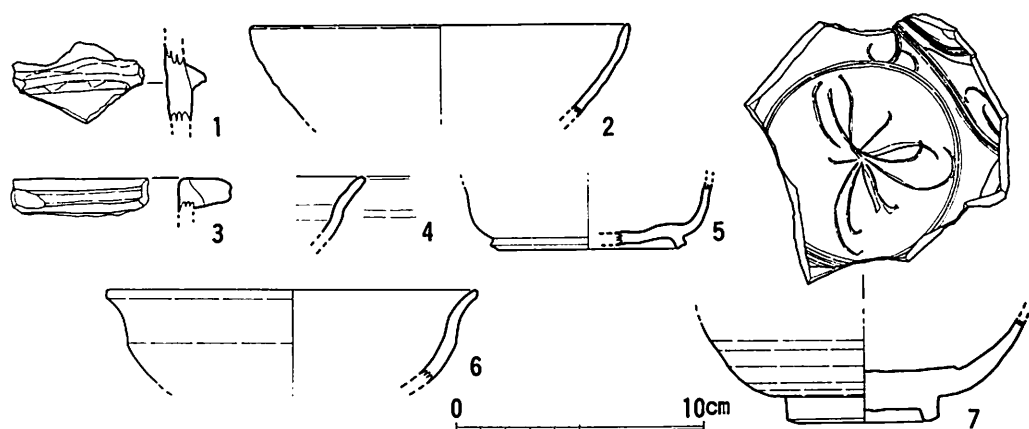
成川式土器の小片で、甕の肩部突帯貼付部分にあたる。突帯には刻みが施されておらず、その上下両面には突帯貼付時のユビオサエの痕跡が残っている。

③ ピット群

c-④区からc-③区西半部にかけて、3層上面で14基が検出されている。穴の径および規模はほぼ同じで、おおよそ径10～13cm・深さ70～75cmを測る。これらには柱根を残すものが多く、前述の方形掘り込み同様、柱穴である。

④ 2a号溝

調査区北西隅において南側肩部のみを検出している。このため溝幅等については不明であるが、検出面である4層上面から溝底までの深さは10～15cmを測る。溝底直上には白色粗砂が薄く広がりその上に淡灰茶褐色土が堆積する。また、溝肩部の一部を縁取るように黄色粗砂の帯状の高まりがみられた。溝埋土中からは土器片数点が出土しているが、これらはすべてかなり磨滅しており、他所からの流れ込みと考えられる。



第3図 1. 掘り込み3内出土土器, 2. 1号土壌埋土内出土土器, 3～7. 2b号溝出土土器 (1/3)

(ii) 5層以下検出遺構

1～3号土壌・2b・3a・3b号溝が検出されている。

① 土壌 (第4・5図)

1号土壌は3a号溝の埋土上面で検出されている (第4図)。長軸200cm・短軸100cm・深さ60cmを測る楕円形土壌である。灰褐色粘質砂を埋土とし、埋土中から口縁部が若干内湾する土師器坏口縁部片が出土している。

2号土壌 (第4図) はc-③区において検出された楕円形土壌で、長軸202cm・深さ40cmを測る。灰褐色粘質砂を埋土とし、1号土壌と規模・形状・埋土がほぼ一致する。遺物の出土はみられなかった。

3号土壌 (第5図) はd-④区南壁際で検出されているが、その南半部は調査区外に広がっている。このため規模・形状等については明らかにできなかったが、幅108cm以上・深さ40cm以上を測る。断面形は、d-④区南壁における観察では、播鉢状を呈する。本土域内の埋土は上から灰色砂質土を基調とした混土・褐色砂混じりシルト質土・灰色砂質土の3層に分層が可能である。本土域からの遺物の出土はなかった。

・出土遺物 (第3図2)

推定復元口径15.4mmを測る土師器碗の口縁部片で1号土壌から出土している。口縁部が若干内湾し、内外両面共にヨコナデ調整によって仕上げられている。

② 溝

2b号溝・3a号溝・3b号溝の順に説明を行う。

(1) 2b号溝 (第4図)

調査区北西部を中心として、2a号溝と位置的にはほぼ重なる部分に存在する。2a号溝同様に溝北側肩部は調査区外に存在するため規模等については明確にできなかったが、溝断面の外郭線をもとに幅約4mの溝であることが推測された。溝底は東南東から西北西へと傾斜し、低くなっている。本溝の埋土は全体的に砂質が強いが、そのほぼ中央部に黒灰色粘質砂・白灰色細砂・黄灰色粗砂のブロックから成る薄い混土層が存在する。また、この混土層より上方に肩部をもつ幅約120cmの小

溝も検出された。

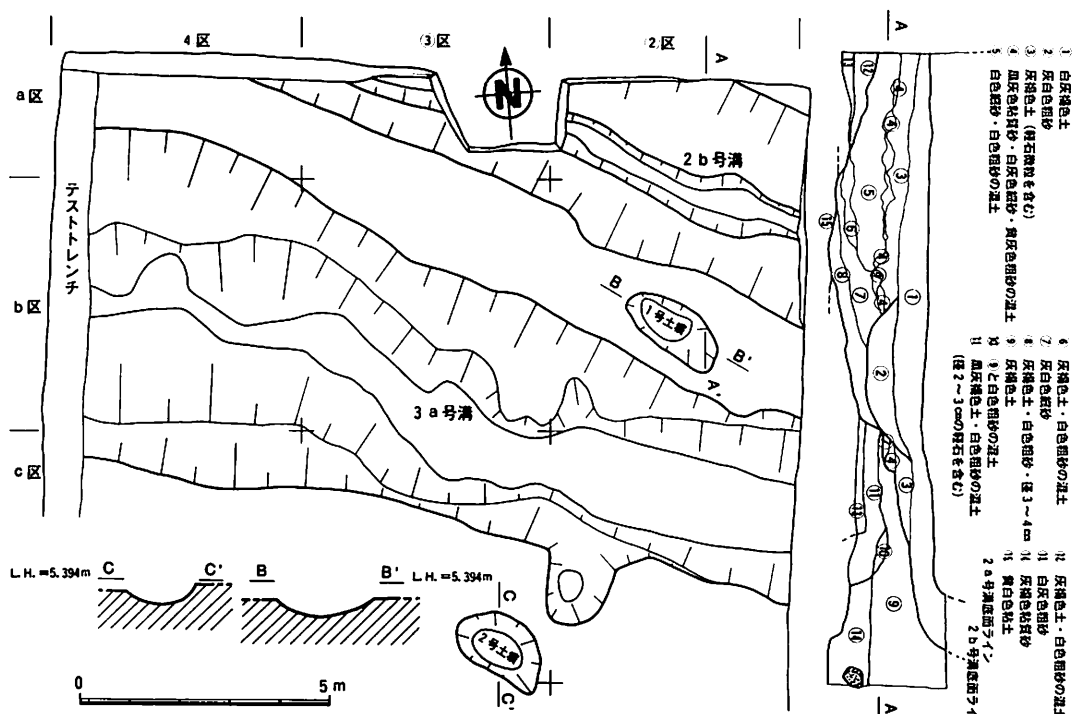
2 b号溝上縁部は5 b層上面にあり、埋土最上面の直上には2 a号溝の埋土が堆積している。このことから考えて、2 a号溝は2 b号溝がその機能を停止し埋土が堆積した後、その上面に生じた帯状の凹部が再び溝として機能したものであることが考えられる。上述の混土層上方の小溝もこれと同じような状況において生じたものであろう。

本溝埋土中からは青磁や内黒土師器が出土している。また、6層上面で検出された3 a・3 b号溝よりも新しい。2 b号溝はその方向や出土遺物の内容から考えて、昭和58年の鹿児島県教育委員会による調査において検出された「溝1」に相当するものであろう。

・出土遺物（第3図3～7・第8図2）

土器（第3図3～7）

3は、弥生時代中期中葉に位置付けられる甕の口縁部片である。外方に張り出した口縁部の上面と胴部上部の内面にはユビオサエの痕が認められる。4は土師器碗の口縁部片で、口縁部付近で若干外反する。小片であるため口径等については不明である。5は、高台を持つ須恵器坏底部片である。短い高台は外開き気味に貼り付けられている。6は口縁部付近がやや強く外反する土師器碗の口縁部片である。推定復元口径14.9cmを測る。内外両面共にケンマが施されている。7は底部から体部下半にかけての青磁破片である。内面見込み部分と体部内面には片切り彫りによって草花文が描かれており、両部分の境には沈線が輪状にめぐっている。体部内外面および内面見込み部には緑



第4図 2 b号溝・3 a号溝・1・2号土層平面図 (1/150) A-A'断面のみ 1/60

色の釉がかかっており、これが一部高台外面から畳付部に及んでいる。高台は底面に作出された円盤上の高まりの内側を掻き取ることによって形成されている。このため高台外円の中心と内円の中心との間に若干のズレが生じている。磁胎は灰白色を呈している。

滑石製品（第8図2）

有孔の滑石製品で、穿孔は両側から行われている。用途などについては不明であるが、錘として利用された可能性も考えられる。

(2) 3a号溝（第4図）

本溝は調査区のほぼ中央部を東南東から西北西の方向に延びる溝で、溝底は西方へ極わずかではあるが傾斜している。後述の3b号溝埋土中に形成された断面形が「U」字形を呈する溝で、その幅は350～650cmを測る。埋土は上部の灰白色砂質土層と下部の粘質土層とに大きく二分されるが、遺物は上部の灰白色砂質土層中に主として含まれ、下部の粘質土層中からはほとんど出土していない。この粘質土中には木葉をはじめとする植物遺体や昆虫の羽等が多量に包含されていた。このような状況は昭和58年の調査において検出された溝状遺構D-2の様相と一致する。

本溝底からは、第6図4に示した土師器坏が底面を上にして床面に張り付くような状態で出土している他、ヘラ切り底の土師器や内黒土師器等が出土している。本溝は調査区東壁土層の観察から、基本土層第7層の堆積後に形成されたことが考えられる。

・出土土器（第6図1～7）

1～5は土師器碗であるが、これらは底部の形態から平底のもの（1～4）と高台をもつもの（5）との二者に分類される。前者は全て底部にヘラ切りの痕跡を残すもので、法量に若干の相違はあるもののほぼ同様な器形を呈している。底部切り離し後の整形は軽くナデ調整が加えられているのみで、あまり丁寧には行われていない。3には底部端から体部にかけて縦位のナデつけたような凹線が見られるが、底部端付近を抑え付けて凹部を形成することは4においても認められている。この特徴がこれらの土師器の製作者集団のクセを示すものであるのか、今後類例の増加を待って検討する必要がある。5は短い脚が外方へ踏ん張ったような形状を呈する坏の底部片である。底部内面及び底面には黒斑が見られる。

6は、底部に外方へ踏ん張った高台を付けた碗である。内外面及び胎土の色調は暗灰色を呈しており、意図したものであるのか否かは不明であるが、高台見込み中央には径2.6cmほどの円が描かれている。7は内黒土器で内面にはケンマが施されている。底部には先細りの低い高台が付いており、高台内側付けね付近は強くナデつけられている。

(3) 3b号溝（第5図）

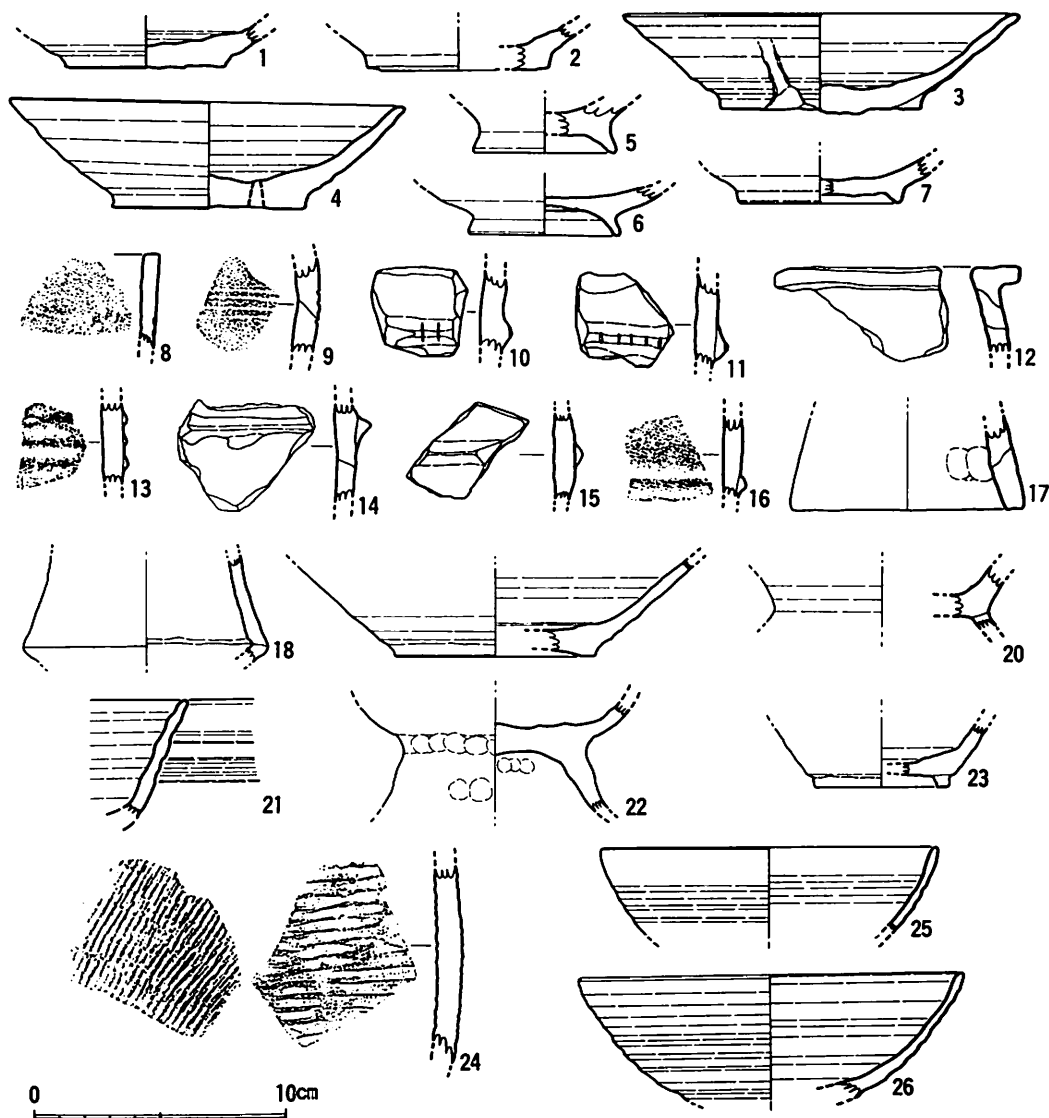
灰白色細砂を埋土とする溝で、幅6～9.5mを測る。第15層である黒褐色粘質土が内側へ向かって若干傾斜しながら溝両側にテラス状に張り出している。このため黒褐色粘質土層には多数の亀裂が走り、溝中央部ではブロックとして溝底へ沈下している状況がみられた。遺物は前述の灰白色細砂とこの黒褐色粘質土間の灰白色粗砂から出土するが、湧水のため後者の完掘は断念している。ま

す甕の胴部片である。

14～18は成川式土器である。14～16は甕の小片でいずれも三角突帯が施されている。17は甕の脚で、やや厚手で若干外開きしながら直線的にのびる。内面にはユビオサエの痕が認められる。18は柑の胴部片である。外方に張り出した部分には明瞭な稜線が走る。

以上の8～18はいずれもかなり磨耗しており、器面調整などについて十分な観察を行うことは困難であった。これらは他所からの流れ込みと考えられ、3 b号溝の形成時期を示すものではない。

19は底面にヘラ切り痕を残す土師器杯の体部下半から底部にかけての破片である。3 a号溝出土のものとはほぼ同様の形状を呈する。20は高台をもつ内黒土師器杯の底部小片である。内面を除き全



第6図 第3 a・3 b号溝出土土器 (1/3)

1～7. 第3 a号溝出土, 8～27. 第3 b号溝出土土器

体に磨耗している。21は外開きしながらほぼ直線的に延びる体部に、若干外反する口縁部が続く土師器碗である。ロクロによる成形の痕が、数条の横走る凹線となっている。22はゆるやかに外開きする脚台をもつ土師器で、内外面に丹が塗られている。脚部上には浅い体部がのるようである。体部内底面にはロクロ成形の痕が明瞭に残っている。

23は逆台形の低い高台をもつ須恵器坏である。外面は淡黒灰色を、内面は淡灰白色を呈する。24は内外面に平行叩きを施した大甕の胴部片である。内外面共に淡灰色を呈する。

25・26は丸味をもった体部を呈する瓦器碗である。25は口縁部小片であるが、内外面に丁寧なケンマが施されている。色調は淡灰褐色を呈するが外面は土中の鉄分の影響を受けたためか若干赤色味を帯びている。26も内外両面にケンマを施すが、外面のケンマは底部際よりやや上位までしか及んでいない。内面は炭素が吸着して黒褐色を呈しており、外面は口縁部から底部へと漸移的に淡褐色から灰褐色へと色調が変化する。

軽石製品（第8図3）

長軸7.4cm・最大幅5.5cmを測る軽石製品で、長軸方向に平行する細長い凹部が形成されている。いわゆる「陰石」として扱えられるものであろうか。

③ 水田層対応層

昭和58年に鹿児島県教育委員会によって実施された調査において、調査区中央を東西に流れる河川を挟んでその北側と南側の部分で水田址が検出されている。今回の調査において前回調査時の所見をもとにこの水田層を追求した結果、第9層がそれに相当することが判明した。この第9層の拡がりには川の北側部分ではほとんど残存しておらず、このため南側においてその様相を検討することとなった。

第9層は濁灰褐色を呈し、層厚約10cmを測る。その上面は水平を保つ部分が調査区南壁際にわずかに認められるのみであり、南から北へと若干傾斜している。特に、南西隅においてはかなり急な傾斜面が認められる。この部分では本層直下の粗砂層上面も急傾斜を示しており、本来は周囲よりも一段高い部分をなしていたことが推測される。

今回の調査においては、前回検出されている高低差による地区割りを確認することはできなかった。また、本層上面において多数みられた長径10～30cmほどの凹部もより上層からの落ち込みであり、本層に伴うものではなかった。ただ、径2～3mmの極めて小さな凹部が本層上面で斑点状に密に認められたことが注意を引いた。

本層は前回調査時に実施されたプラントオパール分析結果や、考古学的にも高低差による地区割りが検出されていること等から考えて水田層であることが確実であろう。従って、今回検出部分の本層上面が水平面を保っていないこと、及びその傾斜方向が川の方へと向かうことは本地域がこの河川のオーバーフローによって侵食されたことを示すものであると考えられる。

なお、調査区東壁の土層観察によって、本層が3b号溝埋没後で、3a号溝が形成される以前に堆積したことが知られた。両溝が出土遺物からみて平安時代の所産と考えられることから、古墳時代に比定されている本水田層の年代については修正の必要があろう。

5. 遺物 (第7～8図)

本項においては、以上の部分において言及できなかった包含層出土遺物について説明を加える。

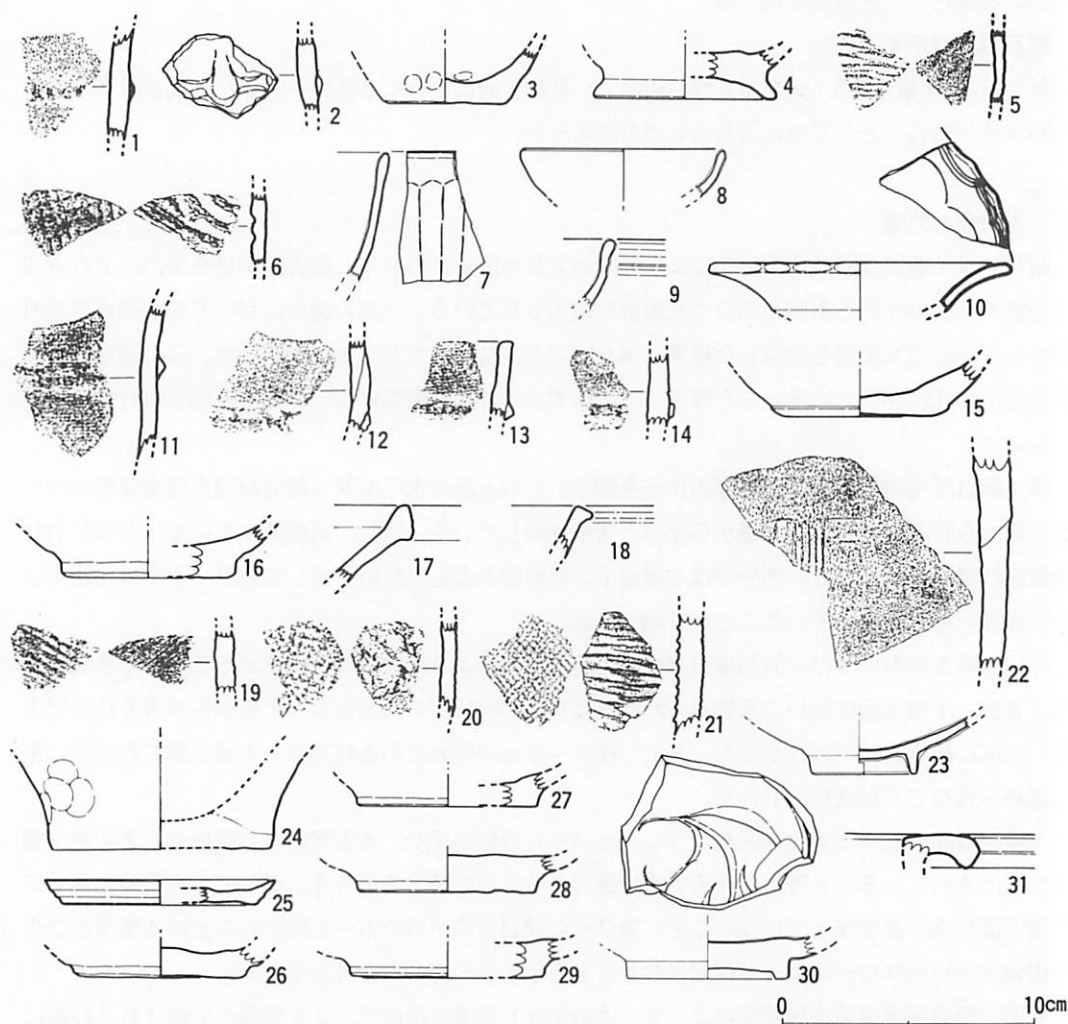
① 土器

・ 3層出土土器 (第7図6)

須恵器小片で、内外面にそれぞれ同心円・格子目の叩き痕が認められる。外面には自然釉がかかる。

・ 4層出土土器 (第7図1～5・7～10)

1・2は成川式土器甕の肩部片である。いずれも三角突帯が貼付されており、1には縦位の小型の刻みが、2には指頭押圧痕が見られる。3・4は土師器坏底部であるが、3の底面にはへら切りの



第7図 包含層出土土器 (1/3)

1～10. 4層出土土器, 11～23. 5層出土土器, 24～30. 6層出土土器, 31. 攪乱部出土土器

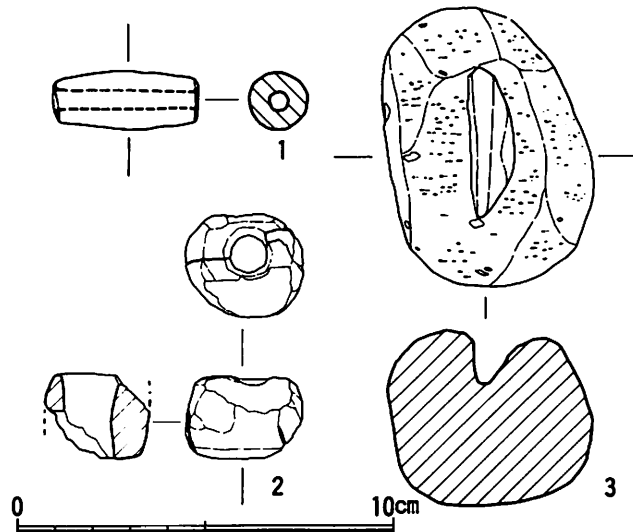
離し後軽いナデ調整が施されている。4は若干裾広がり気味の高台をもつ。5は外面に平行タキを施した須恵器小片で、内面はナデによって仕上げられている。7は緑色の釉がかかった青磁碗である。体部外面には細身の蓮弁文が施されている。内外面共に全面に貫入が見られる。磁胎はやや濁った灰色を呈し、黒色の微細粒を含む。8は体部が浅く、淡い緑色の釉がかかった青磁で、磁胎は淡灰色を呈する。9は口縁部直下に二条の横走る凹線が施されているもので、火を受けたためか釉が変色し白っぽくなっている。10は青磁稜花皿の口縁部片で稜花様の口縁部の周縁に沿って3条の沈線がめぐる。やや淡い緑色の釉がかかっており、内外両面には貫入が見られる。

・ 5層出土土器 (第7図11~23)

11~14は成川式土器甕の肩部付近の破片である。11はおそらく口縁部がゆるやかに外開きする甕で、肩部に三角突帯が付されている。12は肩部にいわゆる「絡縄突帯」が貼付されているもので、外面には斜位のケズリ痕が認められる。13は口縁端からあまり下がらない位置に三角突帯を貼付する甕で、口縁部に黒斑が認められる。14は肩部に断面「カマボコ」形の突帯を付した甕である。15は土師器坏底部片である。底面のヘラ切り離し痕は念入りにナデ消されている。16も底部にヘラ切り痕を残す土師器坏底部片である。底部からごくわずかに立ち上がり、ほぼ直線的に上方へと延びる。17~21は須恵器片である。17は甕の口縁部片で、口縁端は上方に立ち上がり下方にも若干拡張している。色調は口縁端外面が黒灰色である他は、内外面共淡青灰色を呈している。18は口縁端部を外方へ拡張した口縁部片である。19は外面の平行叩き痕の上から軽いナデ調整が加えられており、内面には回転ナデが施されている。20・21は外面に目の細かい格子目叩き痕を残す。22は常滑焼きの大甕の胴部片と考えられるもので、外面に押印文が施されている。23は淡緑色の釉が高台畳付部を除く全面に施されている青磁碗底部片で、ほぼ直立する高台は下方へとゆるやかなカーブを描きながらすぼむ。

・ 6層出土土器 (第7図24~30)

24は成川式土器の底部である。おそらく壺の底部であろうと考えられる。25は土師器皿で底面に糸切り痕を明瞭に残す。26~29は土師器坏底部片で、いずれも底部切り離しはヘラ切りによっている。30は緑色の釉がかかった青磁碗底部片で、高台外面まで施された釉が一部高台畳付から高台内面にまで及んでい



第8図 土鍾・有孔滑石製品・軽石製品 (1/2)

る。高台は体部底面に接合された円盤状の粘土板の内側を掻き取ることによって作出されている。

・攪乱部出土土器（第7図31）

土師器甕口縁部片で、外方に拡張された口縁部は端部が下方に若干拡張されている。

② 土錘（第8図1）

5層から出土した土錘である。色調はやや淡い褐色で中膨らみの形状を呈し、外面はナデ調整が施されている。

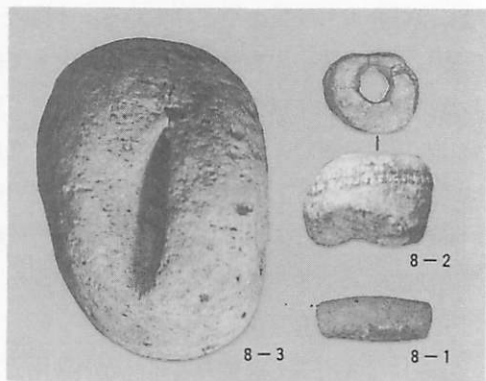


写真1 特殊遺物

6. まとめ

今回調査を行った地点は昭和58年に鹿児島県教育委員会によって発掘調査が行われた電子計算機室建設地の西側に連続する部分であり、その際に検出された数条の溝及び水田が検出されることが予想された。調査の結果はこの予想を裏付けるものとなり、南九州地方では未だ類例の少ない平安時代の遺構・遺物が検出されている。

調査の結果、16層の基本土層が認められたが、このうち2層上面から塊石・煉瓦等を礎石として持つ方形の掘り込みが、3層上面からピット群と溝（1号溝）が、また4層上面からは浅い溝（2a号溝）が検出されている。これらの遺構についてはその年代を確定できるような資料を得ることができなかったが、2層上面において検出した方形の掘り込みについては、それが煉瓦を掘り込み内に据え付けていること、及び鹿児島農林専門学校時代の建物にこの方形掘り込み列に一致するものがあることから、その時期・性格等を推測することができた。

さらに、6層中において溝（2b号溝）が、また、7層上面において溝（3a号溝・3b号溝）・土壌が検出された。これらのうち2b号溝が鹿児島県教育委員会による調査の際に検出されたD-1に、また、3a号溝がD-2にそれぞれ対応する。これらの遺構からは、青磁・土師器・黒色土器・瓦器等が出土しており、これらが平安時代〜鎌倉時代の所産であることを示している。前回の調査において検出された古墳時代の水田層は第9層にあたるが、本層は調査区東壁の土層観察によると3b号溝埋没後で、3a号溝が形成される以前に堆積したことが知られたため、本水田層の年代については修正の必要が認められることとなった。

鹿児島大学郡元団地遺跡は古墳時代成川式期の遺跡として既に著名であるが、今回の調査においては鹿児島県内ではまだ検出例の少ない平安時代の遺物・遺構が主体をなしており、本遺跡の重要性がさらに認識されることとなった。

※ 電子計算機室増築地出土の砲弾について

今回の電子計算機室増築地における発掘調査において、西南戦争当時用いられた砲弾が出土している。これはa-④区第5b層を掘下げている際に検出されたもので、尾部を上にし若干北東へ傾

いてはいるもののほぼ垂直に突き刺さるような状態で出土している。この砲弾は長さ17～18cm・底径8cm程を測り、先端部は先ずばまりとなる。また、胴部下半には径1cm程のボタン状の突起が二段巡っている。

この砲弾は現地において鹿児島南警察署員によって取り上げられたあと、6月24日には鹿児島中央警察署から熊本市の陸上自衛隊第8師団へ送られ、同師団第8武器隊の牛島一尉によって鑑定がなされた。牛島一尉に御教示頂いたところによると、今回検出された砲弾は西南戦争当時の官軍が用いた砲弾で、「四斤野砲弾（通称 四斤弾）」と呼ばれていたものであるとのことであった。

なお、本砲弾は内部に黒色火薬が詰まったままであり、また信管も付いているため危険弾として処理されることとなった。

表2 土器観察表

図番号	出土層位・遺構	調 整		色 調	備 考
		外 面	内 面		
3-1	方形掘込 3	ナデ 突帯：ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	外：濁灰褐色 内：濁灰褐色	突帯上のユビオサエの痕は比較的よく残る。白色細粒を含む
3-2	1号土壇	ヨコナデ	ヨコナデ	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	ロクロ成形 胎土は微細
3-3	2b号溝	口縁部上面：ユビオサエ→ヨコナデ 口縁部下面：ヨコナデ	ユビオサエ→ヨコナデ	外：淡褐色 内：淡灰褐色	口縁部上面のユビオサエの痕はよく残っている カクセン石を含む
3-4	2b号溝	ケンマ?	ナデ	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	若干磨耗しているため調整など不明 胎土は微細
3-5	2b号溝	回転ナデ	回転ナデ	外：暗青灰色 内：青灰色	胎土は微細
3-6	2b号溝	上半部：ケンマ 下半部：ナデ?	ケンマ?	外：淡灰褐色 内：淡褐色	ウンモ細片を含む
6-1	3a号溝	ユビオサエ→ヨコナデ	ユビオサエ→ナデ	外：灰白褐色 内：灰白褐色	底面へラ切り→軽いユビオサエ 胎土は微細
6-2	3a号溝	ヨコナデ	ヨコナデ	外：淡灰白色 内：淡灰白色	底面へラ切り→ナデ 胎土は微細
6-3	3a号溝	ユビオサエ→ヨコナデ	ユビオサエ→ヨコナデ	外：淡灰褐色 内：濁灰褐色	底面へラ切り→周縁部にナデ調整を施す

図番号	出土層位・遺構	調 整		色 調	備 考
		外 面	内 面		
6-4	3 a号溝	上半部：回転ナデ 下半部：ナデ	回転ナデ 底面：ユビオサエ→回転 ナデ	外：淡黄白色 内：淡黄白色	口縁部に一部黒斑が 認められる 底部に焼成時の亀裂 がある 胎土は微細
6-5	3 a号溝	体部・底面ともにナデ	ナデ	外：淡褐色 内：黒灰色	内面及び底面に黒斑 が認められる カクセン石・ウンモ を含む
6-6	3 a号溝	体部：ナデ 底面：ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	外：暗灰色 内：暗灰色	瓦質 胎土は微細
6-7	3 a号溝	体部：ケンマ 底面：ナデ	ケンマ	外：やや淡い 灰色 内：黒灰色	高台内側を一周ナデ つける 胎土は微細
6-8	3 b号溝	ナデ？	ナデ？	外：灰褐色 内：淡褐色	内外面ともに磨耗 石英・カクセン石を 含む
6-9	3 b号溝	ナデ	ユビオサエ→ナデ	外：やや淡い 褐色 内：暗灰色	カクセン石を含む
6-10	3 b号溝	ナデ？	ナデ？	外：黒褐色 内：濁褐色	内外面ともに磨耗 石英を含む
6-11	3 b号溝	ユビオサエ→ナデ？	ユビオサエ→ナデ	外：淡褐色 内：淡褐色	カクセン石を含む

図番号	出土層位・遺構	調 整		色 調	備 考
		外 面	内 面		
6-12	3 b号溝	口縁部上面：ユビオサエ→ナデ 体部：ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	外：濁灰褐色 内：淡褐色	口縁部下にはユビオサエの痕が明瞭 石英・カクセン石を含む
6-13	3 b号溝	ナデ	ナデ	外：淡黄白色 内：淡褐色	三角突帯上には細かい刻みを付す ウンモを含む
6-14	3 b号溝	突帯：ユビオサエ→ナデ 体部：ナデ	ナデ	外：褐色 内：褐色	内面には砂粒が動いた痕が認められる 若干磨耗している 石英・黒曜石片を含む
6-15	3 b号溝	?	?	外：淡褐色 内：淡褐色	内外両面とも著しく磨耗している 石英を含む
6-16	3 b号溝	ナデ	ナデ	外：褐色 内：褐色	カクセン石を含む
6-17	3 b号溝	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	外：暗褐色 内：暗褐色	石英を含む
6-18	3 b号溝	ナデ?	ユビオサエ→ナデ	外：淡灰白色 内：淡灰白色	石英を含む
6-19	3 b号溝	ナデ	ユビオサエ→ナデ	外：淡灰白色 内：淡灰白色	底面へう切り→ナデ 胎土は微細

図番号	出土層位・遺構	調 整		色 調	備 考
		外 面	内 面		
6-20	3 b号溝	ナデ	ケンマ?	外：淡黄白色 内：黒灰色	かなり磨耗 胎土は微細
6-21	3 b号溝	ナデ	ナデ	外：濁灰褐色 内：淡褐色	ウンモを含む
6-22	3 b号溝	体部～脚部：ユビオサエ →ナデ 底面：ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	外：淡黄褐色 ～褐色 内：淡黄褐色	胎土は微細 ウンモ・カクセン石 を含む
6-23	3 b号溝	ナデ	ナデ	外：暗青灰色 内：青灰色	胎土は微細
6-24	3 b号溝	平行叩き	平行叩き	外：灰白色 内：淡青灰色	内面の叩き目のほう が外面より目が粗い ウンモ微細片を含む
6-25	3 b号溝	ケンマ	ケンマ	外：褐色 内：淡褐色	内外両面とも丁寧に ケンマしている 胎土は微細
6-26	3 b号溝	ケンマ	ケンマ	外：淡褐色～ 暗灰褐色 内：黒褐色	内外両面とも丁寧に ケンマしている 胎土は微細
7-1	4層	ナデ 突帯：ヨコナデ	ナデ	外：濁褐色 内：淡褐色	カクセン石含む
7-2	4層	ナデ	ナデ	外：濁灰褐色 内：淡褐色	ウンモ・カクセン石 含む

図番号	出土層位・遺構	調 整		色 調	備 考
		外 面	内 面		
7-3	4層	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	底面へラ切り→ナデ 胎土は微細
7-4	4層	ヨコナデ 底面：ユビオサエ→ナデ	ナデ	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	胎土は微細 ウンモ・カクセン石 含む
7-5	4層	平行叩き	ユビオサエ→ナデ	外：青灰色 内：やや暗い 青灰色	外面には自然釉がか かる ウンモ微細片含む
7-6	3層	格子目叩き	同心円叩き	外：青灰白色 内：青灰白色	外面には自然釉がか かる
7-11	5b層	ユビオサエ→ナデ 突帯：ヨコナデ	ユビオサエ→ナデ	外：濁褐色 内：淡褐色	カクセン石含む
7-12	5b層	ユビオサエ→ケズリ→ナ デ 突帯：上下から挟んで押 圧を加えた痕が明瞭	ユビオサエ→ナデ	外：淡灰褐色 内：濁褐色	カクセン石を含む いわゆる絡縄突帯を 付す
7-13	5b層	ナデ 突帯：ヨコナデ	ユビオサエ→ナデ	外：濁灰褐色 内：褐色	ウンモ・カクセン石 を含む
7-14	5b層	ナデ 突帯：頂部をナデつける	ユビオサエ→ナデ	外：黒灰色 内：淡褐色	カクセン石を含む
7-15	5層	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	胎土は微細 底面へラ切り痕を丁 寧にナデ消す

図番号	出土層位・遺構	調 整		色 調	備 考
		外 面	内 面		
7-16	5層	ナデ	ナデ	外：淡黄褐色 内：濁黄褐色	底面を軽くナデつける カクセン石を含む
7-17	5層	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ナデ	外：淡青灰色 内：淡青灰色	口唇部付近は暗青灰色を呈する 焼き締まりはあまり良くない
7-18	5層	ナデ	ナデ	外：青灰色 内：青灰色	
7-19	5層	平行叩き	ヨコナデ	外：暗青灰色 内：青灰色	胎土は微細
7-20	5層	格子目叩き	剥落のため不明	外：濁青灰色 内：青灰色	外面には自然釉がかかる カクセン石？を含む
7-21	5層	格子目叩き	平行叩き	外：淡濁灰色 内：淡灰色	焼き締まりが良くない
7-22	5b層	ユビオサエ→ナデ	ユビオサエ→ケズリ→ナデ	外：青灰色 内：青灰色	外面に押印文が施されている
7-24	6層	ユビオサエ→ナデ	—————	外：淡褐色	底面はユビオサエの後を軽くナデている カクセン石を含む
7-25	6層	ヨコナデ	ユビオサエ→ナデ	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	底面糸切り 胎土は微細

図番号	出土層位 ・遺構	調 整		色 調	備 考
		外 面	内 面		
7-26	6層	ナデ	ユビオサエ→ナデ	外：淡黄白色 内：淡黄白色	底面はヘラ切り痕を ナデ消している 胎土は微細
7-27	6層	ナデ	ナデ	外：淡黄白色 内：淡黄白色	胎土は微細 底面ヘラ切り→ナデ
7-28	6層	ナデ	ユビオサエ→ナデ	外：淡黄白色 内：淡黄白色	胎土は微細 底面ヘラ切り→ナデ
7-29	6層	ナデ	ナデ	外：淡黄白色 内：淡黄白色	胎土微細 底面ヘラ切り→ナデ
7-31	攪乱部	ヨコナデ	ヨコナデ	外：淡黄褐色 内：淡黄白色	胎土は微細

第3章 鹿児島大学宇宿団地Ⅰ－8区（医学部臨床研究棟増築地）における発掘調査報告

1. 調査に至る経過

今や50万の人口を擁する鹿児島市は、昭和40年代から居住空間を南九州特有のシラス台地に求め、大規模な宅地造成が開始された。現在、宇宿キャンパスの位置する鹿児島市宇宿町1208－1、通称「脇田亀ヶ原」と呼ばれる当台地も例外ではなく、昭和45年頃に医学部・大学病院の新築移転に先立ち大規模な造成工事が行われたのである。造成工事では当時段々畑であった旧地形を利用し、削平・地均が行われた。その結果、夥しい数の遺物の散布が認められ、遺跡の存在が確認されたが、そのまま十数年が経過した。昭和61年に至り、法文学部の本田道輝助手により、造成終了直後に採集された遺物の紹介が行われ、改めて遺跡の重要性が認識されるとともに、遺跡の現状把握の必要性が取り沙汰された。このような折、医学部敷地内にへい獣焼却炉の新設、臨床研究棟の増築が計画されたため、鹿児島大学埋蔵文化財調査室ではそれらの工事に先立ち、発掘調査、試掘調査をそれぞれ実施した。へい獣焼却炉建設予定地内の発掘調査では4.3m×2.2mという狭小な調査面積であったにもかかわらず、住居址様遺構（一部）、弥生中期土器片、石斧、縄文時代早期土器（前平式）等が出土し、宇宿キャンパス内に遺跡が残存していることを明確に示した。また、臨床研究棟の増築予定地内の試掘確認調査では、成川式土器（古墳時代）を伴う溝状遺構を検出し、増築地内にも遺跡が存在している事実を明らかにした。埋蔵文化財調査室ではこれらの調査結果を踏まえ、臨床研究棟の増築予定地内の全面発掘調査を実施することになったのである。

2. 調査組織

調査期間 昭和62年9月2日～昭和62年12月15日

調査主体者 鹿児島大学学長 井形昭弘

調査体制 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

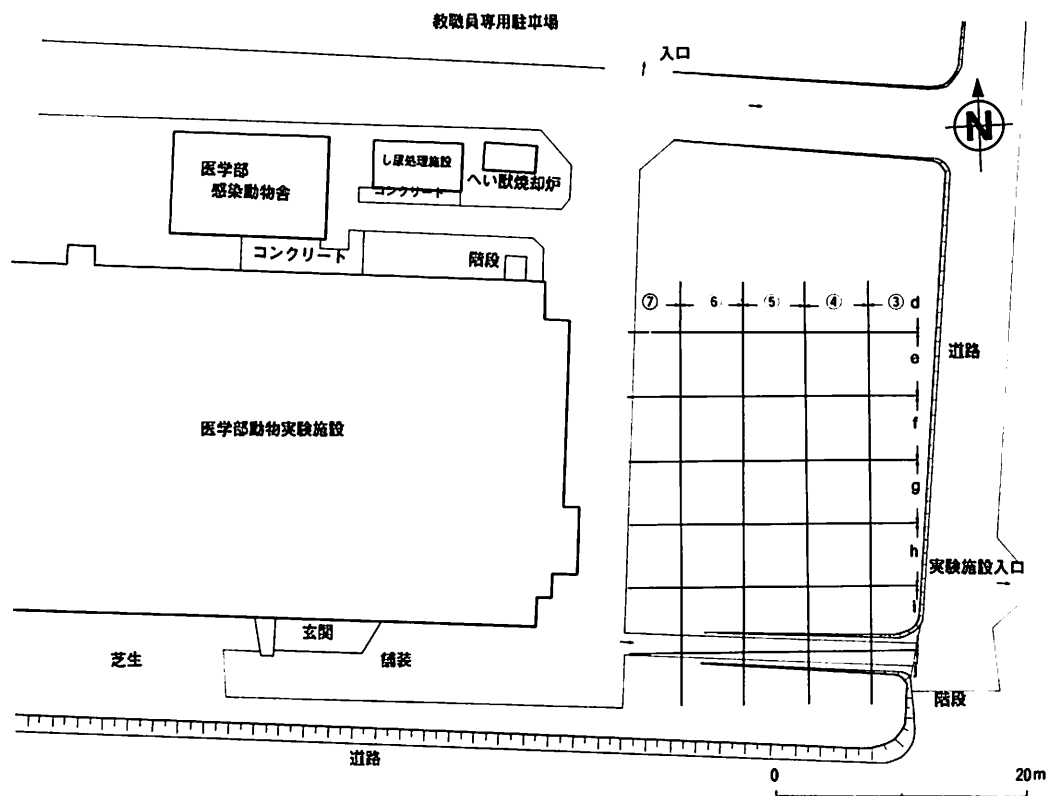
室長 上村俊雄

室員 松永幸男・金子千穂枝・坪根伸也

調査協力者 下山寛・中摩浩太郎・八木澤一郎（法文学部人文学科研究科文化基礎論）、上村純一・後藤方彦・松尾宏・豊見山禎（法文学部人文学科考古学専攻）、雨宮瑞生（筑波大学大学院）

発掘調査作業員

上田平寛・岩戸エミ子・岡崎カスミ・狩集エミ子・東條フミ・名越ヒデ子・野下節子・野下萬里子・野下ヨブ子・原口オウト・福永敬子・福永花江・前田スガ・盛満アイ子・盛満ヨシ子・山内いずみ・脇タミ子・脇ツルエ・脇俊子



第9図 調査区位置図 (1/600)

3. 調査の経過

今回の調査対象地域は、鹿児島大学宇宿団地に設定した一辺50mの方形地区割のうち、宇宿キャンパスのほぼ中央の地域にあたるⅠ-8区内の約580㎡である。

調査に際しては前述の方形地区割をさらに5mの区画で方眼を組み、北東角を基点として北から南へa・b・c…j区列、東から西へ①・②・③…⑩区列として区画設定し、5m×5mにより区画される各区をa-①区、a-②区……と呼称する小グリッドとして設定した。

この区画設定により今回の調査地点はd～j-③～⑦区にわたる地域内に位置することになる。調査に際しては、試掘調査の段階でプライマリーな層序の上に造成時の客土が厚く堆積していることが判明していたので、重機により表土を剥いだ後に調査を行った。その結果、アカホヤ上面において住居址、溝状遺構、土壌等を検出し、これらについて記録保存の処置を講じた。アカホヤ中に遺物の存在がないことを確認した後、重機によりアカホヤを除去し、下層の調査をおこなったが土器小片数点と石斧片1点を確認したのみであった。縄文早期の遺物包含層の中心は今回の調査区よりも前述のへい獣焼却炉方向、すなわち北側に存在すると予想される。またアカホヤ除去後、Ⅵ層上面検出時において、調査区のほぼ全域に点在する形で「局部断層」が確認された。なお、調査区南側(j-⑤区)に4m×2.5m程の土層観察のための深掘部を設け、シラスに達するまで掘り下

げを行った。薩摩火山灰は約1.5mの厚さで堆積し、その下層に遺物の出土は無かったものの、シラスの腐食土であるいわゆる「チョコ層」の存在が確認された。本層には旧石器時代の遺物が包含される例が多く、鹿児島大学宇宿団地遺跡においても今後同層に対して十分な注意を払う必要がある。

4. 基本層位

当地は造成時に削平・盛土を行い、地均することで平坦面を形成し、調査前は駐車場として利用されていた。土層の概要はすでに試掘確認調査報告中に示しているが、今回の本調査報告では前述の試掘時に設定した基本土層をさらに細分し、以下に示す。

I層：攪乱（客土）

造成時の盛土である。バラス・ピンクシラスを多量に含み、II層以下の土層小ブロックを包含する。そのため弥生中期土器片、縄文式土器片、中近世陶磁器等を層中に内包する。版築状に押し固められ、非常に硬質である。

II層：茶褐色土層（軽石の小粒を含む）

調査区全域にわたり約20cmの厚さで存在する。上層の影響で堅くしまっており、染め付け片等を少量出土する。また、調査区南側に位置する近年の攪乱墳中の主要覆土となっており、造成前の耕作土であった可能性が高い。

III層：黒褐色土層（軽石の小粒を含む）

II層と同様に、堅くしまる。特に調査区北側に比較的良好に残存し、青磁の小片などを出土する。

IV層：黒褐色腐食土層

弥生中期土器、成川式土器を出土する遺物包含層である。下層は漸移的に淡茶褐色土へと変化し、V層に至る。層上部に成川式土器と弥生中期土器を出土し、層下部では弥生中期土器を単純に出土するようになる。

V層：黄橙色火山灰層（アカホヤ）

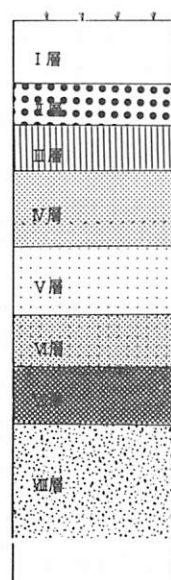
鬼界カルデラを給源とする火山灰層に比定され、調査区全域に約20～40cmの厚さで堆積する。降下軽石、火砕流はみられず、最下部に赤橙色を呈する少量の火山豆石を認める。また、場所によっては層上部が非常に濁っており、二次堆積層の存在も考えられる。無遺物層である。

VI層：淡黒茶褐色土層

非常に硬質であり、黄色軽石粒を含む。VII層との境界は不明瞭。

VII層：黒褐色土層

黄色軽石を多量に含み、硬質である。下部になると黒味を増し、黄色軽石の包含率も増加する。遺物包含密度は希薄ながらも、縄文時代早期遺物を出土する。



第10図 基本土層模式図

Ⅷ層：黄褐色降下軽石層

黄色を呈する降下軽石と灰褐色の粗砂状火山灰の互層により構成される。また最上部には淡橙白色を呈する硬質層が厚さ約5cmで存在する。本層は桜島を噴出源とする薩摩火山灰層に比定され、約11,000年前のものとされているものである。無遺物層である。

5. 遺構と遺構出土の遺物

今回の調査では住居址3, 溝状遺構8（道路状遺構を含む。）、土壌・柱穴多数を検出した。

遺構の検出は、すべてアカホヤ上面においておこなっている。以下に各遺構と伴出遺物について説明を加える。

(1) 竪穴住居址

調査区内において3基検出した。便宜的に検出順に1号～3号住居址と呼称する。2号住居址のみ円形プランを呈し、他の2基については楕円形プランをなすものと考えられる。いずれも竪穴内に炉跡、柱穴は確認されていない。また、これら3基の竪穴住居址はその規模、形態、覆土状況、出土遺物の内容等から、同一時期の所産に帰属されよう。

表3 住居址一覧

遺構名	図番号	区	域	プラン	主軸長(m)	短軸長(m)	底面積(m ²)	備 考
1号住居	第12図	h-⑥・⑦	i-⑥・⑦	楕円形	3.87	3.0	(9.75)	住居址西側角に不定円形をなす落ち込み。
2号住居	第13図	e-③・④	f-③・④	円形	3.7	3.7	(9.38)	
3号住居	第15図	e-⑤・⑥	f-⑤・⑥	楕円形	(3.8)	(3.35)	(9.5)	

○1号住居址（第12図）

h-⑥, ⑦区・i-⑥, ⑦に位置する。長軸3.87m, 短軸3.0mをはかり、南北方向に長軸をもつ楕円形を呈する竪穴住居址である。南側部分は近年の攪乱溝等により切られており遺存状況は北側部分に比して良好でない。遺存状況の最も良好な北側部分で現存壁高14.0cmをはかる。覆土は淡茶褐色土を呈する単一土層により形成される。プラン内に柱穴、炉跡は確認されなかったが、住居址西側角に径約50cm, 深さ約18cmの不定円形をなす落ち込みを確認した。この落ち込みは住居址埋土と同一土壌を有し、カーボン小粒を少量包含する。

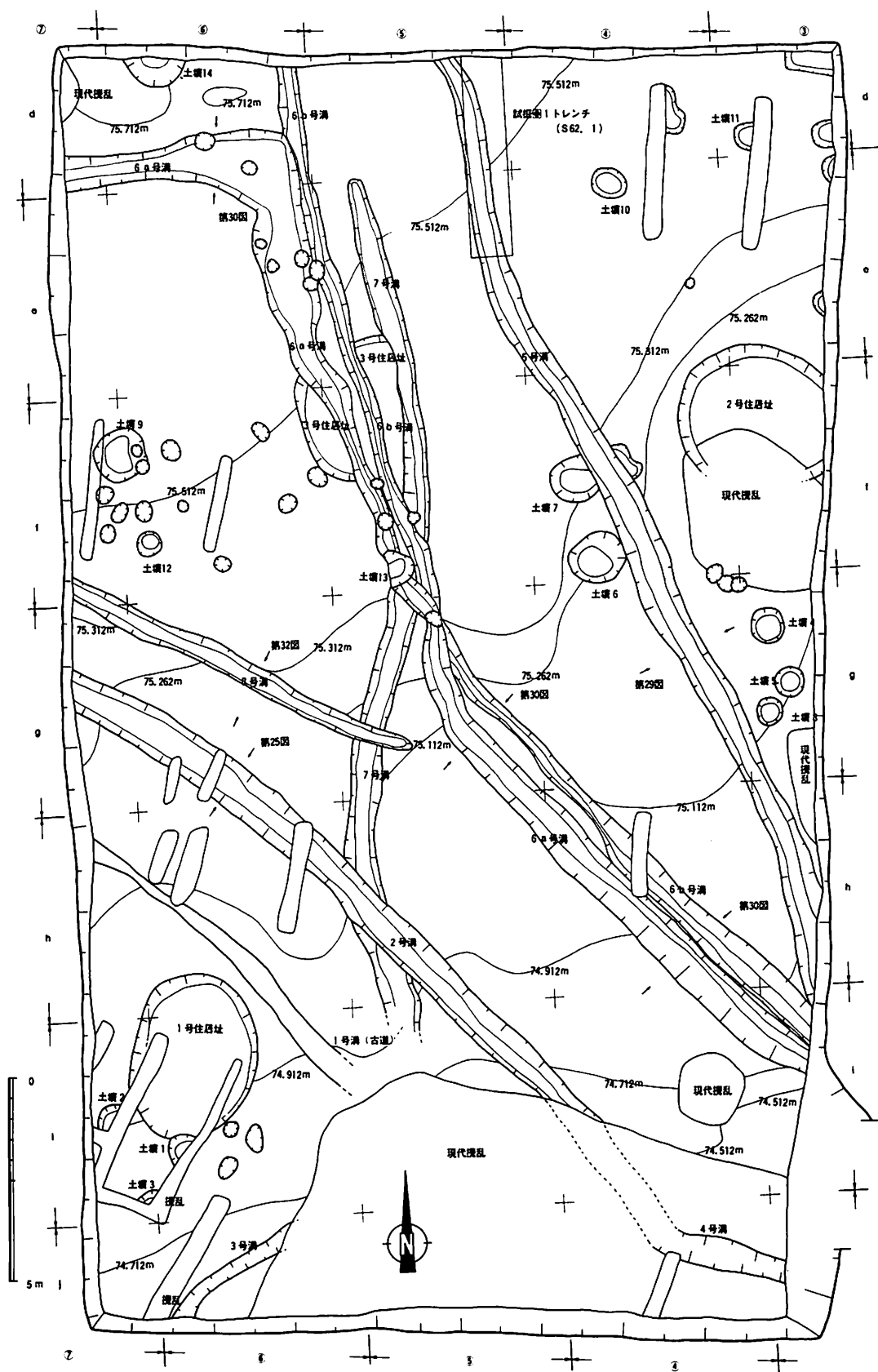
出土遺物（第14図001）

遺物の包含密度は概して低く、土器の小片が散発的に出土するという状況である。

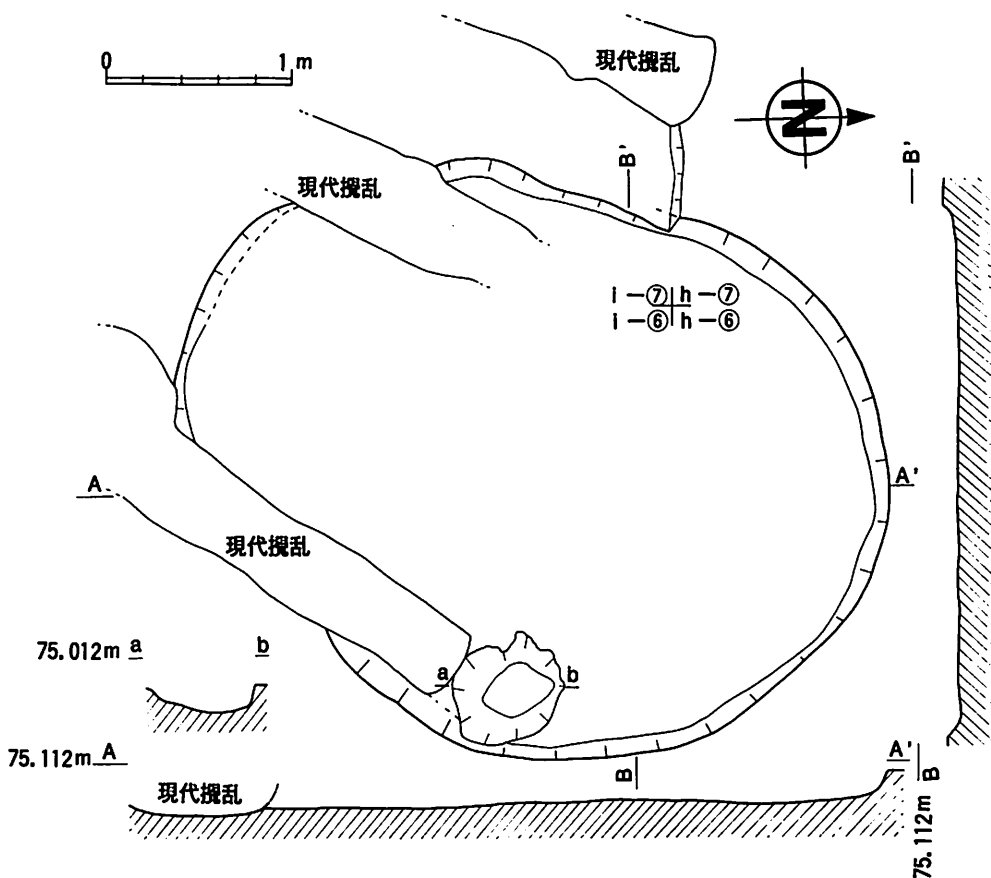
出土土器は無文の胴部破片が殆どで図化しえたのは001の1点のみである。001は舌状に直立した口縁部の直下に刻み目突帯を貼付し、さらに口唇部にも刻みを施した後、口縁部と突帯の間に縦位の粘土紐を貼り付け接続する。この縦位突帯の上部は欠損しており詳細は不明である。

○2号住居址（第13図）

e-③, ④区, f-③, ④区に位置し、南側部分を近年の攪乱により一部欠失している。径3.7mをはかる安定した円形プランをなし、遺存状況も良好で、現存壁高は平均約24cmをはかる。炉跡、柱穴は検出されていない。覆土の堆積は6つに分層が可能である。埋土1は黒褐色土、埋土2は住居址覆土の大部分を占めるもので淡黒茶褐色を呈する腐食土である。埋土3は埋土2とアカホヤの混土であり、これら埋土1～埋土3は以下に説明を加える埋土4～埋土6に比して軟質であり、容易に区別することができた。埋土4は黒褐色砂混じりシルト質土、埋土5は暗茶褐色砂混じりシル



第11図 検出遺構全体図 (1/150)

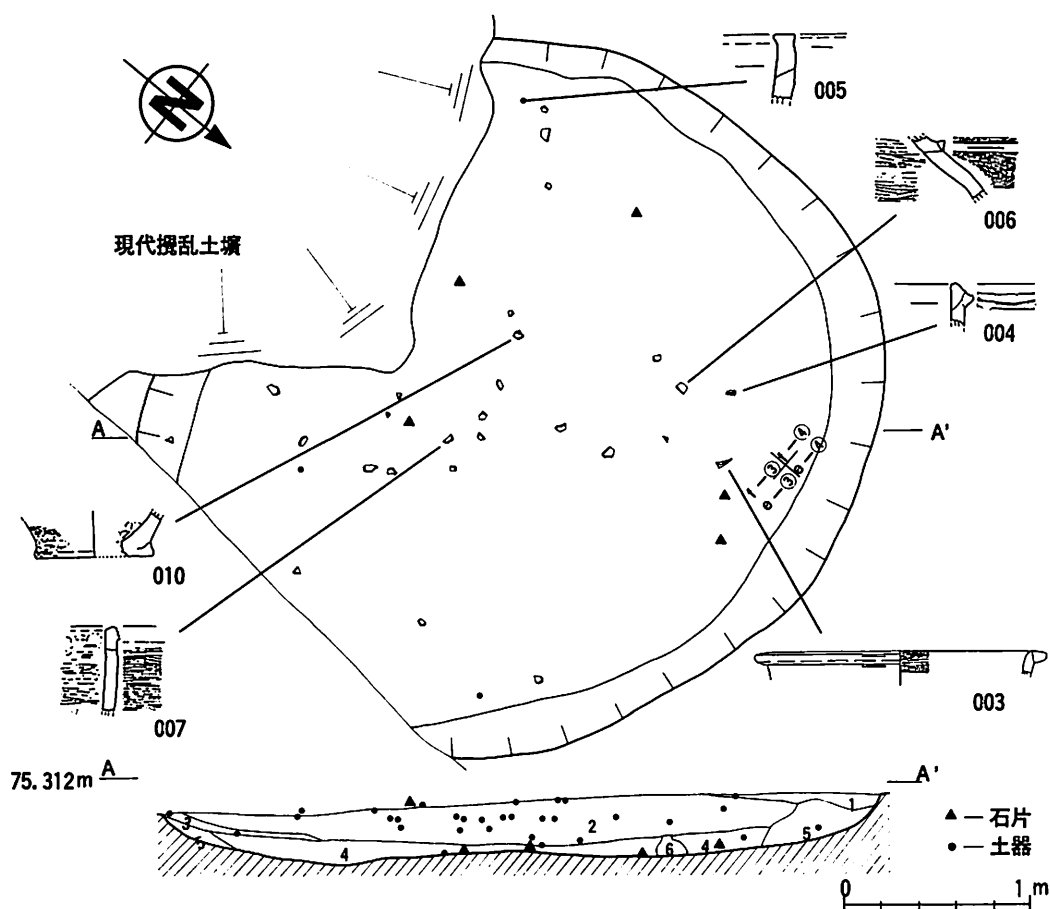


第12図 1号住居址実測図 (1/40)

ト質土、埋土6は暗褐色砂混じりシルト質土によって形成される。いずれも色調による差異のみで土質等による違いは認められない。また、床面を全面検出した段階で住居址南東壁際に層の乱れを確認したが、これは後の調査進行に伴い、住居址下に局部断層が存在するためであると判明した。

出土遺物 (第14図003~010)

遺物の出土量は全体的に少ないものの、3基の住居址中では最も多くの遺物を出土している。小片が殆どであるが、ある程度時期を推定することが可能なものも少なからず含まれている。003は壺形土器の口縁部破片である。内面には横位のミガキが施され、口縁部外面およびその直下には丁寧なナデ調整が施される。004は甕形土器の口縁部破片であり、舌状の口縁部下に三角突帯を付す。005はフラットな口縁部を有するものである。小片のため器種等は不明であるが、胎土の状況が他の土器片と異なる。調整などは外面の下半部が剥離しているため不明な点が多いが、あるいは他の土器片とは所属時期を異にするのかもしれない。006は壺形土器の肩部破片である。内外面ともに丁寧な横位のミガキが施され、シャープな三角突帯を一条巡らす。この土器は胎土・焼成が003に非常に酷似しており、同一個体であることも十分考えられる資料である。007も内・外面ともにミガキの施された土器片であるが、小片のため詳細は不明である。008は壺形土器の肩部破片と判断

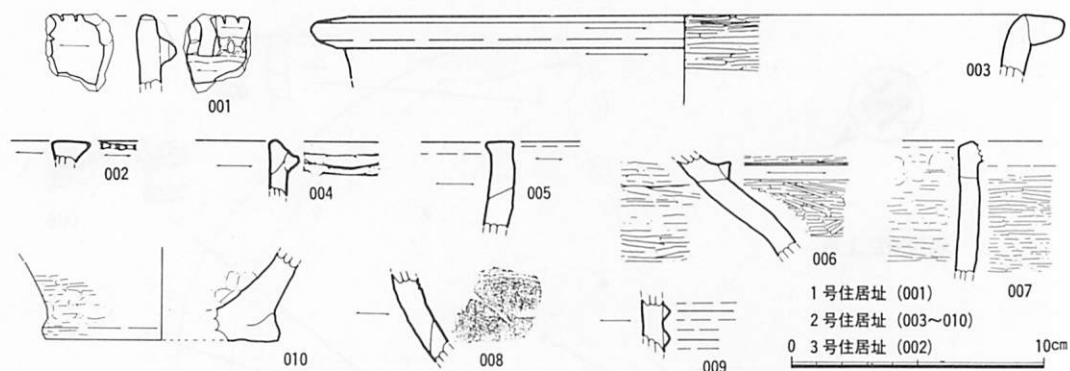


第13図 2号住居址実測図 (1/40)

した。破片上部に現存部で4条の櫛描文を確認できる。010は外方に僅かに張り出す底部破片である。復元底径9.3cmを計り、器外面には横位のミガキが施される。主要な出土遺物は以上であるが、これらのうち005以外の土器片はすべて斉一的な様相を呈し、また006等が埋土4中の床面近くから出土していることなどから本住居址の時期設定はこれらの土器に帰属しうるものと考えられる。また土器の他に床面付近を中心に小石片が少数出土しており、本住居址の一特徴をなしている。石片の石質には黒曜石と熱変性を受けた砂岩の2種類がある。

○3号住居址 (第15図)

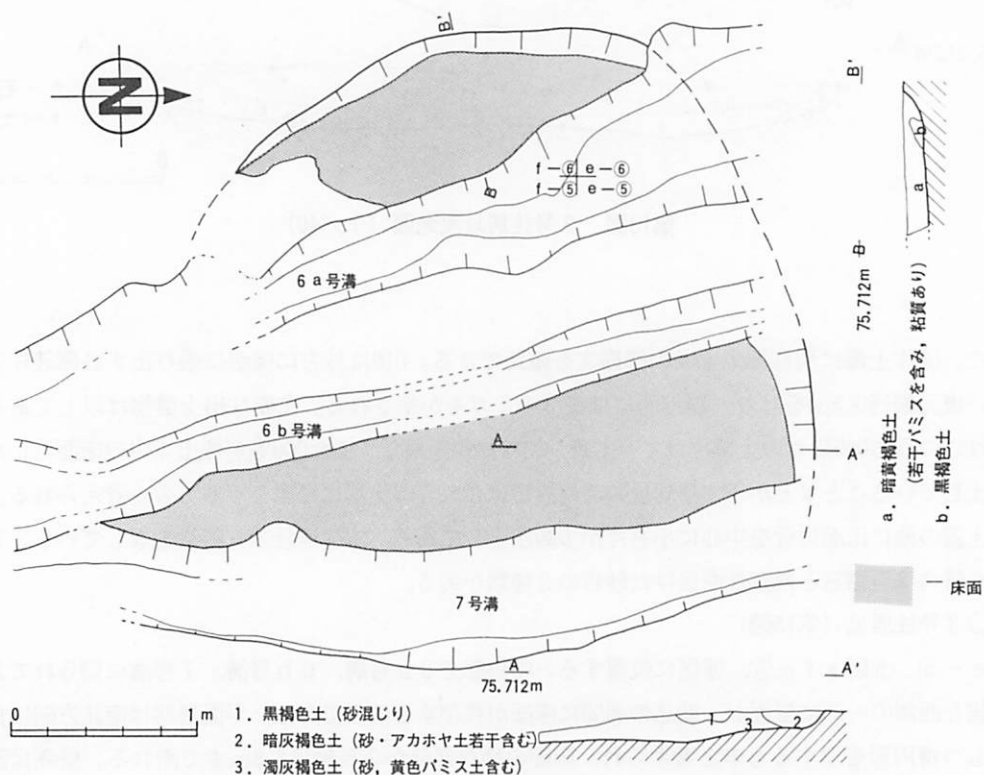
e-⑤, ⑥区・f-⑤, ⑥区に位置する。中央部を6a号溝, 6b号溝, 7号溝に切られており、北側と西側の一部に壁面が、前述の溝間に床面が残存するのみである。平面形態は南北方向に長軸をもつ楕円形を呈するものと考えられ、床面の残存部分から長軸は3.8mまで測れる。壁高は西壁で12cm, 北壁で9cmを測る。床面部分はほぼ平坦で、全体的に縦縞に踏み締められている。炉跡や柱穴は検出されなかった。



第14図 住居址内出土遺物 (1 / 3)

出土遺物 (第14図002)

出土遺物は、土器の小片がごくわずかに出土した程度にとどまり、図化したのは002の1点のみであった。002は断面三角形をなす口縁部の外面端に刻み目を施すものである。小型の甕形土器の口縁部であろうか。



第15図 3号住居址実測図 (1 / 40)

(2) 土 城

調査区内において19基検出されているが、これらの内、プランを明確に捕らえることができ、さらに明らかに人為的に構築されたと考えられる14基について検出順に土壌1…土壌14と呼称した。

検出された土壌はその覆土の状況から3群に分類が可能である。

I群-淡黒茶褐色を基調とする覆土を有するもので、土壌6・7・9・14がこれに相当する。

II群-黒色腐食土を覆土として有するもので、土壌1～5、8がこれに相当する。

III群-上記以外の覆土を有するものである。土壌10・11・12・13がこれに相当する。

表4 土城一覧

遺構名	図番号	区 域	プラン	主軸長(m)	短軸長(m)	深 度(m)	出土遺物	備 考
土壌1	第11図	i-⑥	円 形	$0.5+\alpha$	$0.7+\alpha$	0.1	土器小片	II群土壌
土壌2	第11図	i-⑦	円 形	$0.5+\alpha$	—	—	土器小片	II群土壌
土壌3	第11図	i-⑥・⑦	円 形	$0.25+\alpha$	—	—	土器小片	II群土壌
土壌4	第11図	g-③	円 形	0.85	0.75	0.19	土器小片 (011)	II群土壌
土壌5	第11図	g-③	円 形	0.675	0.65	0.16	土器小片 (012)	II群土壌
土壌6	第16図	f-④	卵 形	1.34	1.12	0.24	土器小片・管玉	I群土壌
土壌7	第19図	f-④	卵 形	$1.13+\alpha$	1.14	0.24	土器小片・石鏃	I群土壌
土壌8	第11図	g-③	円 形	0.65	0.6	0.26	土器小片	II群土壌
土壌9	第20図	f-⑥・⑦	不定円形	1.42	1.32	0.19	土器小片	I群土壌
土壌10	第11図	e-④	卵 形	0.85	0.7	0.21	土器小片 (015)	III群土壌
土壌11	第11図	d-③	円 形 ?	0.65	$0.43+\alpha$	0.11	なし	III群土壌
土壌12	第11図	f-⑥	円 形	0.65	0.58	0.11	なし	III群土壌
土壌13	第11図	f-⑤	不 定 形	0.85	0.7	0.14	なし	III群土壌
土壌14	第22図 第23図	e-⑥	不整円形	2.0	1.92	0.38	土器片・石鏃	I群土壌

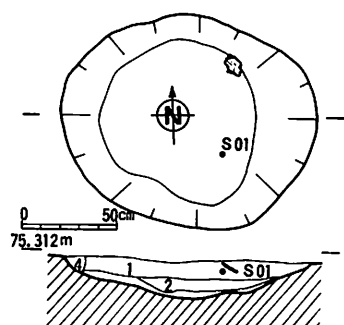
I 群土城

土壌6 (第16図)

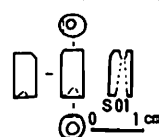
f-④区に位置する。長軸1.34m、短軸1.12m、検出面からの深さ24cmを測り、東西方向に長い卵形をなす。埋土の堆積は4枚確認した。埋土1は淡黒茶褐色土、埋土2は淡黒茶褐色土+黒茶褐色硬質ブロック、埋土3は淡黒茶褐色土+アカホヤ小ブロック、埋土4はアカホヤブロックである。出土遺物には検出面において土器の小片が集中して出土した他、埋土1中から管玉の出土をみた。出土土器中で実測可能なものに013、014 (第24図) がある。013は甕形土器の口縁部であり、フラットな口縁部直下に突帯を張り付け、刻み目を施したものである。

出土状況からこの土壌と近い関係を示すと思われる、土壌の時期設定にある程度の有効性をもつと考えられる。弥生時代前期末～中期初頭の時期を与えることができよう。014は胴部破片であるが、焼成、胎土は013に酷似する。S01 (第17図)

は濃緑色を呈する碧玉製の管玉である。長さ9.5mm、径5mm、穿穴径1.5mm・2.5mmを計る。両側か



第16図 土壌6 平面・断面実測図 (1/40)



第17図 土壌6内出土管玉 (2/3)

らの穿孔であり、両端の縁に計3カ所の磨滅がみられる。

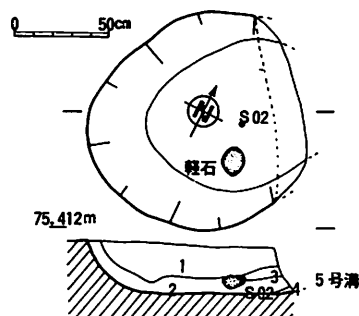
他に頁岩の石片が出土しているが、加工の痕跡はみられない。

土壌7（第9図）

f-④区、土壌6の北側80cmに位置する。東側部分は5号溝により切られている。長軸1.13m+ α 、短軸1.14m、検出面からの深さ24cmを測る。埋土は残存部分において4層に分層が可能であった。埋土1は淡黒茶褐色を呈し、少量のカーボンを含む。埋土2は淡黒茶褐色土+アカホヤブロック、埋土3は暗黒茶褐色土である。埋土4はアカホヤブロックである。形状、規模等は土壌6に類似する。出土遺物には無文の土器小片が少量と、底から約8cm程度浮いた状態で砂岩製の石鏃が1点出土している（第18図S02）。また、石鏃とはほぼ同一レベルで拳大の軽石が出土しているが、やはり加工の痕跡はみられない。



第18図 土壌7出土石器
(2/3)



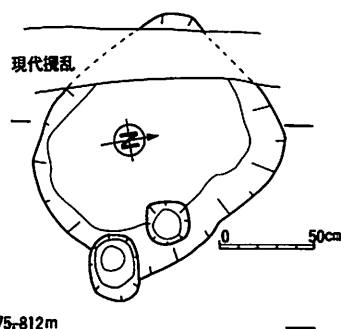
第19図 土壌7平面・断面実測図（1/40）

土壌9（第20図）

f-⑥・⑦に位置する。長軸1.42m、短軸1.32m、検出面からの深さ19cmを測り、形状は隅丸方形に近い不定円形を呈する。西側部分の一部を近年の攪乱により破壊されており、また東側に柱穴2を確認しているが、埋土の状況から、本土壌に付帯するものではないと判断される。

埋土の堆積は2枚認められる。埋土1は淡黒茶褐色土であり、埋土2は埋土1にアカホヤが混在したものである。いずれも少量のカーボンを含む。

出土遺物としては無文の土器小片が若干出土したが、いずれも図化しうるものではない。



第20図 土壌9平面・断面実測図（1/40）

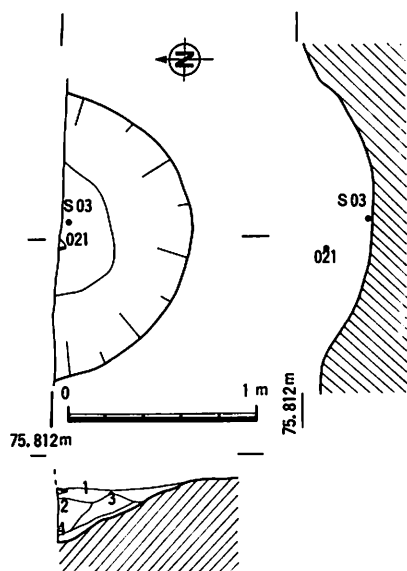
土壌14（第22図・第23図）

e-⑥区に位置する。北側部分が調査区外に延びていたが、工事の際に破壊されることが懸念されたため、調査の終了間際に完掘した（第23図）。形状は、長軸2.0m、短軸1.92m、検出面からの深さ38cmを測る不整形円形をなしている。土壌6・7・9が規模の上で斉一的であったのに対して、土壌14は他のものよりも若干規模が大きい。遺物では弥生土器・縄文後期土器・黒曜石製石鏃（第24図016～021）が出土した。これらの内、縄文土器（021）は土壌の検出面レベル付近に集中的に出土しており、土壌内下位レベルでの出土はみられない。また、土壌周辺の他遺構中からも同一個体とおもわれる土器片が出土していることなどから、この土器は本土壌に直接関連するものではなく、流れ込み等の原因による流入と考えた

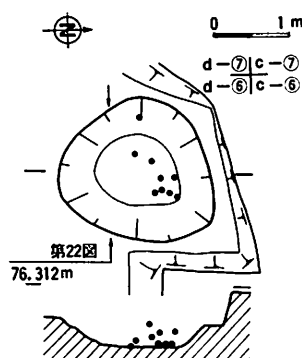


第21図 土壌14内出土石器
(2/3)

などから、この土器は本土壌に直接関連するものではなく、流れ込み等の原因による流入と考えた



第22図 土壌14平面・断面実測図 (1/40)



第23図 土壌14全体図 (1/100)

ほうが妥当であろう。016は弥生中期中葉に位置づけられる甕形土器の口縁部片である。017はフラットな口縁部の直下に三角突帯を貼付する甕形土器の口縁部である。突帯の下位に煤の付着が認められる。018は三角突帯を付す胴部破片である。内・外面とも横位のナデ調整が施される。土壌の底に密着した状態で出土した。019・020は底部片である。019は外面・淡赤褐色、内面・淡黄褐色を呈し、器外面には丁寧なナデ調整が施される。壺形土器の底部であろう。020は風化のため調整等が明瞭ではないが、かすかに縦方向のハケ目が観察される。甕形土器の底部破片と考えられる。021は縄文土器である。器形的には口縁部がやや肥厚し、外反する。口縁部の肥厚部にヘラ様の工具により爪形の沈線をし、口唇部にも同様に刻みを入れる。内・外面ともに丁寧なヘラ調整が施される。

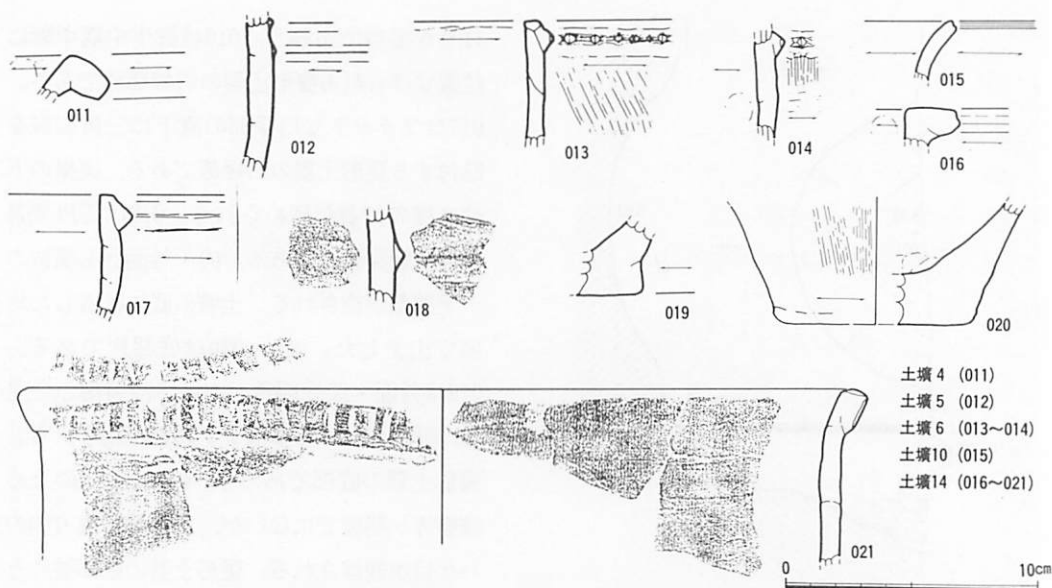
以上がⅠ群土壌の概要である。各土壌の出土土器の諸相は極めて相似することから、これらの同時性の確率は非常に高いと思われる。また、Ⅰ群土壌の覆土は肉眼観察、その他の比較に於いて、先述の1号住居址～3号住居址のそれとよく似ており、その構築時期の上での関連性が注目される。

Ⅱ群土壌 (第11図)

土壌1～5, 8がこれに相当する。覆土は黒色腐食土の単一土壌により形成され、形状・規模共に斉一的である。3基を1単位に、2グループを確認できる。出土遺物は土器の小片が少量出土したのみであり、図化できたのは011・012 (第24図) の2点だけであった。011は弥生中期の壺形土器の口縁部である。全面摩滅しており、詳細は知り得ない。012は低平な三角突帯を付す胴部破片である。器種等は小片のため判断できない。所属時期については、出土遺物からただちに判断することはできないものの、覆土が5号溝の覆土に類似することから比較的近い時期を想定できるのではないかと考えられる。

Ⅲ群土壌 (第11図)

土壌10～13がこれに相当する。覆土の状況が土壌により異なるものがあるので、それぞれの土壌について説明を加える。



第24図 土層内出土遺物（1／3）

土層10

e-④区に位置する。形状・規模はⅡ群土層に類似するが、覆土に差異が認められる。

覆土はⅠ群土層とⅡ土層の覆土の中間色調を呈する。出土遺物には土器小片があるが、図示できるのは015（第24図）1点のみであった。015は内・外面とも淡橙褐色を呈し、器面は横位のナデ調整が施される。壺形土器の口縁部であろうと推定される。

土層11

d-③区に位置し、東側部分は近年の攪乱溝により切られている。出土遺物はなかったが、覆土の状況が土層11に類似する。

土層12

f-⑥区に位置する。出土遺物は無い。覆土は土層10のものと同一のものであり、周辺に分布する柱穴も同様の土層を有す。

土層13

f-⑤区に位置し、6a号溝を切る状況で検出された。覆土に、黄色軽石粒を多量に含む黒茶褐色土を持つ。遺物の出土は見られなかった。

(3) 溝状遺構（第11図・第27図）

今回の調査では、道路状遺構も含み、計8本の溝状遺構を検出した。検出順に1号溝…8号溝と呼称することにし、以下に説明を加える。

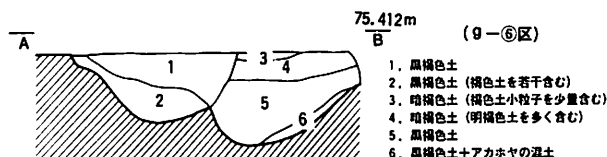
1号溝（道路状遺構）

h-⑥・⑦，i-⑥区に約7.5m検出した。西側は調査区外に延び、東側は近年の攪乱により切断される。道路面が僅かにくぼみ、その中に黒色土が充填していたため、便宜上溝状遺構として取り扱った。道路面はアカホヤ上面を踏み固めて形成され、土間状に硬質となる。このアカホヤの硬

質土は2～3cmの厚さで堆積し、幅30～70cmを測る。また地形の傾斜に沿って西～東へ緩傾斜する。この遺構に伴うと確実視される遺物は検出されておらず、所属時期を特定することはできない。

2号溝（第25図）

g・h・i-⑤・⑥・⑦区において約15m検出した。西側は調査区外にさらに延び、東側部分は近年の攪乱により切られている。検出面での



第25図 2号溝断面実測図（1／30）

幅約1mを測り、深さは地点により若干異なるものの、平均で約3.5cmを測る。⑥・⑦区では溝底を2通り観察でき、覆土の観察から時期差をもって、溝底の変更があったことを推測できる。

出土遺物には、素焼きの土器小片等が出土しているが、022～024・025～028（第26図）以外は図化することができなかった。022～024・027はいずれも弥生中期の甕あるいは壺形土器の口縁部片であり、025は甕形土器の胴部突帯片である。025は前記の口縁部片よりも若干古く位置付けられよう。これらの土器片は覆土の別なく、溝覆土からはほぼまんべんなく出土する。028は須恵器片である。外面に4mm×6mmの格子目叩き、内面には幅7mmの平行叩きが施される。図化した出土遺物の中でこの須恵器片が2号溝の構築時期に最も近い関係を示すと考えられる。

3号溝

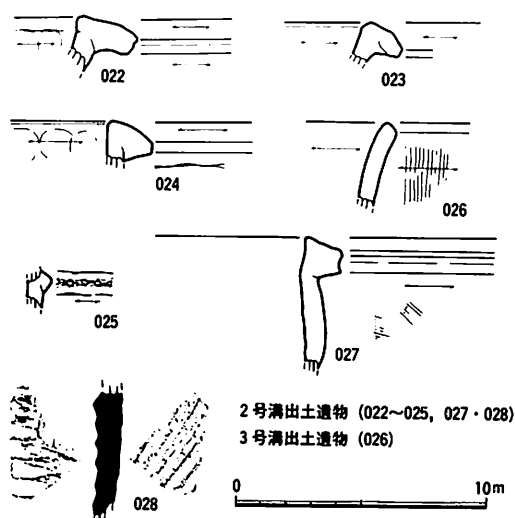
j-⑥区に約3.5m検出した。遺存状況は良好でなく、幅30～50cmを測り、深さは5～20cmを測る。調査区南西側から北東方向へ緩いカーブを描きながら東へ向かう。東端は攪乱に切られており詳細は不明である。また溝底は凹凸が著しい。遺物はほとんど内包せず、僅かに026（第26図）1点のみが出土した。026は素焼きの土器口縁部破片である。外面に縦方向のハケ目を施した後、内・外面とも横位のナデにより最終調整を行う。器種等詳細は不明で、時期の特定は行えない。

4号溝

j-③、④区の攪乱地底面に溝底のみ約3mにわたり検出した。出土遺物は皆無であるが、僅かに残った覆土、溝底の形態の類似から2号溝に接続する可能性が高い。

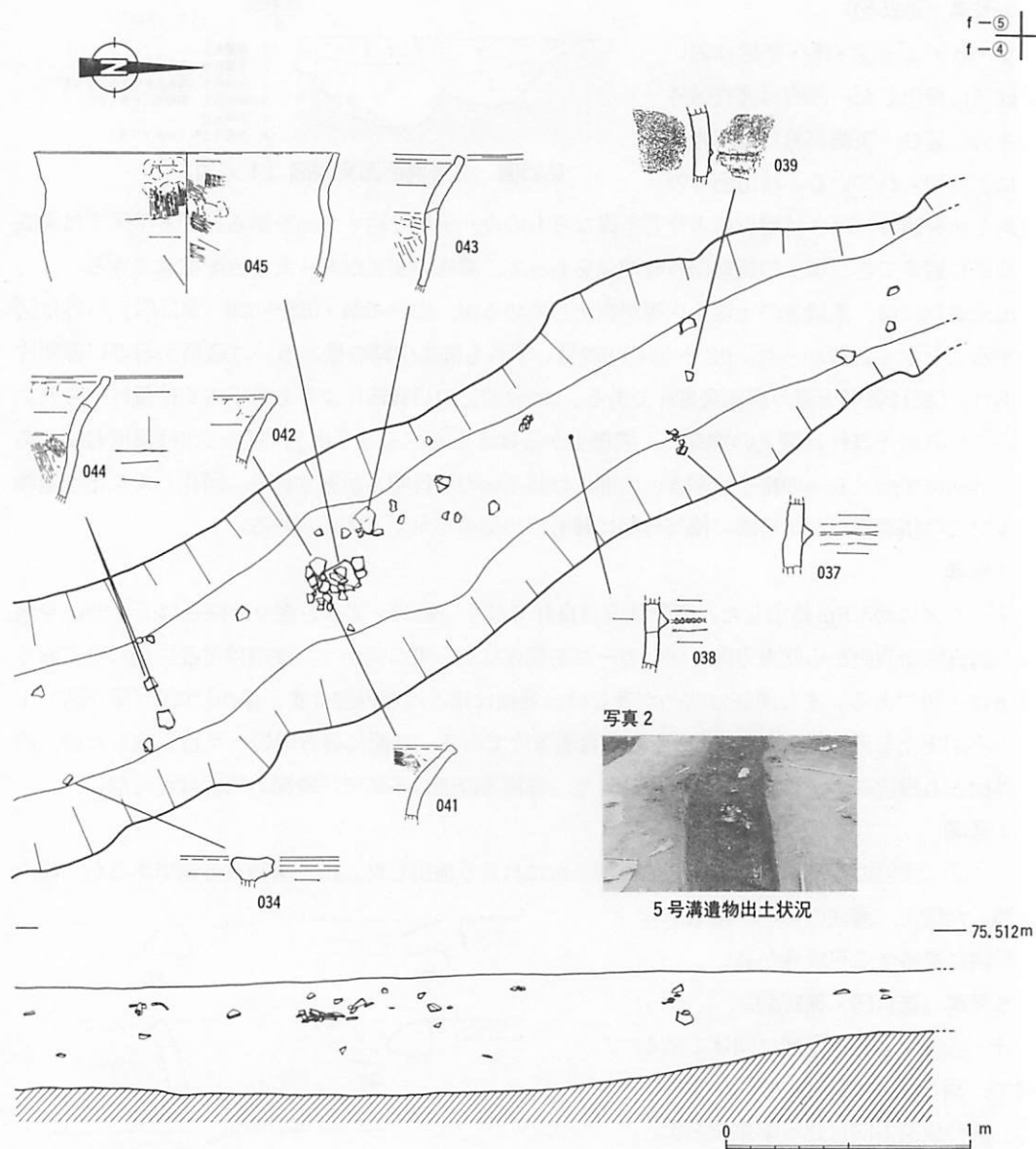
5号溝（第11図・第27図）

d-⑤区からh-③区に向けて走る溝で、両端とも調査区外へのびている。溝の流路方向は北→南東を示す。検出長は約24mで、溝上面の幅は約1.1m、深さは確認面より約30～39cmを測る。溝の形態は梯形をなし、覆土は4層に細分された（第27図）。出土遺物（第28図）は成川式土器が主体を占め、弥生中期土器が混在する。また昭和62年の試掘調査の際にNo.1 トレン



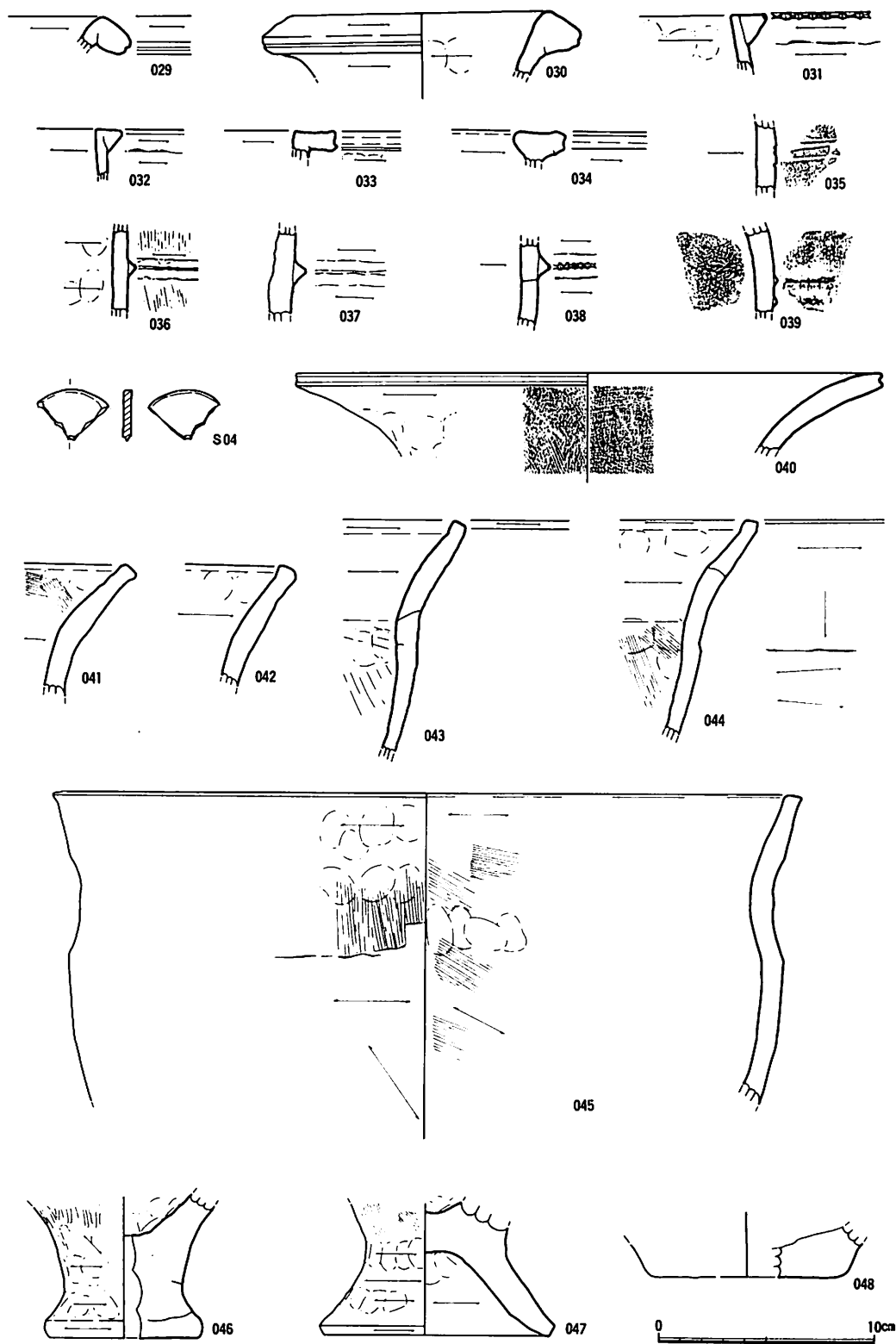
第26図 2号溝・3号溝出土遺物（1／3）

チにおいて検出された溝状遺構は本溝と同一であり、当時のトレンチ跡をd・e-⑤区に確認した。



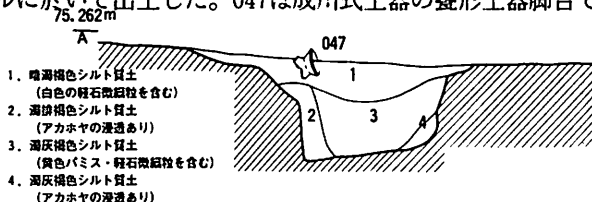
第27図 5号溝平面・断面実測図 (1/30)

遺物は埋土1を中心に比較的まとまった出土状況を示す。029～036・038・040は弥生土器である。029・030・040は壺形土器の、031・032・033・034は甕形土器の口縁部片である。いずれも弥生中期に属するものである。041～045は成川式土器の甕形土器口縁部であり、溝底面より約30cm上位にまとまって出土した。1～2個体分存在すると考えられるが、接合できたのは045における数片に



第28图 5号沟出土遗物

すぎない。046～048は底部破片である。046は弥生中期甕形土器の充実した脚台片である。溝検出面レベルに於いて出土した。047は成川式土器の甕形土器脚台であるが、これも046と同様に検出面



第29図 5号溝断面実測図 (1/30)

レベルで出土している (第29図)。048は壺形土器の底部であろう。S04は砂岩製の石製紡錘車である。約1/4残存する。復元径14.4cmを計る。

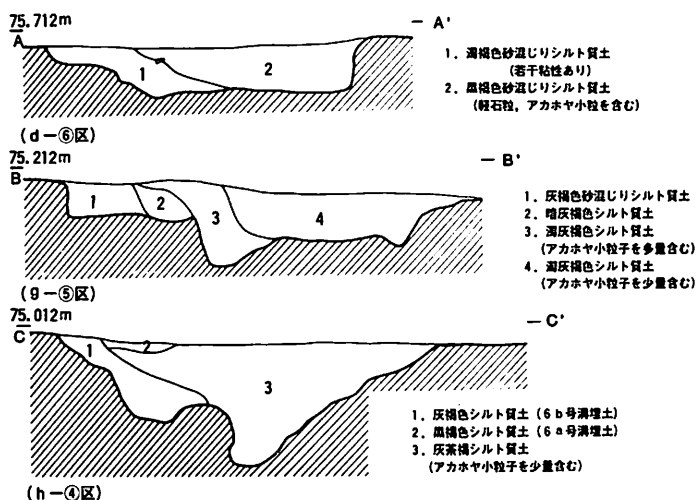
以上が5号溝から出土した主要遺物の概要である。遺物内容は成川式土器 (古墳時代相当) と弥生時代中期のものに限られ、出土状況から判断すれば、この5号溝の所属時期は成川式土器期のものとして大過ないであろう。

6 a号溝 (第30図)

調査区北西において西→東に走行し、d-⑥区でL字状に南へ屈曲する。その後調査区中央を斜走し、i-③区に至り、さらに調査区外へ延びる。調査区域内での総延長31mで、幅は0.6～1.2m、確認面からの深さは20～50cmを測る。出土遺物には弥生中期土器片・鉄製品・須恵器片・砥石などがある (第34図)。049～055は弥生中期土器片である。049・050・052・053・は甕形土器の口縁部片であり、051・054・055は壺形土器の口縁部である。052は直立した口縁部の直下に三角突帯を貼付する。055は・壺形口縁部で、口縁部上面に2～3条の櫛状施文具により、数条の短線を施す。070は甕形土器の底部であり、弥生時代中期に属するものである。072は内・外面ともに回転ナデ調整が認められる須恵器片であり、瓶形容器の胴部と考えられる。時期等は不明である。069は鉄製品であり、径34mmを計る棒状突起を中央に据える。腐食のため突起の形態は明らかでないが、管状であった痕跡をかすかに認める。燭台か飾り金具の類であろうと思われる。S05は砂岩製の砥石である。4面を使用する (図中トーン部)。

6 b号溝 (第30図)

調査区中央を地形走行にそって縦走する。その為、大部分が6 a号溝と重なる。両端はさらに調査区外に延び、調査区域内での総延長は28.5mで、幅0.3～0.6m、土層の観察から推定される確認面からの溝の深さ20～30cmを測る。暗灰褐色土を基調とする覆土を有する。6 a号溝構築以前に造られた溝である。出土遺物は弥生土器片・縄文式土器片等が出土しているが、

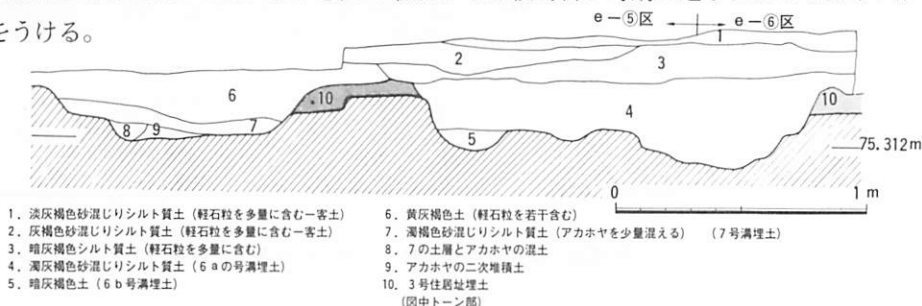


第30図 6 a・6 b号溝断面実測図 (1/30)

覆土の様相ではそれらよりも新しい時期の遺構と考えられる。056は弥生中期の甕形土器の口縁部で、内面の接合痕を明瞭に残し、内側に僅かに張り出す。059は縄文後期に比定される深鉢形土器の口縁部破片である。2片の接合によるものであるが、1片はf-⑤区の溝外から出土している。全面摩滅しており、詳細は不明であるが、胎土等の比較から土壇14中から出土している021と同一個体である可能性が高い。

7号溝 (第31図)

調査区中央を南北に縦走する形で、e-⑤区～i-⑤区にかけて検出された。北端はe-⑤区で途切れ、南端は攪乱により切断され不明である。確認された全長21m、幅0.75m、検出面からの深さ20cmを測り、e区とi区での溝底の比高差70cmを示す。濁褐色砂混じりシルト質土を覆土に持ち、弥生土器の小片を出土する。057は弥生中期の壺形土器口縁部であり、かすかに丹塗りのような痕跡が残る。058は垂れ下がる口縁部を持つ甕形土器の口縁部である。066は2条のシャープさを欠く三角突帯の下に櫛描波状文を施文する。波状文は6条観察でき、掲載図の位置関係において右→左に施文される。器種不明。067は低平な三角突帯をもつものである。068は甕形土器の胴部突帯片であり、突帯は接続せず互い違いに貼付される。突帯下位に煤の付着がみられる。071は弥生中期甕形土器の脚台片である。全体的に厚ぼったい感じを受け、調整も概して雑である。073は器外面にヘラミガキを施す壺形土器の底部破片である。復元底径6.7cmを計る。出土遺物にはこれらの他に無文の土器破片が少量出土しているのみであり、出土総量は少ない。また上記の遺物がただちに本溝の構築時期を指し示すとはいえないが、覆土の状況から比較的古い時期に造られたのではないかという印象をうける。

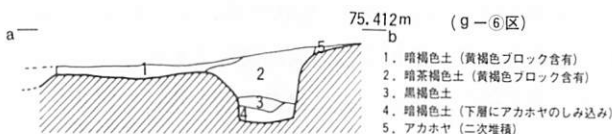


8号溝 (第32図)

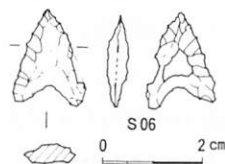
第31図 e-⑤・⑥区南壁土層断面図 (1/30)

g-⑥区を中心に約9m検出した。西端は調査区外にさらに延び、東端はg-⑤区で終局する。溝の南肩は2号溝によって切られており、

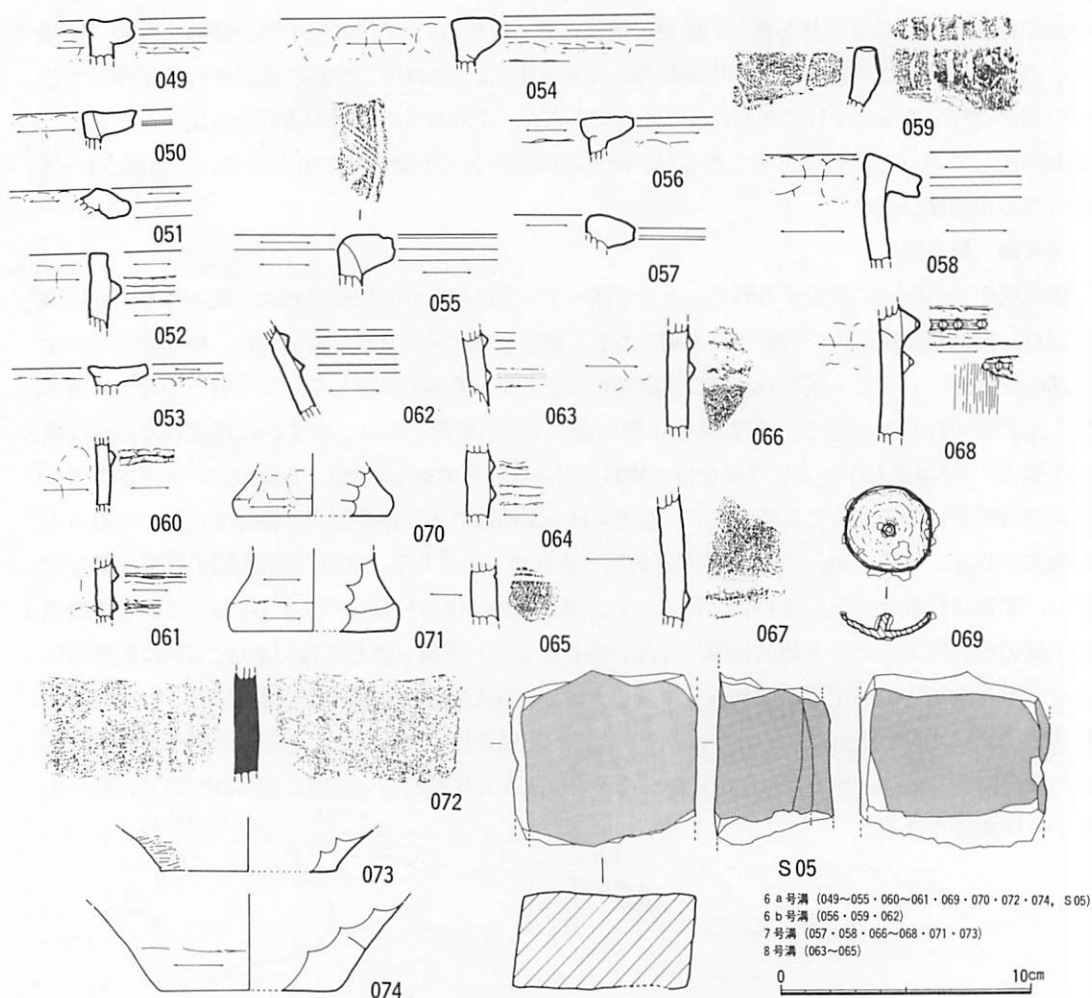
北肩には幅約40cm深さ30cmの小溝を有する。一方、溝の南肩部分は深度も浅く、2号溝と交わっていない部分においても、溝肩を明確に捕えることはできない。したがって溝本来の幅は $1.2m + \alpha$ でありながら、その全容を把握することは出来ず、北肩部分の小溝の範囲をかりうじて検出した。小溝は断面梯形をなし、f-⑦区とg-⑤区での溝底の比高差15cmをはかる。出土遺物は他の溝と同様に極めて少なく、弥生土器小



第32図 8号溝断面実測図 (1/30)



第33図 8号溝出土石器 (2/3)

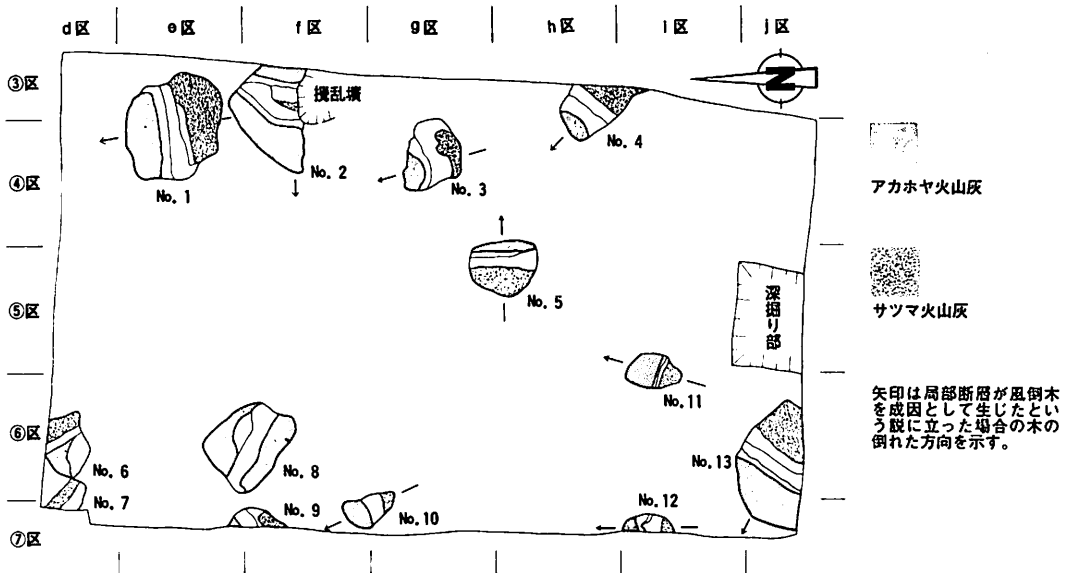


第34図 6 a号・6 b号・7号・8号溝出土遺物 (1/3)

片と石鏃があるにすぎない。063と064は三角突帯を2条以上施す土器片である。064は063に比して突帯の調整が雑である。065は櫛状工具により櫛描平行線文を施す。残存片中には深・浅2本の平行線が観察される。壺形土器の肩部破片であろうか。S06（第33図）は石英質石材の石鏃である。片脚を一部欠損し、片面中央には自然面を残している。乳白色を呈す。

(4) 局部断層（第35図・第36図）

今回の調査においては、13~14カ所検出している。各局部断層相互の位置関係に、なんらかの規則性などを見いだすことはできなかった。全て不整形を呈するもので、前後に若干長い不整円形・幅広の不整円形・不正方形等の平面形が見られた。基本土層V~Ⅷ層がこの順を保ったまま90度回転したような状況で、平面的に帯状に並んでいる。このことから、これらの局部断層の形成がV層堆積後、IV層堆積前に生じたことが推測される。IV層が弥生~古墳時代の遺物包含層であり、V層

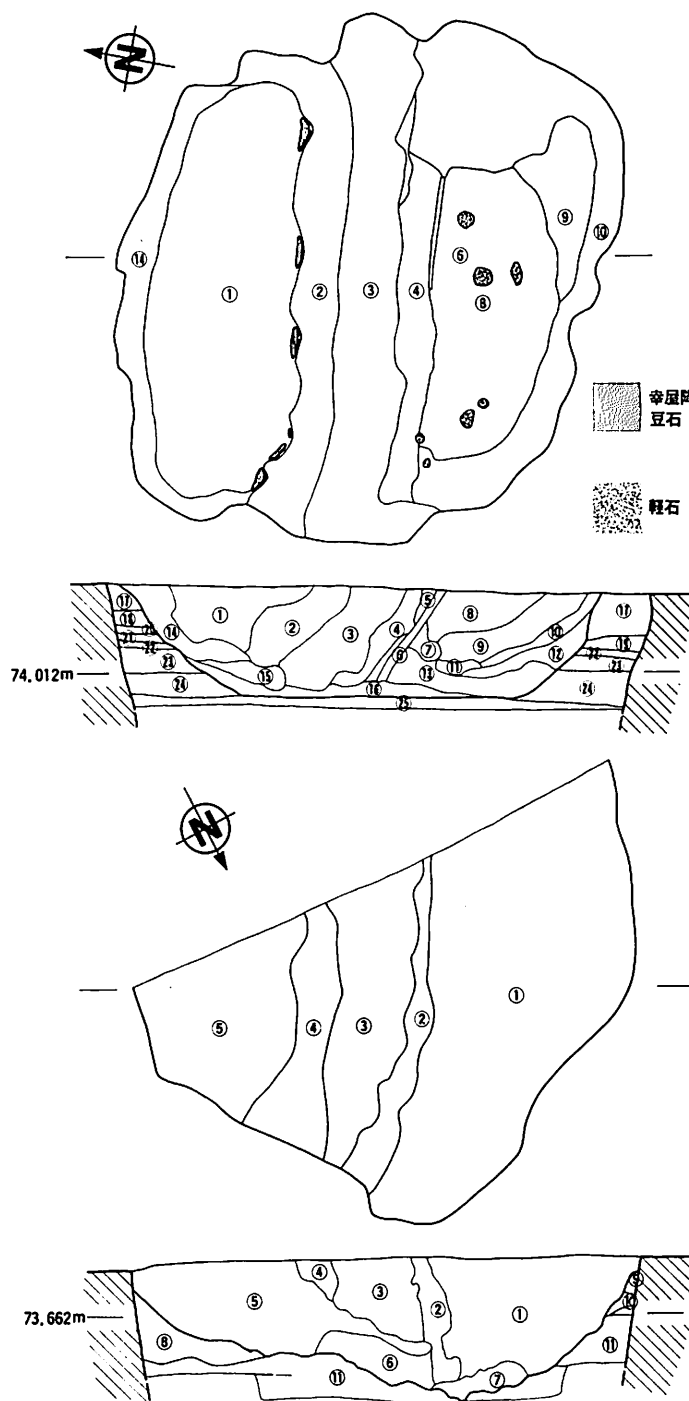


第35図 局部断層分布図 (1/300)

が「アカホヤ火山灰層」であることから、現時点では縄文時代前期～晩期という時期幅で形成時期を押さえておくほかない。

第36図に1・13号局部断層の断面図を示している。1号局部断層においては、北から南へと基本土層V・VI・VII・VIII層土対応土が並んでいる。そして、これらの直下から北側にかけて、上部から圧力を受けたような状況がその北半部において認められる⑯、基本土層VI・VII土対応土の混土から成るブロック(⑮)、基本土層V・VI層土対応土から成る混土層(⑭)がこの順で堆積する。同様な状況は第13号局部断層においても観察することができる。本局部断層においても基本土層V・VI・VII・VIII層土対応土が東～西へこの順に並ぶ。基本土層V層土対応土である①はその東側周縁部が基本土層VI層土との混合土となっている。また本層直下の⑦は基本土層VII層土であり、VII層の本来の位置から丁度ズリ落ちたような状況を呈している。そして、基本土層VIII層土対応土である⑤の下には基本土層VI層土に対応する⑧が存在する。

局部断層の成因については、風倒木説や火山活動に伴う現象と考えるもの等、幾つかの説があるようであるが、火山活動に起因するものとしてはあまりに規模が小さすぎ、その可能性は考えられないとのことである。また、人為的なものとも考え難い。以上のような理由から今回の調査においては、仮に風倒木成因説にたって局部断層の観察をおこなった。ここではこの観点から局部断層に対する説明を補足したい。1・13号局部断層は風倒木説に従って解釈した場合、それぞれほぼ北側・西側に倒れた木の痕と言うことができる。そして、横転した土層は木が倒れた際に樹根に伴って動いたものと考えられる。このように考えた場合、1号局部断層の⑯については木が倒れるのに伴ってその南半が南側へ引きずられ、北半が上方からの圧力を受けたものとして説明できる。また、⑭・⑮などの混土層は土層の横転が生じた際に、周囲の土を削り巻き込んだことによって生じたものとしてとらえることができよう。13号局部断層についても①の北側周縁部の混土や⑦につ



- ① アカホヤ火山灰 (基本土層Ⅴ層土対応)
- ② 基本土層Ⅴ層土対応
①との境界は明確さを欠く
- ③ 基本土層Ⅴ層土対応
③に近い部分ほど「霞摩」降下軽石の量が増し、粒の大きさも大きくなる。
- ④ 粗砂状の火山灰によって構成される。
「霞摩」降下軽石の量は少なく、「霞摩」火山灰層中の硬質層をブロックとして含む。
- ⑤ ④よりもさらに粒の大きい粗砂状火山灰と径2mmの黄色軽石から構成される。
- ⑥ 「霞摩」火山灰層上部の淡色白色を呈する硬質の層 (調査区南壁土層図9) に対応
- ⑦ 径2mmほどの黄色軽石から成る。
- ⑧ 「霞摩」降下軽石 (基本土層Ⅴ層土に対応)
降下軽石向に粗砂状の火山灰を含む。
- ⑨ 砂と「霞摩」降下軽石との混土、図上の左半分には華大の3のブロックを含む。
- ⑩ 基本土層Ⅴ層土に対応。
若干白色味を帯びる。霞摩降下軽石を少量含む。
- ⑪ 白灰色シルト質土 (径1mm程度の黄色軽石を少量含む)
- ⑫ 径2mmほどの黄色軽石、③、⑦から成る混土
- ⑬ 「霞摩」降下軽石と粗砂状火山灰から成る。
降下軽石の粒径は1~2mmのものが多い。
- ⑭ 基本土層Ⅴ層土とアカホヤ火山灰との混土。
「霞摩」降下軽石と幸屋降下豆石を少量含む。
- ⑮ えのうち③に近い部分の土からなるブロック。
- ⑯ 「霞摩」降下軽石を含む粗砂状火山灰
- ⑰ 基本土層Ⅴ層
- ⑱ ③と同質の層
- ⑲ ③と⑱との混土
- ⑳ 炭灰白色硬質土層
- ㉑ 粗砂状火山灰層
径2mm程度の砂粒と「霞摩」降下軽石とから成る。
- ㉒ 淡色白色硬質土層
- ㉓ 粗砂状火山灰と「霞摩」降下軽石から成る層 (軽石径 平均2mm)
- ㉔ " " " " (" " " 3.5mm)
- ㉕ 「霞摩」降下軽石層

第36図 No.1・No.13局部断層 (1/60)

いて、木が横転する際に周囲の土を引きずったりした結果生じたものとして説明できる。さらに、⑧は木が西側へ横転した際に生じた東側空隙部にⅥ層土が流れ込んだものと考えられよう。また、13号局部断層においてはほぼ同質の③と⑥（ともに基本土層Ⅶ層土対応）の間に⑤が貫入するような状況が認められるが、これについては樹根に付着して上方へ持ち上げられたⅦ層土の一部がブロックとして崩落したことを想定したい。

以上のように、局部断層中の土層の状況を説明するにあたって、現時点では風倒木説に沿った説明を行うことが可能であるが、今後説明不可能な状況が認められた場合にはこれに代わる成因モデルを構築することが必要であろう。なお、局部断層の分布を示した第35図においては風倒木説にしたがった場合に想定される樹木の倒れた方向を矢印で示している。

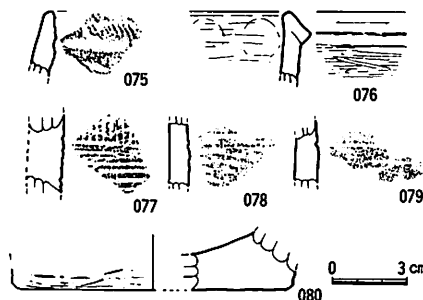
6. 遺構外出土遺物（第37図～第43図）

今回の調査では、Ⅳ層を中心に弥生中期土器を主体とし、成川式土器、縄文土器、中近世の陶磁器類、石器等が出土している。いずれも小破片での出土であり、全形を知ることのできるものはない。以下に特徴的なものについて説明する。

(1) 縄文土器（第37図）

縄文土器はⅦ層中から数点出土した他は、Ⅳ層に於いて弥生土器に混在するか、上層の攪乱土中に少数散見される程度である。

075は全面が著しく風化、摩滅する口縁部破片である。外器面にはヘラによる爪形文1条、凹線2条、を上から順に施文する。これらの文様の特征から縄文時代後期の市来式に比定されよう。077は縄文時代早期に編年さ



第37図 縄文土器（1／3）

れる前平式土器である。赤褐色を呈し、胎土中には径1mm程度の石英粒を少量含む。破片上部にはタテ方向の貝殻刺突を施し、下部には貝殻条痕を横走させる。円筒形を呈するタイプの口縁部付近の破片であろう。078も077と同様に前平式土器の胴部片と考えられる。外面に横位の貝殻条痕、内面には削痕がみられる。080は復元底径10.6cmを測る円筒形貝殻条痕文土器の底部である。器外面は横位の貝殻条痕、底面はナデ調整により仕上げられる。胎土・焼成・貝殻条痕等の類似から前述の前平式土器の底部と考えられる。079は1条の沈線を施し、淡黄褐色を呈する土器片である。外面は横位のナデにより調整される。内面は風化のため調整等の詳細は不明である。この土器片はⅦ層上面レベルで出土したが、出土地点には上層からの柱穴が密集しており、これらの柱穴に伴う上層からの落ち込みである可能性のあることも付記しておく。076は攪乱中より出土したものである。口縁部外面を断面・三角形に肥厚させ、内・外面とも横位のミガキによる丁寧な調整が施される。所属時期等は不明であるが、便宜的にこの項目で取り扱った。

(2) 弥生土器・古墳時代の土器（第39図～第41図）

弥生土器・古墳時代の土器はⅣ層を中心にⅠ～Ⅳ層中に出土する。遺物出土層の主体は、いずれもⅣ層に認められるが、出土レベルに於いて弥生土器がⅣ層下部に単純出土し、層上部では古墳代

の土器と混在出土するという傾向を捕捉することができた。出土器種では、甕形土器がその大部分を占め、他に壺形土器、鉢形土器が出土している。しかし出土破片はいずれも小片ばかりで全形を知り得るものは皆無である。したがってここでは口縁部の形態による分類に留めたい。

弥生土器

甕形土器

I 類

直口する口縁部を持ち、その直下に貼り付け突帯を有する。形態的には東九州に広く分布する下城式に類似する土器である。突帯上の刻みの有無によってさらに2大別することができる。

I - a 類 突帯上に刻みを有す。(001・013・150)

I - b 類 突帯上に刻みを有さない。(004・017・052・151)

II 類

口縁部が逆L字状に外反し、断面三角形を呈する口縁部を持つ。口縁端部はシャープである。

II - a 類 口唇部に刻みを有す。(002・031・084・089・090)

II - b 類 口唇部に刻みを有さない。(016・032・091・093・134・161)

III 類

口縁部が逆L字状に外反し、口縁端部外側に断面長方形ないし台形を呈する粘土帯を貼付する。口唇部の様態により次の3種に分類が可能である。

III - a 類 口唇部に刻みを有す。(033・081・082・083・088)

III - b 類 口唇部に一状の凹線状の沈線をもつ。

(050・092・095・098・106・107・108・109・112・113・114・116・118・119・123・124・125・126・140)

III - c 類 横位のナデ調整のみで仕上げられる。(094・097・100・104・111・115・117・132)

IV 類

口縁部外側の形態は3類と同様だが、内側に張り出し部をもち、張り出し部に粘土接合痕を残すものが多い。

IV - a 類 口唇部に刻みを有す。(085・086)

IV - b 類 口唇部に一状の凹線状の沈線をもつ。(064・049・096・122)

IV - c 類 横位のナデ調整のみで仕上げられる。(053・056・099・101・105・110・129・139・148・152)

V 類

口縁部が垂れ下がり気味に外反し口唇部外端には凹線状の沈線を一条施す。(027・058・127)

壺形土器

I 類 - 口縁部が大きく外反し内面に突帯をもつ。(143)

II 類 - 口縁端部に台形あるいは長方形の突帯を貼り付け、下方に垂れ下がり気味に延びる。

(011・022・023・024・029・030・051・054・055・057・103・120・128・130・131・133・135・136・137・145・146・147)

III 類 - 朝顔形に大きく外反する口縁部をもつ。内・外面には丁寧なハケ目調整が施される。

(040・142)

IV類-鋤形の口縁部をもつ。(144)

以上口縁部の形態により甕形土器を5類11分類、壺形土器を4類に分類した。甕形土器は口縁部下の様相を僅かながらでも知ることのできる資料は082のみであり、したがってその全容の把握は困難である。あえて編年の位置づけに言及するならば、I a類、II a類に中期初頭の諸特性を認め、

他は従来「中期

中葉」とよびな

らわしている時

期のものに相当

する。南九州弥

生時代編年の第

IV様式に該当す

るものである。

壺形土器に至っ

てはさらに不明

な点が多く、分

類自体もおお

ざっぱなものに

留どまっている。

特にII類は

今後の資料の増

加に伴いかなり

の細分が可能で

あろう。これら

は141が古い特

徴を持つ以外は

おおよそ「中期

中葉」の範疇で

捕らえることが

できる。ただ当

該期の壺形土器

の口縁部は口縁

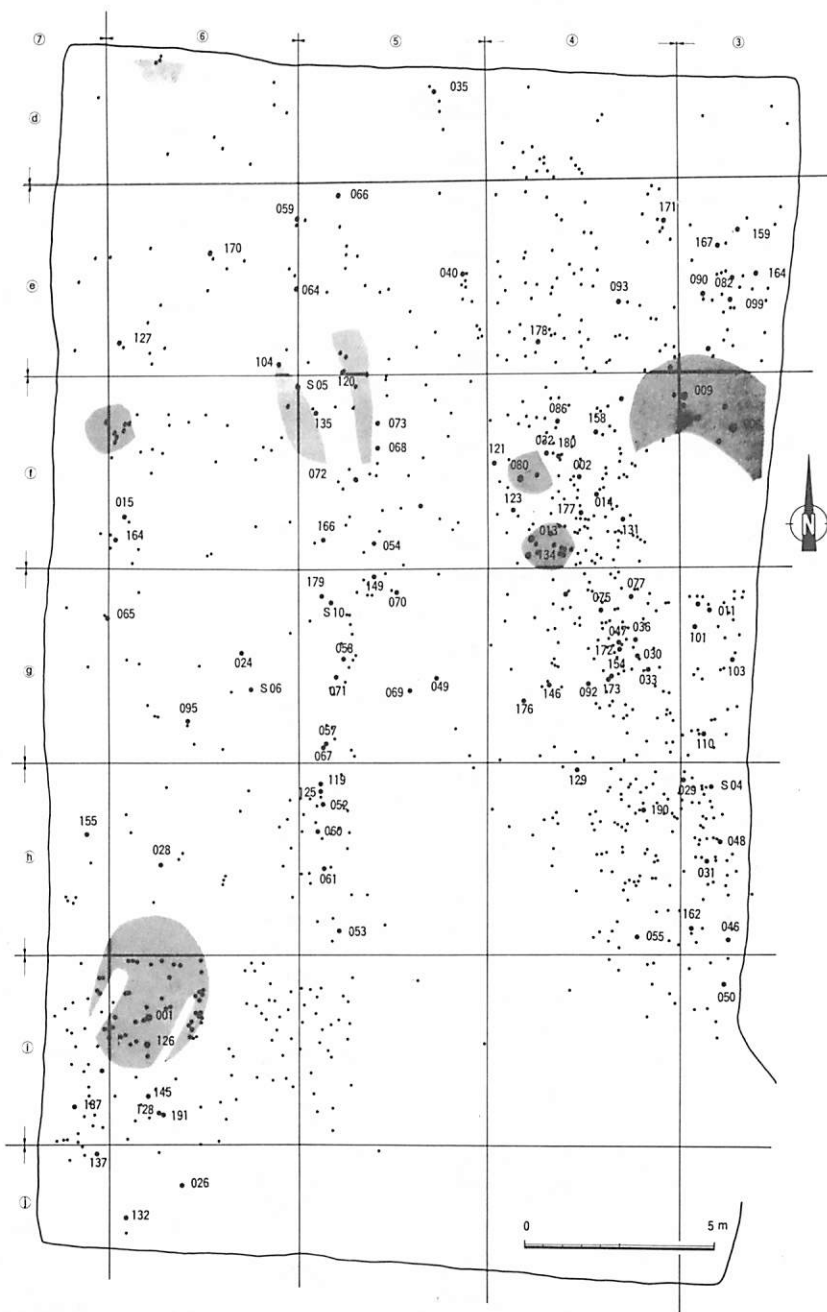
部片だけでは甕

形土器と区別が

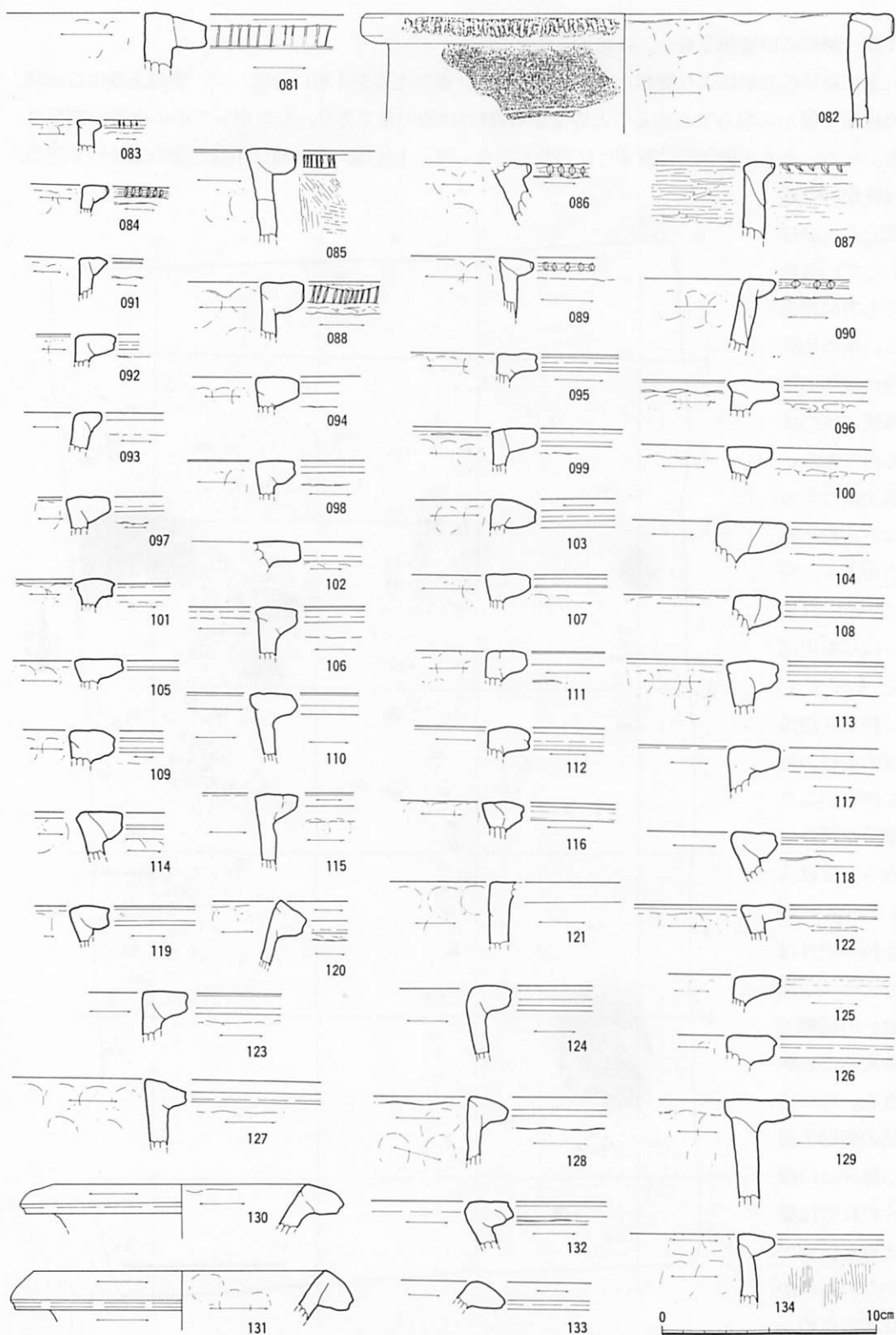
つかないものが

存在するため、

今回壺形土器と



第38図 遺物分布図 (1/200)



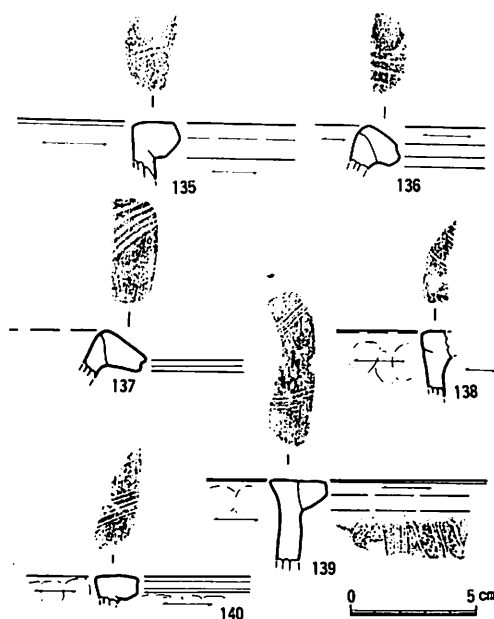
第39図 弥生土器(1) (1 / 3)

判断した資料の中にも甕形土器が含まれている可能性のあることも指摘しておきたい。

沈線・櫛描文をもつ土器片 (008・055・066・065・135～140・165～172)

18点出土している。これらの内、遺構内出土遺物の項で取り扱わなかったものについて略述する。

135～140は口縁部上面に櫛描きの短線を施文するものである。135～137は壺形土器で、他は甕形土器と考えられる。139は口縁部上部の短線施文具と同一の施文具により、口縁部直下に櫛描波状文をほどこす。波状文の施文方向は掲載図の位置関係において左→右である。166・167は一条の沈線を施す。壺形土器の肩部破片である。168～169は数条の平行沈線を施した土器破片である。甕形土器の胴部片であろう。171は肥厚部に斜沈線を施文する。器種・時期等詳細は不明である。172は壺形土器の肩部破片と思われる。破片上部に櫛描波状文の一部が観察され、外面は横方向のミガキが施される。波状文の施文単位、方向等は不明である。



第40図 弥生土器(2) (1 / 3)

特種土器片 (173～175)

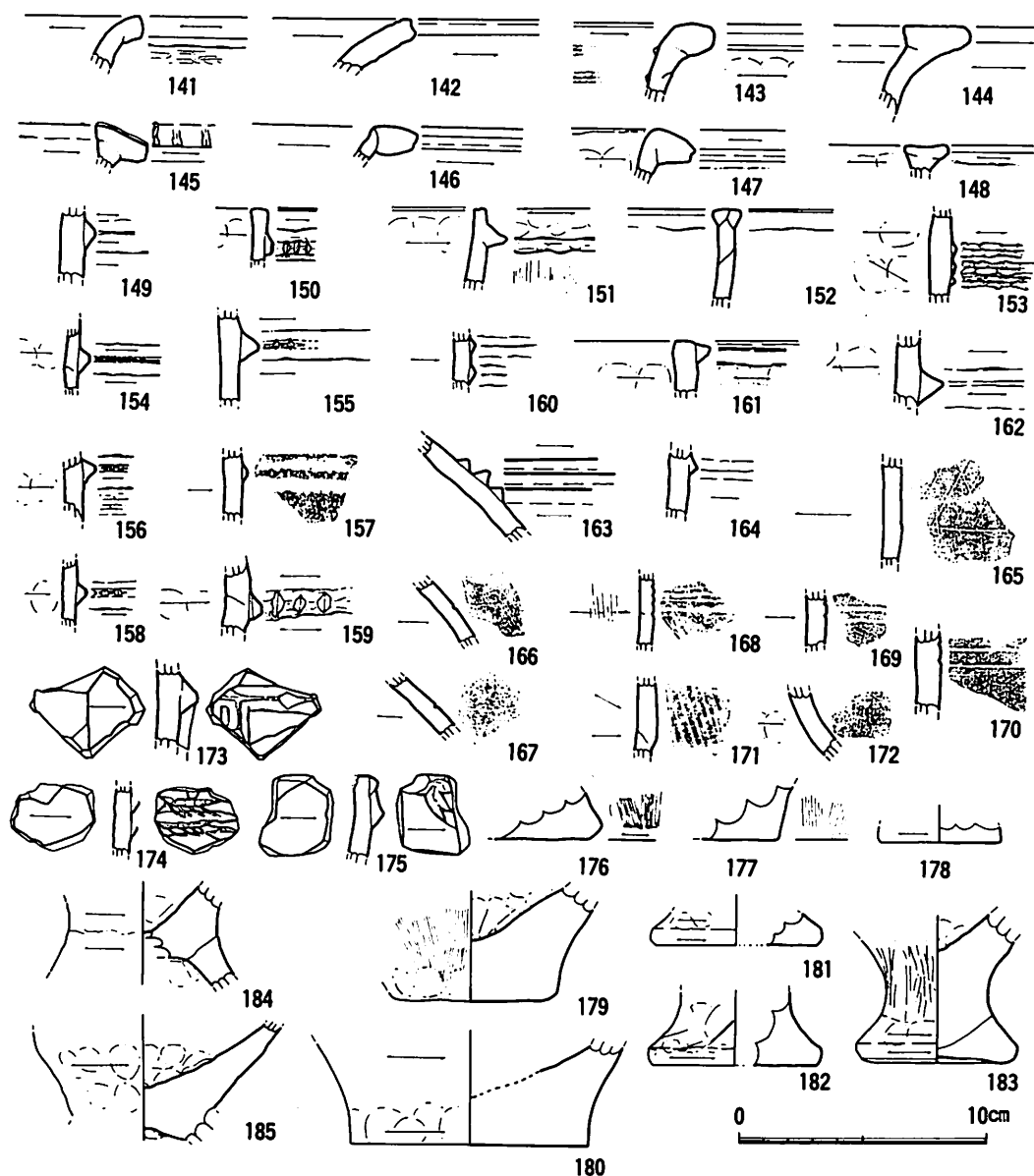
173は縦位の突帯を貼付する土器片である。残存部で2条の縦位突帯を観察できる。174は突帯の上部は欠損するが、突帯貼付後に突帯上にへら状工具により羽状に刻みをいれる。器種等は不明。175は口縁部外面に粘土帯を貼り付け、さらに縦方向に垂れ下がるように粘土紐を貼付する口縁部である。内・外面共に横方向のナデにより調整される。所属時期等は不明であるが便宜的にこの項目において取り扱った。

底部 (176～185)

甕形土器の底部では弥生時代中期に属するもの (178・181・182・183) と古墳時代に属するもの (184・185) が出土している。183は充実した甕形土器の脚台である。外面は横方向のナデ調整の後、へらによる縦方向のミガキが施される。184・185は成川式土器の底部である。調整は概して雑であり、指頭痕を明瞭に残す。脚台部はいずれも欠損する。

成川式土器 (第41図)

成川式土器は5号溝、及びIV層上部に少量出土している。甕形土器のみの出土であり、口縁部の形態も単一時期のものに限られる。041～045・047, 184・185等がこれに相当する。いずれも外開きする口縁部を持つものであり、内面に稜を有さず、肩部突帯も持たない。これらは成川式土器と

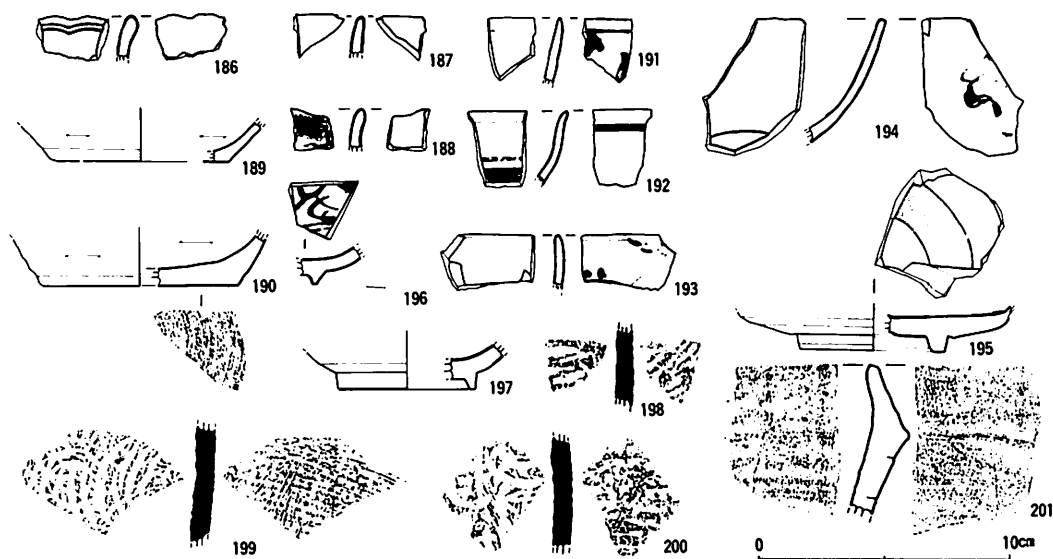


第41図 弥生土器(3)・古墳時代の土器 (1/3)

呼称される土器様式群のなかでも、比較的古相の部類に属するものであり、郡元団地Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ区の発掘調査報告の中での分類に従えば、第2類・退化「く」の字型口縁の変形土器に該当するものである。

(3) 須恵器 (第42図)

須恵器は総計5点出土している。2号溝(028), 6a号溝(072)中出土の2点を除けば、他の3点はⅡ層あるいは攪乱中からの出土であり、いずれもローリングを受けており、風化による摩滅



第42図 須恵器・陶磁器類 (1 / 3)

が著しい。198は外面に幅2.5mmの平行叩き、内面に幅3.5mmの平行叩きを施す。外面には淡黒灰色の自然釉の付着がみられる。胎土は密であり赤焼けである。199は外面に1.5mm×2.2mmの格子目叩き、内面には同心円叩きが施される。胎土は密であり、焼成は良好である。200は外面に3mm×3mmの格子目叩き、内面には同心円叩きが施される。胎土には精良な粘土を使用しているが、中に径3mm程度の角閃石を少量含む。

(4) 中・近世の出土遺物 (第42図)

当該期の出土遺物は出土量が少ないため、ここで一括して取り扱い、説明を加える。

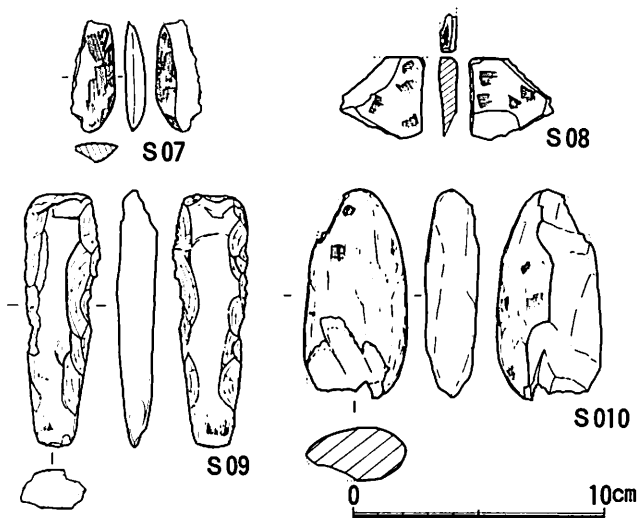
遺物内容には青磁・土師器・染付・備前焼・薩摩焼がある。いずれもⅡ～Ⅳ層中からの出土である。ただ、Ⅳ層中から出土するものはいずれもⅣ層の上部に出土し、また出土範囲も限定されることから、ただちにⅣ層に本来包含されていたものとは断定できない。

186～188は青磁片である。186・188は稜花皿の口縁部片と思われる。186は淡緑白色の釉がかかり、内面には口縁周縁にそって2本の沈線を巡らしている。磁胎は灰白色を呈する。188は断面舌状を呈する口縁部の内面に3本の沈線を巡らす。淡緑色の釉を施釉し、磁胎は灰白色を呈する。186が口縁部周縁にそって沈線を巡らすのに対し、188は周縁形とは逆に沈線を施す。187は口縁部片である。淡緑色の釉が施釉され、磁胎は灰白色を呈す。189、190は土師器坏である。精製土を使用し、胎土中には径0.5mm程度の長石粒を少量含む。内・外面ともナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りである。191～194は染付の口縁部片である。いずれも釉下に呉須により文様を描く。194は内面見込み部分に蛇ノ目がみられる。195は高台片である。復元底径5.8cmを計り、内面見込みには蛇ノ目がみられ、露胎となる。施釉されるのは内面のみで灰白色の釉がかかる。高台および畳付部分は回転ヘラケズリにより整形される。196は染付の高台片である。内・外面とも施釉され、内面見込み部分、および高台外面の釉下に呉須により文様・線文を描く。磁胎は灰白色を呈す。197は復元底径5.5cmを計る薩摩焼きの高台部片である。器種は不明であるが、高台部以外に透明な

釉がかかる白物である。施釉部分には貫入がみられる。201は暗紫褐色を呈する備前焼播鉢の口縁部である。口縁端面を幅広く作り、上方向に拡大する。外器面において粘土接合痕が明瞭であり、胎土中には径2～3mm程度の砂粒を含む。これは間壁忠彦氏編年の第Ⅳ期（15世紀）に比定されるものである。

(5) 石器（第43図）

出土石器には石鏃・紡錘車・砥石・石斧・磨製石器片がある。これらの内、石鏃・紡錘車・砥石についてはすでに遺構内出土遺物の項で付言しているので本項では石斧・磨製石器片について略説する。S07磨製石斧の刃部片である。表面には規則性のある捺痕が観察される。Ⅶ層中より出土した。S08は頁岩製の磨製石器片である。大部分が



第43図 出土石器（1／3）

欠失しており全容は不明であるが、上部の平坦面、石器自身の厚さ等を考慮すれば磨製の石庖丁である可能性が高い。S09は刃部の幅が1.5cmを計り、ノミ状を呈する。両側面を剥離により調整し、刃部は入念な研磨が施される。砂岩製である。S10は頁岩製の磨製石斧である。刃部は欠損し、残存重量85gを計る。

表 5 石器観察表

番号	種 類	出土区・層	法量(長さ・幅・厚さcm)	重量(g)	石 質	備 考
S01	管 玉	f-④・土壇6	長さ0.95・径0.5		碧 玉	
S02	石 鏃	f-④・土壇7	1.58・1.21+α・0.21		砂 岩	
S03	石 鏃	e-⑥・土壇14	1.01+α・1.63・0.38		黒 曜 石	薩摩郡樋脇町牛鼻産の黒曜石か？
S04	紡 錘 車	h-③・5号溝	半径約2.4cm・厚さ0.44	3.5	砂 岩	
S05	砥 石	e-⑤・11号溝	6.3+α・7.08・3.92	309	砂 岩	天草砥石
S06	石 鏃	j-⑥・8号溝	1.83・1.4・0.32		石 英 質 の 石 材	
S07	石 斧	e-⑦・Ⅶ層	1.7+α・4.47+α・0.66+α	6	熱変性を受けた砂岩	
S08	石庖丁？	i-⑥・Ⅲ層上面	3.19+α・0.65・3.41+α	7	頁 岩	
S09	石 斧	i-⑤・Ⅱ層	9.98・2.98・1.57	60	砂 岩	
S10	石 斧	g-⑤・Ⅲ層	8.15+α・4.12・2.0	85	頁 岩	

表6 土器観察表

番号	出土区	出土層	分類	胎土	色調(外)	色調(内)	器面調整(外)	器面調整(内)	備考
001	i-⑥	1号住	弥壺Ⅰa	PL	明橙黄色	明橙黄色	横ナデ	横ナデ	口縁部上面に刻み
002	f-③	3号住	弥壺Ⅱa	PL H(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	横ナデ	
003	f-③	2号住	弥壺Ⅰ?	PL(1)	淡黒褐色	淡赤褐色	横ナデ	ミガキ(横)	
004	f-④	2号住	弥壺Ⅰb	PL(0.5)	黒褐色	黒褐色	横ナデ	横ナデ	外面に炭化物の付着
005	f-④	2号住	-	Q(1)	淡橙褐色	淡茶褐色	横ナデ	横ナデ	外面下位が剥離する
006	f-③	2号住	-	PL(1)	赤黒色	淡赤褐色	ミガキ	ミガキ(横)	傾きに若干疑問あり
007	f-③	2号住	-	PL(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	ミガキ(横)	ミガキ(横)	
008	f-③	2号住	-	PL H(1)	淡黒褐色	淡黒褐色	横ナデ	横ナデ	上部に梯描文
009	f-③	2号住	-	PL H(1)	淡黄褐色	淡黄褐色	横ナデ	ナデ	
010	f-③	2号住	-	PL(1)	淡赤褐色	淡赤褐色	ミガキ(横)	ナデ・指オサエ	底面ナデ調整
011	g-③	土壇4	弥壺Ⅱ	Q H(1)	淡赤褐色	淡赤褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾き若干疑問あり
012	g-③	土壇5	-	PL(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ	傾き上下関係不詳
013	f-④	土壇6	弥壺Ⅰa	PL(1)	黒褐色	暗黄褐色	工具ナデ(縦)	ナデ	
014	f-④	土壇6	-	PL H(1)	黒褐色	橙茶褐色	ハケ目(縦)	ナデ・指オサエ	傾きに若干疑問あり
015	f-⑥	土壇10	-	PL(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
016	d-⑥	土壇14	弥壺Ⅲb	PL(1)	淡赤褐色	淡赤褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
017	d-⑥	土壇14	弥壺Ⅰb	PL(0.5)	赤橙褐色	淡黒褐色	横ナデ	横ナデ	
018	d-⑥	土壇14	-	PL(1)	淡茶褐色	淡茶褐色	横ナデ	横ナデ	傾き上下関係不詳
019	d-⑥	土壇14	-	PL(1)	淡赤褐色	淡黄褐色	横ナデ	ナデ?	底面ナデ調整
020	d-⑥	土壇14	-	PL H(1)	黄褐色	淡橙褐色	ハケ目(縦)	指オサエ	底面ナデ調整
021	d-⑥	土壇14	縄文	PL H(1)	淡茶褐色	淡橙褐色	ナデ	ナデ・指オサエ	3点接合
022	g-⑥	2号溝	弥壺Ⅱ	PL H(1)	淡橙褐色	淡黄褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾きに若干疑問あり
023	j-⑦	2号溝	弥壺Ⅱ	PL H(1)	淡赤褐色	淡黄褐色	不明	横ナデ	傾きに若干疑問あり
024	j-⑥	2号溝	弥壺Ⅱ	PL H(1)	黄茶褐色	黄茶褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
025	h-⑥	2号溝	-	PL(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ?	傾き上下関係不詳
026	j-⑥	3号溝	-	PL H(0.5)	橙黄褐色	橙黄褐色	ハケ・横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
027	j-⑦	2号溝	弥壺Ⅴ	PL H(1)	淡黄褐色	淡黄褐色	横ナデ	不明	
028	h-⑥	2号溝	須恵器	H(1)	淡黄白色	暗灰黒色	格子目叩き	平行叩き	傾き上下関係不詳
029	h-③	5号溝	弥壺Ⅱ	PL H(1)	赤褐色	赤褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
030	g-④	5号溝	弥壺Ⅱ	PL H(1)	淡赤褐色	淡黄褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾きに若干疑問あり
031	h-③	5号溝	弥壺Ⅱa	PL(1)	淡黄褐色	淡黄褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
032	f-④	5号溝	弥壺Ⅱb	PL(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
033	g-④	5号溝	弥壺Ⅲa	PL H(1)	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ・指オサエ	横ナデ	
034	f-④	5号溝	弥壺Ⅳb	PL H Q	淡赤褐色	淡赤褐色	横ナデ	横ナデ	
035	d-⑤	5号溝	-	PL(1)	淡茶褐色	淡茶褐色	横ナデ	ナデ	傾き上下関係不詳

番号	出土区	出土層	分類	胎土	色調(外)	色調(内)	器面調整(外)	器面調整(内)	備考
036	g-④	5号溝	—	PL (1)	明橙褐色	明橙褐色	ハケ目・ナデ	ナデ・指オサエ	傾き上下関係不詳
037	f-④	5号溝	—	PL H(1)	淡黄褐色	淡黄褐色	横ナデ	不明	傾き上下関係不詳
038	f-④	5号溝	—	PL (0.5)	黒茶褐色	淡赤褐色	横ナデ	横ナデ	傾き上下関係不詳
039	f-④	5号溝	—	PL H(1)	赤褐色	赤褐色	横ナデ	ナデ	傾き上下関係不詳
040	e-⑤	5号溝	弥壺Ⅲ	PL (1)	淡黄褐色	淡黄褐色	ハケ目(縦)	ハケ目(横)	傾きに若干疑問あり
041	f-④	5号溝	古・壺	PL H(1)	黒色	淡赤褐色	横ナデ	ハケナデ・ナデ	外面に炭化物の付着
042	f-④	5号溝	古・壺	PL H(1)	黒色	淡赤褐色	不明	ナデ・指オサエ	外面に炭化物の付着
043	f-④	5号溝	古・壺	PL (1)	淡茶褐色	赤茶褐色	不明	ハケナデ・ナデ	傾きに若干疑問あり
044	f-④	5号溝	古・壺	PL (1~2)	黒茶褐色	赤茶褐色	ハケナデ・ナデ	ハケナデ・ナデ	傾きに若干疑問あり
045	f-④	5号溝	古・壺	PL H(1)	淡赤褐色	淡茶褐色	ハケナデ・ナデ	ハケナデ・ナデ	5点接合
046	h-③	5号溝	弥底部	PL H(1)	黄茶褐色	淡赤黄色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	底面はナデ調整
047	g-④	5号溝	古底部	PL (1)	赤茶褐色	赤茶褐色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	脚内はナデ・指オサエ
048	h-③	5号溝	壺底	PL H(1)	淡赤褐色	不明	不明	不明	底面はナデ調整
049	g-⑤	6a号溝	弥壺Ⅳb	PL H Q	淡黄色	淡黄色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	
050	h-③	6号溝	弥壺Ⅲb	PL (1)	淡黄白色	淡黄白色	横ナデ	ナデ・指オサエ	口縁部上面が若干くぼむ
051	e-⑤	6a号溝	弥壺Ⅱ	PL (1)	赤褐色	赤褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾きに若干疑問あり
052	h-⑤	6a号溝	弥壺Ⅰb	PL H(1)	明橙黄色	明橙黄色	横ナデ	ナデ・指オサエ	風化による摩滅が著しい
053	h-⑥	6a号溝	弥壺Ⅳc	PL (1)	橙茶褐色	橙茶褐色	ナデ・指オサエ	ナデ	成型・調整が難
054	f-⑤	6a号溝	弥壺Ⅱ	PL H(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	傾きに若干疑問あり
055	i-④	6a号溝	弥壺Ⅱ	H Q(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	横ナデ	口縁部上端に凹隙を有す
056	不明	6b号溝	弥壺Ⅳc	PL H(1)	淡橙褐色	淡黄褐色	ナデ・指オサエ	横ナデ	
057	g-⑤	7号溝	弥壺Ⅱ	PL (1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	横ナデ	丹塗り?
058	g-⑤	7号溝	弥壺Ⅴ	PL H(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾きに若干疑問あり
059	e-⑥	6b号溝	縄文	PL H(1)	淡茶褐色	淡橙褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
060	h-⑤	10号溝	—	Q (1)	黒灰色	淡黄褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾き上下関係不詳
061	h-⑤	10号溝	—	PL H(1)	淡茶褐色	赤橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾き上下関係不詳
062	e-⑤	6b号溝	—	PL H(1)	黒茶褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾き上下関係不詳
063	g-⑥⑦	8号溝	—	PL (1)	淡褐色	淡褐色	横ナデ	ナデ	傾き上下関係不詳
064	e-⑥	6a号溝	—	PL (1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ	傾き上下関係不詳
065	g-⑦	8号溝	—	H (1)	明褐色	淡茶褐色	横ナデ	ナデ	傾き上下関係不詳
066	e-⑤	7号溝	—	PL H(1)	淡黄褐色	淡黄褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾き上下関係不詳
067	g-⑤	7号溝	—	PL H(1)	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ	横ナデ	傾き上下関係不詳
068	f-⑤	7号溝	—	PL H(1)	赤橙褐色	赤褐色	ハケ目・横ナデ	ナデ・指オサエ	傾き上下関係不詳
069	g-⑤	6a号溝	鉄製品	—	—	—	—	—	重量6g
070	g-⑤	6号溝	弥壺底	PL (1)	赤褐色	赤褐色	ナデ・横ナデ	不明	

番号	出土区	出土層	分類	胎土	色調(外)	色調(内)	器面調整(外)	器面調整(内)	備考
071	g-⑤	7号溝	弥壺底	PL H(1)	赤橙色	赤橙色	横ナデ	不明	底面はナデ調整
072	f-⑤	6a号溝	須恵器	砂粒(1~2)	淡灰白色	淡灰白色	回転ナデ調整	回転ナデ調整	傾き上下関係不詳
073	f-⑤	7号溝	弥壺底	PL H(1)	赤褐色	赤褐色	ミガキ(横)	不明	底面はナデ調整
074	f-⑤	6a号溝	壺底	PL(1~2)	赤褐色	赤褐色	横ナデ	不明	底面はナデ調整
075	g-④	IV下	縄文	PL(1)	淡黄褐色	淡赤褐色	不明	不明	傾きに疑問あり
076	i-③	攪乱	—	PL(0.5)	黒茶褐色	橙茶褐色	ナデ・ミガキ	ミガキ(横)	傾きに疑問あり
077	g-④	Ⅲ	縄文	PL(1)	赤褐色	不明	貝殻条痕	不明	
078	j-④	Ⅶ	縄文	PL H(1)	赤褐色	淡黒灰色	貝殻条痕	削り様ナデ	傾き上下関係不詳
079	e-⑥	Ⅶ?	—	PL(1)	淡黄褐色	淡黄褐色	横ナデ	不明	傾き上下関係不詳
080	f-④	IV下	縄文	PL(1)	淡赤褐色	淡黄白色	貝殻条痕	ナデ	底面はナデ調整
081	i-⑧	Ⅱ	弥壺Ⅲa	H(0.5)	橙褐色	橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
082	e-③	IV下	弥壺Ⅲa	PL H(1)	黒橙褐色	橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	胴部に沈線
083	f-③	IV下	弥壺Ⅲa	PL H(1)	淡橙黄色	淡橙黄色	横ナデ	ナデ・指オサエ	全面摩滅が著しい
084	f-④	IV下	弥壺Ⅱa	PL H(1)	黄茶褐色	黄茶褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
085	f-⑥	Ⅲ	弥壺Ⅳa	PL(1)	淡赤褐色	淡黄褐色	ミガキ	ナデ・指オサエ	
086	f-④	IV下	弥壺Ⅳa	PL(1)	淡褐色	淡灰白色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾きに若干疑問あり
087	f-⑦	IV下	弥壺Ⅱa	PL(0.5)	黒色	橙褐色	ミガキ(横)	ミガキ(横)	
088	e-③	Ⅲ	弥壺Ⅲa	PL H(1)	赤橙褐色	赤橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	全体的に作りか雑
089	i-④	Ⅱ	弥壺Ⅱa	PL(1)	淡黒褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
090	e-③	IV下	弥壺Ⅱa	PL(0.5)	明橙褐色	明橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
091	f-⑦	IV下	弥壺Ⅱb	PL(1)	淡灰黒色	淡黄白色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
092	g-④	IV	弥壺Ⅲb	PL H(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
093	e-④	IV下	弥壺Ⅱb	PL H(0.5)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	横ナデ	
094	e-③	Ⅲ	弥壺Ⅲc	PL H(1)	淡茶褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
095	g-⑥	攪乱	弥壺Ⅲb	PL H(1)	明橙褐色	明橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
096	h-⑥	Ⅱ	弥壺Ⅳb	Q H(1)	淡橙黄色	淡橙黄色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
097	e-③	Ⅲ	弥壺Ⅲc	PL 黒曜石	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
098	f-⑥	Ⅲ	弥壺Ⅲb	H(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
099	e-③	IV下	弥壺Ⅳc	H(1)	赤褐色	赤褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
100	e-⑥	IV下	弥壺Ⅲc	PL(1)	橙黄褐色	橙黄褐色	横ナデ・オサエ	横ナデ	
101	g-③	IV下	弥壺Ⅳc	PL(1)	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	
102	e-⑥	IV下	弥壺?	PL H(1)	橙黄褐色	橙黄褐色	ナデ・指オサエ	不明	
103	g-③	IV	弥壺Ⅱ	PL H(1)	赤橙褐色	淡黄褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
104	e-⑥	Ⅲ	弥壺Ⅲc	PL M(1)	黒褐色	赤橙褐色	横ナデ	横ナデ	
105	f-⑥	Ⅲ	弥壺Ⅳc	PL(1)	淡赤褐色	淡赤褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	

番号	出土区	出土層	分類	胎土	色調(外)	色調(内)	器面調整(外)	器面調整(内)	備考
106	e-④	Ⅲ	弥生Ⅲb	PL H(1)	淡赤褐色	淡赤褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
107	e-③	Ⅲ	弥生Ⅲb	PL (0.5)	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	
108	i-③	Ⅳ	弥生Ⅲb	PL (1)	赤黄褐色	赤黄褐色	横ナデ	横ナデ	丹塗り?
109	e-③	Ⅲ	弥生Ⅲb	PL H(1)	黄茶褐色	黄茶褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
110	g-③	Ⅳ下	弥生Ⅳc	PL (1)	淡赤褐色	淡赤褐色	横ナデ	横ナデ	
111	不明	不明	弥生Ⅲc	PL H(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
112	c-⑥	Ⅳ下	弥生Ⅲb	PL (1)	明橙褐色	明橙褐色	横ナデ	横ナデ	
113	c-③	Ⅲ	弥生Ⅲb	PL H(1)	赤褐色	赤褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾きに若干疑問あり
114	g-④	Ⅳ下	弥生Ⅲb	PL (1)	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	
115	e-③	Ⅲ	弥生Ⅲc	H (1)	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ・指オサエ	横ナデ	
116	e-④	Ⅳ下	弥生Ⅲb	Q (1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾きに若干疑問あり
117	e-③	Ⅲ	弥生Ⅲc	PL H(1)	淡黒褐色	淡黒褐色	横ナデ	横ナデ	
118	不明	Ⅳ	弥生Ⅲb	PL 黒曜石	淡黒褐色	淡橙褐色	横ナデ	横ナデ	
119	h-⑤	Ⅳ下	弥生Ⅲb	PL H(1)	淡黄褐色	淡黄褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾きに若干疑問あり
120	e-⑤	Ⅳ下	弥生Ⅱ	PL H(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾きに若干疑問あり
121	f-④	Ⅳ下	不明	PL	淡茶褐色	淡茶褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
122	f-④	Ⅳ下	弥生Ⅳb	PL H(1)	淡赤黄色	淡赤黄色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
123	f-④	Ⅳ下	弥生Ⅲb	PL (1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	横ナデ	
124	f-⑤	Ⅳ下	弥生Ⅲb	PL H(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
125	h-⑤	Ⅳ下	弥生Ⅲb	PL (1)	淡黄褐色	淡黄褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾きに若干疑問あり
126	h-⑦	Ⅳ	弥生Ⅲb	PL (1)	明橙褐色	明橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
127	e-⑥	Ⅳ下	弥生Ⅴ	PL H(1)	赤黄褐色	赤黄褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
128	i-⑥	Ⅳ	弥生Ⅱ	PL M(1)	淡赤褐色	淡赤褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾きに若干疑問あり
129	h-④	Ⅳ下	弥生Ⅳc	PL Q(1)	橙黄褐色	橙黄褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
130	h-⑤	Ⅱ	弥生Ⅱ	PL (1)	赤橙褐色	赤橙褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
131	f-④	Ⅳ下	弥生Ⅱ	PL H(1)	赤黄褐色	赤黄褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾きに若干疑問あり
132	j-⑥	Ⅳ	弥生Ⅲc	PL (1)	淡赤褐色	淡黄褐色	横ナデ	横ナデ	
133	g-④	Ⅳ下	弥生Ⅱ	PL H(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
134	f-④	Ⅳ下	弥生Ⅱb	PL H(1)	灰茶褐色	淡黄褐色	ハケ目(縦)	ナデ・指オサエ	傾きに若干疑問あり
135	f-⑤	Ⅲ	弥生Ⅱ	PL H(1)	赤橙褐色	赤橙褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
136	e-③	Ⅲ	弥生Ⅱ	Q (2~3)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
137	j-⑦	Ⅳ	弥生Ⅱ	PL H(1)	淡黄褐色	淡黄褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
138	e-③	Ⅲ	弥生?	PL H(1)	明橙褐色	明橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
139	e-③	Ⅲ	弥生Ⅳc	PL (1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
140	e-③	Ⅲ	弥生Ⅲb	PL H(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	

番号	出土区	出土層	分類	胎土	色調(外)	色調(内)	器面調整(外)	器面調整(内)	備考
141	d-③	Ⅲ	弥壺Ⅲ?	PL (1)	淡橙褐色	淡橙褐色	ミガキ・ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
142	e-③	Ⅲ	弥壺Ⅲ	—	淡黄褐色	淡黒褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
143	c-④	Ⅲ	弥壺Ⅰ	PL H(1)	淡橙褐色	淡黄褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
144	e-③	Ⅲ	弥壺Ⅳ	PL (1)	淡黄褐色	淡黄褐色	横ナデ	横ナデ	
145	i-⑦	Ⅳ	弥壺Ⅱ	PL (1)	明橙褐色	明橙褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
146	g-④	Ⅳ	弥壺Ⅱ	PL (1)	淡赤褐色	淡赤褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
147	不明	攪乱	弥壺Ⅱ	PL H(1)	淡黄白色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾きに若干疑問あり
148	g-④	Ⅲ	弥壺Ⅳc	PL H(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	
149	g-⑤	Ⅳ下	—	PL H(1)	明褐色	淡黒色	横ナデ	ナデ	傾き上下関係不詳
150	e-⑥	Ⅲ	弥壺Ⅰa	PL (1)	明橙褐色	明橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	風化による摩滅が著しい
151	f-⑥	Ⅲ	弥壺Ⅰb	PL (1)	淡黒茶褐色	淡黄褐色	ハケ目(縦)	ナデ・指オサエ	
152	f-⑤	Ⅲ	弥壺Ⅳc	PL H(1)	黄茶褐色	黄茶褐色	ナデ?	ナデ?	
153	i-⑤	Ⅳ上	—	PL H(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾き上下関係不詳
154	g-④	Ⅳ	—	PL (1)	明橙褐色	赤黄褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾き上下関係不詳
155	h-⑦	Ⅳ	—	PL H(1)	赤橙褐色	赤橙褐色	横ナデ	不明	傾き上下関係不詳
156	f-③	Ⅲ	—	PL (1)	黒橙褐色	橙褐色	ミガキ(横)	ナデ・指オサエ	傾き上下関係不詳
157	h-⑤	Ⅱ	—	PL (1)	淡赤褐色	淡赤褐色	横ナデ	ナデ	傾き上下関係不詳
158	f-④	Ⅳ下	—	PL (1)	淡黄褐色	淡黄褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾き上下関係不詳
159	c-③	Ⅳ下	—	砂粒(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾き上下関係不詳
160	f-⑥	Ⅳ下	—	PL H(1)	淡橙黄色	淡橙黄色	横ナデ	ナデ	傾き上下関係不詳
161	e-③	Ⅲ	弥壺Ⅱb	PL H(1)	淡黄褐色	淡黄褐色	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	赤色塗彩?
162	h-③	Ⅳ	—	PL 黒曜石	淡橙褐色	淡茶褐色	横ナデ	ナデ・指オサエ	傾き上下関係不詳
163	e-④	Ⅲ	—	PL (1)	淡黄褐色	淡黄褐色	横ナデ	ナデ	傾きに若干疑問あり
164	e-③	Ⅳ下	—	PL (1)	黒色	淡茶褐色	横ナデ	ナデ	外面に炭化物の付着
165	f-④ c-③	Ⅳ下	—	PL (1)	淡橙黄色	淡橙黄色	ミガキ(横)	横ナデ	傾き上下関係不詳
166	f-④	Ⅳ下	—	PL H(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
167	e-③	Ⅳ下	—	PL (1)	黒橙褐色	黒褐色	ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり
168	e-⑤	Ⅲ	—	PL H(1)	黄茶褐色	黄茶褐色	横ナデ	ハケナデ(縦)	傾き上下関係不詳
169	f-④	Ⅳ下	—	PL H Q	明橙褐色	明橙褐色	不明	横ナデ	傾き上下関係不詳
170	e-⑥	Ⅳ下	—	PL H(1)	淡赤褐色	淡赤褐色	横ナデ	横ナデ	傾き上下関係不詳
171	e-④	Ⅳ下	—	PL (1)	淡茶褐色	黒色	横ナデ	横ナデ	傾き上下関係不詳
172	g-④	Ⅳ	—	PL H(1)	赤褐色	赤褐色	ミガキ	指ナデ	傾き上下関係不詳
173	g-④	Ⅳ	—	PL H(1)	淡橙褐色	淡橙褐色	ナデ	横ナデ	傾き上下関係不詳
174	e-⑤	Ⅱ	—	PL (0.5)	明橙褐色	橙黄褐色	ナデ	ナデ・指オサエ	傾き上下関係不詳
175	f-④	Ⅳ下	—	PL H(1)	橙茶褐色	淡黄褐色	横ナデ	横ナデ	傾きに若干疑問あり

番号	出土区	出土層	分類	胎土	色調(外)	色調(内)	器面調整(外)	器面調整(内)	備考
176	g-④	Ⅳ	弥生底	PL Q(1)	淡黒褐色	不明	ハケ目・ナデ	不明	底面はナデ調整
177	f-④	Ⅳ下	弥生底	Q(1)	淡黄褐色	不明	ハケ目(縦)	不明	底面はナデ調整
178	e-④	Ⅳ下	弥生底	PL(1)	赤橙褐色	不明	横ナデ	不明	底面はナデ調整
179	g-⑤	Ⅳ下	弥生底	PL H(1)	淡赤褐色	黄茶褐色	ハケ目(縦)	ナデ・指オサエ	底面はナデ調整
180	f-④	Ⅳ下	弥生底	PL Q(1)	淡黄褐色	黒黄褐色	ナデ・指オサエ	不明	底面はナデ調整
181	f-⑥	Ⅲ	弥生底	PL Q(1)	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ・指オサエ	不明	底面はナデ調整
182	f-⑤/⑥	Ⅲ	弥生底	PL(1)	淡赤褐色	淡赤褐色	ナデ・指オサエ	不明	底面はナデ調整
183	不明	攪乱	弥生底	H Q(1)	赤褐色	黒色	ミガキ・ナデ	指オサエ	底面はナデ調整
184	e-④	Ⅳ下	古墳底	PL(1)	明橙褐色	黒色	横ナデ	指オサエ	脚内面はナデ・指オサエ
185	e-⑥	Ⅲ	古墳底	PL H(1)	淡黄褐色	明橙黄色	横ナデ	指オサエ	脚内面は指オサエ
186	不明	不明	青磁	灰白色	淡緑白色	淡緑白色	—	—	傾きに若干疑問あり
187	i-⑥	Ⅳ	青磁	灰白色	淡緑色	淡緑色	—	—	傾きに若干疑問あり
188	e-⑤	Ⅲ	青磁	灰白色	淡緑色	淡緑色	—	—	傾きに若干疑問あり
189	f-⑥	Ⅳ	土師器	精製土	明橙褐色	明橙褐色	横ナデ	横ナデ	底面は糸切り
190	h-④	Ⅳ	土師器	精製土	赤橙褐色	赤橙褐色	横ナデ	横ナデ	底面は糸切り
191	i-⑥	Ⅳ	染付	白色	—	—	—	—	傾きに若干疑問あり
192	i-⑤	Ⅱ	染付	白色	—	—	—	—	傾きに若干疑問あり
193	i-⑥	Ⅱ	染付	白色	—	—	—	—	傾きに若干疑問あり
194	i-⑥	Ⅱ	染付	白色	—	—	—	—	傾きに若干疑問あり
195	不明	Ⅳ	染付	白灰色	—	—	回転ヘラ削り	—	
196	i-⑥	Ⅱ	染付	灰白色	—	—	—	—	
197	i-④	Ⅱ	白磁	—	乳白色	乳白色	—	—	施釉部分には貫入あり
198	i-⑥	Ⅱ	須恵器	H(1)	淡黒灰色	明橙褐色	平行叩き	平行叩き	傾き上下関係不詳
199	h-⑤	Ⅱ	須恵器		青灰白色	灰白色	格子目叩き	同心円叩き	傾き上下関係不詳
200	不明	攪乱	須恵器	H(1)	淡灰白色	淡灰白色	格子目叩き	同心円叩き	傾き上下関係不詳
201	f-⑥	Ⅲ	備前焼	砂粒(2)	暗紫褐色	暗紫褐色	回転ナデ	回転ナデ	傾きに若干疑問あり

〈土器観察表凡例〉

番号	出土区	出土層	分類	胎土	色調(外)	色調(内)	器面調整(外)	器面調整(内)	備考
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

①遺物番号および図版の番号と一致する。

②調査グリッドの区域ナンバーに対応する。

③基本層序、遺構番号に対応する。

④本文中の分類に対応する。

⑤混和材の種類を記してある。

Q-石英、PL-長石、H-角閃石を示している。()内数値は平均的な大きさを示す(単位はミリ)。

⑥⑦⑧⑨肉眼観察による平均的な色調、および調整方法を記述している。

⑩上記以外の特記事項を示している。

7. まとめ

宇宿キャンパスは鹿児島市宇宿町1208-1に所在する標高77mを測るシラス台地末端部に位置し、遺跡地の東側は比高差約65mの急崖をなしている。今回の調査区は医学部の占地するキャンパスのほぼ中央部分にあたり、台地の最高部より一段低い地均された平坦地である。

今回の発掘調査では住居址3、溝状遺構8、土壌等の遺構を確認した他、アカホヤ火山灰を除去した段階に於いて、局部断層を検出した。

住居址は3基発見されたが、いずれも円形を基本プランとするものである。炉跡、柱穴等は確認されていない。覆土中の遺物の状況から弥生時代中期初頭～中葉の所産になるものと判断された。これまで鹿児島県内では吉ヶ崎遺跡¹⁾（中葉）、成川遺跡²⁾（後葉）、前谷遺跡³⁾（後葉）、一の宮遺跡⁴⁾（後葉）、王子遺跡⁵⁾（後葉）等で弥生時代中期の住居址が確認されているが、中期初頭～中葉のものは初例であり、当該期の住居址形態の変遷等の解明にあたり貴重な資料を提供したといえよう。

溝状遺構は8本検出されているが、5号溝以外は時期を特定することはできなかった。これらのうち1号溝⁶⁾と仮称したものはその状況から古道としての性格が考えられる。近年、同様な遺構が大牟礼遺跡等でも確認されている他、中世山城の調査に伴い発見例が増加しつつある。

土壌は覆土の状況から3群に分類が可能であり、特にⅠ群土壌としたものは覆土の状況から考えて住居址と同様な時期、すなわち弥生時代中期のものであることが推測される。また、土壌の機能の推定は遺跡内での状況資料だけでは非常な困難を伴い、この問題の解明には将来の土壌分析等の結果をも含めた総合的な検討が要求されるであろう。

調査区内において検出された局部断層は13～14カ所を数える。層順から縄文時代前期～晩期の時期に形成されたと考えられる。形成要因については、いまだ確定的な論は提出されていないが、ここでは、現在最も妥当性を帯びていると思われる風倒木説に沿った説明を行った。しかしながら、本文中においても触れたように、これはあくまでも仮説であり、今後説明不可能な状況が認められた場合にはこれに代わる成因モデルを再構築することが必要である。

本遺跡では縄文土器、弥生中期土器、成川式土器、須恵器、陶磁器類、石器が出土した。

縄文土器は縄文時代早期相当土器（前平式土器）が、ごく少量アカホヤ火山灰下のⅦ層中から出土する他、Ⅰ～Ⅳ層中において後世遺物と混在する状況で出土する。昭和62年のへい獣焼却炉建設予定地内の発掘調査⁷⁾でのアカホヤ火山灰下の遺物出土状況を考慮すれば、当地における縄文早期の遺物包含層の中心は今回の調査区の北側方向に展開すると考えられる。遺物内容では前平式土器、市来式土器、出水式系土器が出土した。

弥生土器は、小片ばかりで全形を知りうる個体は皆無であるが、口縁部の特徴から、甕形土器を5類11分類、壺形土器を4類にそれぞれ分類した。時期的には中期初頭～中葉のものが主体を占め、昭和45年頃の造成工事の際に採集された遺物内容と一致する。また甕形土器⁸⁾のⅠ類は東九州に広く分布する下城式土器の系譜をひくものと考えられ、南九州における下城式土器の分布状況把握にあたり貴重な資料を提供したと言えよう。ちなみに薩摩半島では揖宿郡山川町成川遺跡⁹⁾において出土がみられる。今回の調査で出土した弥生土器の中には18点の沈線・櫛描文をもつ土器片が含まれており、注目された。中でも139は国分市城山山頂遺跡出土のものと並び、県内最古の櫛描波状文を¹⁰⁾

もつ甕形土器である。本県における弥生中期の甕形土器に櫛描波状文を施文する例としては、これら2点の他、出水郡長島町明神下岡遺跡¹¹⁾26号石棺出土の甕形土器(後葉)をあげることができる。該期の櫛描波状文の系譜・出自はいまだ不明であり、今後の資料の増加を待ち、改めて検討したい。

成川式土器は5号溝、IV層上部において甕形土器が少量出土している。時期的には単一時期のものに限られ、生活選地としての機能が比較的短期間の内に終息したと考えられる。出土土器は郡元団地内遺跡¹²⁾での分類に従えば、第2類とした退化「く」の字型口縁の甕形土器に該当する。

中・近世の出土遺物としては青磁・土師器・染付・備前焼・薩摩焼が出土した。時期は間壁忠彦氏編年の第IV期(15世紀)¹³⁾に該当する備前焼に示される時期を主体とするが、このことは付近に山城等の遺跡の存在することを考えさせるものであり、今後、周辺地域の調査の際には注意を払う必要があろう。

今回の調査で出土した石器には石鏃・紡錘車・砥石・石斧・管玉などがある。これらの内、紡錘車、管玉、砥石以外はその大部分が縄文時代の所産と考えられる。また、今回出土した管玉が弥生時代に属するものであれば、本県での弥生期の管玉の出土例は、日置郡金峰町高橋貝塚¹⁴⁾に次いで2例目となる。

註

- 1) 「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書25』鹿児島県教育委員会 1983年
- 2) 「成川遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書24』鹿児島県教育委員会 1983年
- 3) 「前谷遺跡」『松山町埋蔵文化財発掘調査報告(1)』松山町教育委員会 1986年
- 4) 河口貞徳「一の宮遺跡報告」『考古学雑誌』第37巻第4号 日本考古学会 1951年
- 5) 「王子遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書34』鹿児島県教育委員会 1985年
- 6) 「宮ノ上地下式横穴群・松下城跡・大牟礼遺跡」『吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』吾平町教育委員会 1987年
- 7) 『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ 昭和61年度』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1987年
- 8) 本田道輝「脇田亀ヶ原遺跡についてー鹿児島大学宇宿キャンパス及びその周辺地区に於ける採集遺物の紹介ー」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅰ・昭和60年度』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1986年
- 9) 2に同じ。
- 10) 「城山山頂遺跡」『国分市埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』1985年
- 11) 「明神下岡遺跡」『長島町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』1986年
- 12) 『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅰ 昭和60年度』鹿児島大学埋蔵文化財調査室 1986年
- 13) 間壁忠彦「備前」『世界陶磁全集3 日本中世』小学館 1985年
- 14) 河口貞徳「鹿児島県高橋貝塚」『考古学集刊』第3巻第2号 東京考古学会 1965年

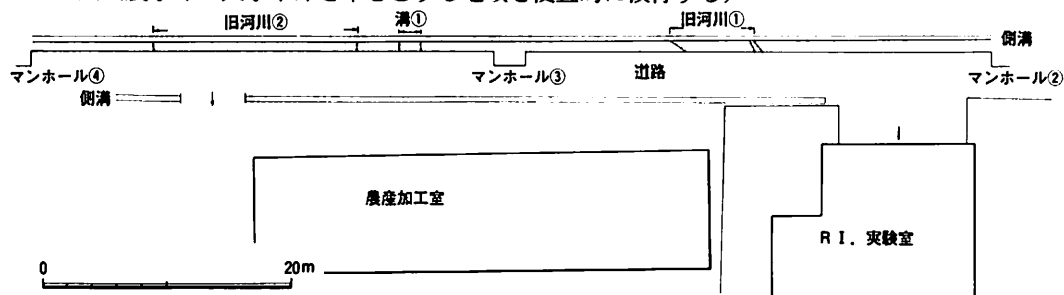
第4章 昭和62年度（昭和62年4月～昭和63年1月）鹿児島大学構内における立合調査報告

昭和62年度に実施した立合調査の概要については第Ⅱ部第1章において記されているが、ここでは情報処理センター新営通信設備工事に伴う立合調査で得られた成果について詳述したい。本工事は鹿児島大学郡元団地のほぼ全域にわたって行われたもので、郡元団地遺跡各地点の状況について若干の所見を得ることができた。

鹿児島大学情報処理センター新営通信設備工事に伴う立合調査

工事に伴う立合調査を昭和62年10月9日～11月20日に実施した。工事は、幅50cmの埋設溝を総延長約700mにわたって掘削し、掘削深度は道路部分で地表下130cm、それ以外の地点では地表下90cmを測る。また、マンホール設置部分においては2m×2m×2m程度の掘削を行った。工事対象範囲は郡元キャンパスのほぼ全域に及び、キャンパス内の土層構成の把握にあたり貴重な資料を提供した。以下に各地点での概要を説明する。

- ・ A地点（農学部・大学本部を中心とする地域を便宜的に仮称する）



第44図 A地点検出遺構位置図 (1/600)

R I 実験施設前から農学部低温貯蔵実験室方向へ延びる工事地点では、埋設溝の他に4基のマンホール設置に伴う掘削が実施された。その結果、第44図に示される位置に溝状遺構1、旧河川跡2を検出した。溝①は埋土に灰褐色砂質土を持ち、比較的粒の大きい軽石を多量に含む。溝幅約160cmを測る。旧河川跡①はマンホール②とマンホール③の間に確認された。河幅約6m30cmを測り、流路は南西方向から北東方向へ向かう。黄茶褐色砂、白灰色細砂を埋土に持ち、その走向から昭和61年のR I 実験施設敷地内の試掘確認調査時のNo.3トレンチにおいて検出された河川に接続するものと推測される。旧河川跡②はマンホール③とマンホール④との間に確認された。明らかに水性作用の所産になると思われる白色粗砂を内部に充填し、中には小礫の互層もみられる。埋設溝の西側部分は側溝埋設に伴う攪乱のため確認できず、その正確な走行を伺い知ることはできないが、その埋土の状況、検出位置等を考慮すれば、昭和58年の温室改築予定地の試掘調査の際のA1～3区第2層以下の土層に対比可能であるかもしれない。幅約11.1mを測る。客土直下に確認されることから、時期的にはそれほど古いものではないと推測される。この溝および旧河川跡自体は埋設溝床よりも下位レベルに存在するので、上面の検出のみにとどめ、埋土の掘り出しはおこなっていない。なお、客土層直下の土層中から染付片が一点出土している。

大学本部前の掘削部分は長さ約6m、深さ1mの規模で実施された。この部分は当該深度まで攪乱客土層が存在し、埋蔵文化財への影響はなかった。攪乱客土層中から土器片を一点採集した。

- ・B地点（電子計算機室・理学部を中心とする地域を便宜的に仮称する）

電子計算機室の南側埋設溝は深度が90cmと浅かったので、特に問題は認められなかった。マンホール部において素焼きの土器片を一点採集している。

工学部電子工学科東側の埋設溝部分ではマンホール部から南側にかけて旧河川跡を検出した。幅27cm以上を測る。この河川跡はその位置関係から昭和51年の理学部2号館増築予定地内発掘調査の際に検出された河川跡に続くものであろう。上部砂層から磨滅の著しい成川式土器片が数点出土した。

学生サークル棟の東側の埋設溝では、約20～30cmの厚さで灰褐色シルト質の成川式土器包含層が南側に向かって次第に薄くなる傾向を示しながら存在する。この包含層は昭和60年に調査を実施した理学部3号館建設予定地内の発掘調査によって確認された包含層に続くものであり、層中からは丹塗りの高杯をはじめ、成川式土器小片が多数出土している。

- ・C地点（工学部・教養部自然科学棟を中心とする地域を便宜的に仮称する）

地表下の80cmの所に暗灰褐色砂質土層が存在し、当該層中から土器の小片がごく少量ではあるが出土する。特徴的なものがないため時期の特定は困難であるが、胎土・焼成等から判断すれば成川式土器の破片である可能性が強い。

- ・D地点（中央図書館・法文学部北側周辺の地域を便宜的に仮称する）

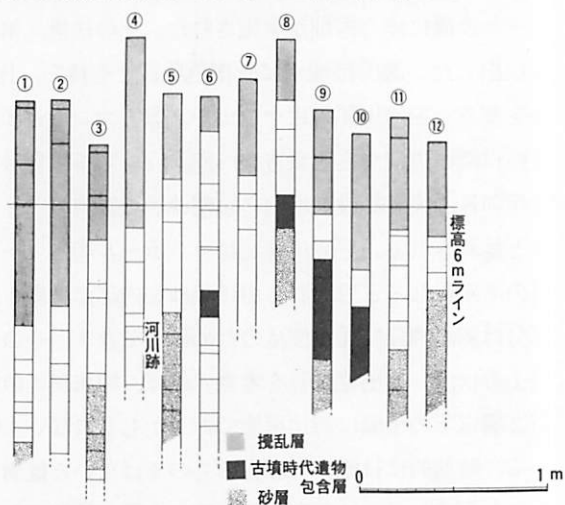
中央図書館の北側部分は、既設の共同溝設置に伴う攪乱が地表下1m以上にまで及んでおり、プライマリーな層に対する影響はなかった。しかし、攪乱層中には成川式土器、須恵器片をはじめとする相当数の遺物が包含されており、攪乱層下に遺物包含層が存在するものと考えられる。

法文学部の北側部分の埋設溝では地表下70cmに黒褐色粘質土層が存在し、層中には多数の土器片を包含する。主体は成川式土器であり、少量の弥生土器を混在する。また遺物包含層直上において、戦時中の焼夷弾を一点検出した。

- ・E地点（教育学部敷地内地域を便宜的に仮称する）

教育学部第2体育館南側での層状況は昭和60年に調査を実施した水町遺跡において確認された水田層に類似する土層が地表下約60cmまで続き、層中より須恵器片が一片出土した。

本地点の他の部分は以前に配管工事が行われている部分にあたり、埋蔵文化財への影響はなかった。



第45図 土層柱状図

①～⑫は図版1の土層観察地点番号に対応する

参考文献

鹿児島大学埋蔵文化財調査室『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅰ 昭和60年度』 1986年

鹿児島大学埋蔵文化財調査室『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅱ 昭和61年度』 1987年

鹿児島大学教育学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室『水町遺跡』 1987年

鹿児島大学農学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室『鹿児島大学郡元団地内遺跡（B～D・9，10地点）』
1987年

鹿児島大学構内遺跡調査要項

・鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則

(設 置)

第1条 本学に、鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(審 議)

第2条 委員会は、本学の施設計画を円滑に行うため埋蔵文化財に関する次の事項を審議する。

- (1) 基本計画の策定に関すること。
- (2) 調査結果に基づく対策に関すること。

(組 織)

第3条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学長
- (2) 各学部長、教養部長、附属図書館長、医学部附属病院院長及び歯学部附属病院院長
- (3) 事務局長
- (4) 学生部長

(委 員 長)

第4条 委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

(議 事)

第5条 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、議事は出席委員の3分の2以上をもって決する。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことが出来る。

(調査委員会)

第7条 委員会は、本学の埋蔵文化財の調査を行うため、埋蔵文化財調査委員会（以下「調査委員会」という。）を置く。

第8条 調査委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 調査実施計画に関すること。
- (2) 第13条に規定する調査室の室長等の選任に関すること。
- (3) 第13条に規定する調査室の予算に関すること。
- (4) その他埋蔵文化財及び第13条に規定する調査室の業務に関すること。

第9条 調査委員会は、次に掲げる委員をもって組織し、学長が任命する。

- (1) 各学部及び教養部の教授、助教授、講師の中から選任された者各1名
- (2) 第15条2項に規定する調査室長

- 2 前項第1号の委員の任期は2年とし、委員に欠員を生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第10条 調査委員会に委員長を置き、前条第1項第1号の委員の中から互選により選出する。

- 2 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

第11条 調査委員会は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は、出席委員の過半数をもって決する。

第12条 調査委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。
(調査室)

第13条 調査委員会に、本学の埋蔵文化財の調査に関する業務を行うための埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

第14条 調査室は、次の業務を行う。

- (1) 調査実施計画の立案
- (2) 発掘調査、分布調査及び確認調査
- (3) 調査報告書の作成
- (4) その他必要な事項

第15条 調査室に、室長、主任及びその他の必要な職員を置く。

- 2 室長は、本学の考古学に関する教官の中から委員会が推薦し、学長が任命する。
- 3 室長は、調査委員会の定める方針に基づき調査室の業務を掌理する。
- 4 室長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。
- 5 主任は、調査室の職員の中から、特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を調査委員会が推薦し、学長が任命する。
- 6 主任は、室長の命を受けて調査室の業務を処理する。
- 7 職員は、調査室の業務に従事する。

(その他)

第16条 埋蔵文化財に関する事務は、事務局施設部において行う。

附 則

- 1 この規則は、昭和60年4月18日から施行する。
- 2 この規則の施行後最初に任命される委員及び室長の任期は、第9条第2項及び第15条第4項の規定にかかわらず、昭和62年3月31日までとする。
- 3 鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則（昭和51年1月22日制定）は、廃止する。

・鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会委員（昭和62年4月1日現在）

委員長 井形 昭弘（鹿児島大学学長）

委員 五味 克夫（法文学部長）

田代 一男（教育学部長）

長谷 綱男（理学部長）

松本 啓（医学部長）

浦郷 篤史（歯学部長）	中島 繁（工学部長）
小倉 弘司（農学部長）	岩切 成郎（水産学部長）
荒川 譲（教養部長）	上村 剛一（附属図書館長）
朝倉 哲彦（医学部附属病院長）	野井倉武憲（歯学部附属病院長）
河野 岩造（学生部長）	明野 清和（事務局長）

・鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会委員（昭和62年4月1日現在）

委員長 難波 直彦（農学部教授）	
委員 原口 泉（法文学部教授）	安藤 保（教育学部教授）
糸野 洋（理学部助教授）	中野 勝麿（医学部教授）
小片 丘彦（歯学部教授）	松村 博久（工学部教授）
田中 淑人（水産学部助教授）	新田 栄治（教養部助教授）
上村 俊雄（調査室長併任 法文学部教授）	

・鹿児島大学埋蔵文化財調査室（昭和62年4月1日現在）

室長（併） 法文学部教授	上村 俊雄
主任（併） 法文学部助手	松永 幸男
技術補佐員	坪根 伸也
技術補佐員	金子千穂枝

受贈図書目録（1987年2月1日～1988年1月31日）

書 名 発 行 機 関

単行本

御意見有用	福井県立若狭歴史民俗資料館	1986年
発掘20年のあゆみ	東大阪市教育委員会・（財）東大阪市文化財協会	1987年
倉敷考古館－解説と周辺の歴史－	倉敷考古館	1987年
広瀬井手日記（1）	別府大学付属博物館	1987年
新富町の埋蔵文化財	宮崎県児湯郡新富町教育委員会	1982年
鹿児島県火砕流分布図	鹿児島大学教育学部	1985年
鹿児島大学南方科学研究委員会 総合研究 昭和58～59年度 桜島	鹿児島大学南方科学研究委員会	1986年
鹿児島市文化財の手引き－その5－ NO.1	鹿児島市教育委員会	1987年

定期刊行物・雑誌

年報 6（調査課10年のあゆみ）	（財）茨城県教育財団	1987年
年報 3（昭和59年度）	（財）君津都市文化財センター	1985年
年報 4（昭和60年度）	（財）君津都市文化財センター	1986年
神奈川県立埋蔵文化財センター 年報 6（昭和61年度）	神奈川県立埋蔵文化財センター	1987年
長野県埋蔵文化財センター年報 3	（財）長野県埋蔵文化財センター	1987年

長野県埋蔵文化財ニュース NO. 19	(財) 長野県埋蔵文化財センター	1987年
長野県埋蔵文化財ニュース NO. 20	(財) 長野県埋蔵文化財センター	1987年
長野県埋蔵文化財ニュース NO. 22	(財) 長野県埋蔵文化財センター	1987年
研究紀要 第10巻	名古屋市博物館	1987年
名古屋市博物館だより 第56号	名古屋市博物館	1987年
名古屋市博物館だより 第57号	名古屋市博物館	1987年
名古屋市博物館だより 第58号	名古屋市博物館	1987年
名古屋市博物館だより 第59号	名古屋市博物館	1987年
金大考古 第14号	金沢大学文学部考古学研究室	1987年
年報 1987	福井県立若狭歴史民俗資料館	1987年
京都府埋蔵文化財情報 第25号	(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター	1987年
京都大学構内遺跡調査研究年報 (昭和59年度)	京都大学埋蔵文化財研究センター	1987年
葦火 第6号	(財) 大阪市文化財協会	1987年
葦火 第7号	(財) 大阪市文化財協会	1987年
葦火 第8号	(財) 大阪市文化財協会	1987年
葦火 第9号	(財) 大阪市文化財協会	1987年
葦火 第10号	(財) 大阪市文化財協会	1987年
葦火 第11号	(財) 大阪市文化財協会	1987年
東大阪市文化財協会ニュース vol. 2, no. 2	(財) 東大阪市文化財協会	1987年

東大阪市文化財協会ニュース vol. 2, no. 3	(財) 東大阪市文化財協会	1987年
東大阪市文化財協会ニュース vol. 2, no. 4	(財) 東大阪市文化財協会	1987年
神戸市埋蔵文化財年報 昭和59年度	神戸市教育委員会	1987年
関西大学考古学研究紀要 (5)	関西大学文学部考古学研究室	1987年
蒜山研究所研究報告 第12号	岡山理科大学蒜山研究所	1986年
岡山大学構内遺跡調査研究年報 3	岡山大学埋蔵文化財調査室	1987年
岡山大学構内遺跡調査研究年報 4	岡山大学埋蔵文化財調査室	1987年
山口大学構内遺跡調査研究年報 V	山口大学埋蔵文化財資料館	1986年
徳島県博物館紀要 第17集	徳島博物館	1985年
ふるさと鞍手 第5号	鞍手町歴史民俗資料館	1987年
ふるさと鞍手 第6号	鞍手町歴史民俗資料館	1987年
九州文化史研究所紀要 第32号	九州大学九州文化史研究施設	1987年
宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報 1985年	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1987年
別府大学付属博物館だより no. 26	別府大学付属博物館	1987年
別府大学付属博物館だより no. 27	別府大学付属博物館	1987年
別府大学付属博物館だより no. 28	別府大学付属博物館	1987年
鹿児島大学南科研資料センター報告	南方科学研究資料センター	1987年

鹿大考古 第4号	鹿児島大学法文学部考古学研究室	1986年
鹿大考古 第5号	鹿児島大学法文学部考古学研究室	1986年
鹿大考古 第6号	鹿児島大学法文学部考古学研究室	1987年
沖縄県立博物館紀要 第13号	沖縄県立博物館	1987年
沖縄県立博物館年報 no. 20	沖縄県立博物館	1987年
調査報告書		
桜ヶ丘1・2遺跡調査報告書	北海道釧路市埋蔵文化財調査センター	1987年
桜ヶ丘3遺跡調査報告書	北海道釧路市埋蔵文化財調査センター	1987年
霞ヶ浦用水建築事業地内埋蔵文化財調査報告書	(財)茨城県教育財団	1987年
一般県道矢幡潮来線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書	(財)茨城県教育財団	1987年
竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書14	(財)茨城県教育財団	1986年
竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書15	(財)茨城県教育財団	1987年
主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書	(財)茨城県教育財団	1987年
一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書1(総和地区)	(財)茨城県教育財団	1986年
星谷上古墳・野馬木戸古墳	(財)君津郡市文化財センター	1985年
塚原遺跡	(財)君津郡市文化財センター	1985年
本名輪遺跡	(財)君津郡市文化財センター	1986年

品子台遺跡	(財) 君津郡市文化財センター	1986年
中六遺跡	(財) 君津郡市文化財センター	1987年
上総線鉄塔建設用地内埋蔵文化財 発掘調査報告書	(財) 君津郡市文化財センター	1986年
富津火力線鉄塔建設用地内埋蔵文化財 発掘調査報告書	(財) 君津郡市文化財センター	1986年
境遺跡	(財) 君津郡市文化財センター	1985年
下中郷塚	(財) 君津郡市文化財センター	1986年
東郷台遺跡 (川原井廃寺)	(財) 君津郡市文化財センター	1986年
三箇遺跡群 II	(財) 君津郡市文化財センター	1986年
真里谷城跡	(財) 君津郡市文化財センター	1985年
神奈川県埋蔵文化財調査報告 29	神奈川県教育委員会	1987年
神奈川県埋蔵文化財センター調査報告 15 宮久保遺跡 1	神奈川県立埋蔵文化財センター	1987年
神奈川県埋蔵文化財センター調査報告 16 日向南新田遺跡	神奈川県立埋蔵文化財センター	1987年
泥中庵脇やぐら群	神奈川県立埋蔵文化財センター	1987年
一つ山遺跡	神奈川県立埋蔵文化財センター	1987年
海老名本郷 (Ⅲ)	本郷遺跡調査団	1987年
金沢城の発掘 - 1981 -	金沢大学文学部考古学研究室	1986年
鳥浜貝塚	福井県教育委員会	1987年

岩の鼻遺跡Ⅱ	福井県立若狭歴史民俗資料館	1987年
中臣遺跡発掘調査概報	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1987年
北野廃寺発掘調査概報	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1987年
京都市内遺跡試掘立合調査概報	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1987年
平安京跡発掘調査概報	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1987年
鳥羽離宮跡発掘調査概報	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1987年
中久世遺跡発掘調査概報	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1987年
一乗院向畑町遺跡発掘調査概報	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1987年
醍醐1号墳発掘調査概報	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1987年
法勝寺跡発掘調査概報	(財)京都市埋蔵文化財研究所	1987年
鳥居前古墳	大阪大学文学部国史学研究室	1987年
西の口遺跡第1次発掘調査概要	(財)東大阪市文化財協会	1987年
若江遺跡第25次発掘調査報告	(財)東大阪市文化財協会	1987年
久宝寺遺跡発掘調査報告	(財)東大阪市文化財協会	1986年
森北町遺跡発掘調査報告書	神戸市教育委員会	1987年
オキダ古墳群発掘調査報告書	神戸市教育委員会	1987年
備中松山城関連遺跡	順正短期大学運動場建設事業埋蔵文化財調査委員会	1986年

横隈狐塚遺跡Ⅱ	小郡市教育委員会	1985年
横隈山遺跡Ⅱ	小郡市教育委員会	1987年
三国小学校遺跡Ⅱ 吹上赤土遺跡	小郡市教育委員会	1987年
千潟下屋敷遺跡	小郡市教育委員会	1987年
三国の鼻遺跡Ⅳ 津古脇田遺跡	小郡市教育委員会	1987年
津古牟田遺跡	小郡市教育委員会	1987年
舟形石棺保存処理事業報告書Ⅱ	大牟田市教育委員会	1987年
久福木・立山遺跡	大牟田市教育委員会	1987年
宮崎館遺跡等範囲確認調査概報	諫早市教育委員会	1987年
岩尻	菊水町教育委員会	1987年
塚原古墳群発掘調査報告書	城南町教育委員会	1986年
駒方古屋遺跡	別府大学付属博物館	1987年
新田原遺跡・瀬戸口遺跡・蔵園 地下式横穴墓	新富町教育委員会	1986年
都城市遺跡詳細分布調査報告書	都城市教育委員会	1986年
鹿児島大学郡元団地内遺跡	鹿児島大学農学部・鹿児島大学法文学部 考古学研究室	1987年
本吉田城跡（カユウカ城跡）	鹿児島県教育委員会	1987年
国分・隼人テクノポリス地域 埋蔵文化財分布調査報告書	鹿児島県教育委員会	1986年

榎木原遺跡	鹿児島県教育委員会	1987年
長浜金久遺跡	鹿児島県教育委員会	1987年
鹿児島県の中世城館跡調査報告書	鹿児島県教育委員会	1987年
鹿児島市文化財調査報告書 第4集	鹿児島市教育委員会	1987年
水の谷遺跡	鹿屋市教育委員会	1986年
柿窪遺跡・城ヶ崎遺跡・大久保遺跡	鹿児島県教育委員会	1987年
岩之上遺跡	鹿屋市教育委員会	1987年
上加世田遺跡 2	加世田市教育委員会	1987年
村原（梶ノ原）遺跡	加世田市教育委員会	1987年
横建遺跡・他	枕崎市教育委員会	1987年
奥木場遺跡	枕崎市教育委員会	1987年
三船古墳	出水郡東町教育委員会	1987年
麦之浦貝塚	川内市土地開発公社	1987年
島巡遺跡	大口市教育委員会	1987年
横川城跡	始良郡横川町教育委員会	1987年
小六郎遺跡・段之原遺跡	揖宿郡喜入町教育委員会	1987年
出口B遺跡・潤ヶ野遺跡・東原遺跡 樽野遺跡・上原遺跡・平原A遺跡・ 平原B遺跡	曾於郡志布志町教育委員会	1987年

四枝道遺跡・楠木岡遺跡・中牛牧遺跡	曾於郡末吉町教育委員会	1987年
長十塚遺跡・石仏段遺跡	曾於郡財部町教育委員会	1987年
宮ノ上地下式横穴群	肝付郡吾平町教育委員会	1987年
本村丸田遺跡	南種子町教育委員会	1987年
先山遺跡	喜界町教育委員会	1987年

付 編

鹿児島大学郡元団地G・H-9・10区（電子計算機室増築地）における
花粉分析結果

鹿児島大学郡元団地G・H-9・10区(電子計算機室増築地)における花粉分析結果

鹿児島大学教養部講師 西井上 剛 資

1. 花粉分析の方法

花粉分析の試料は基本土層15層から採取した。分析方法は、KOH-アセトリシス法をもちいた。試料を沈殿管にいれる→KOH処理(10%KOHを加え、10分間加熱)→水洗(遠心分離)→氷酢酸で洗う→アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液にて5分間加熱)→氷酢酸で洗う→水洗→グリセリンジェリーで封入。

検鏡は、通常400倍で行った。

2. 花粉分析の結果

分析結果は第46図に示すとおりである。樹木花粉の出現率は樹木花粉総数を基数とし、草本性花粉は、花粉・シダ類孢子総数を基数として求めた。

樹木花粉では *Quercus* (コナラ属) が41.3%と高率に出現し、この地層を特徴づけている。ついで *Castanea* (クリ属) が16.3%で出現している。*Quercus*、*Castanea* の優勢な時代であったといえる。また、*Fagus* (ブナ属)、*Cryptomeria* (スギ属) のような冷温帯要素の花粉もそれぞれ9.8%、13.0%を占めている。

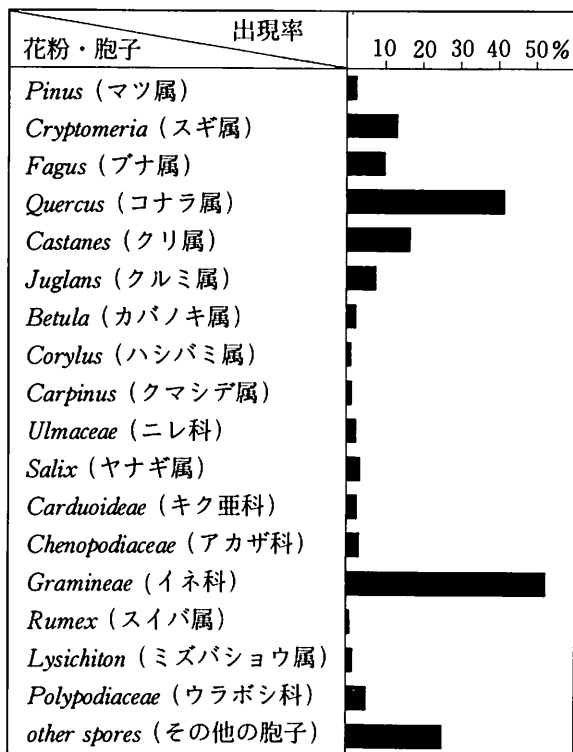
針葉樹花粉は、*Cryptomeria* をのぞいては *Pinus* (マツ属) が低率の2.2%で出現

する他はまったく認められない。なお、13%を占める *Cryptomeria* の出現は、ごく近くにスギ林の存在を示唆する可能性があるが、今回の1地点の試料では確かなものでない。

水辺、湿地に分布する *Salix* (ヤナギ属) も3.3%の低率であるが出現している。

草本性花粉をみると、*Gramineae* (イネ科) が高出現率を示し52.3%を占める。イネ科の花粉は全て雑草類で、穀物類と思われるものはない。しかし、*Chenopodiaceae* (アカザ科) や *Rumex* (スイバ属) などの農耕地に多い雑草類が低率ではあるが認められるので、農耕の営みが示唆される。また、*Lysichiton* (ミズバショウ) も1.4%で出現しており、低湿地の存在を物語っている。

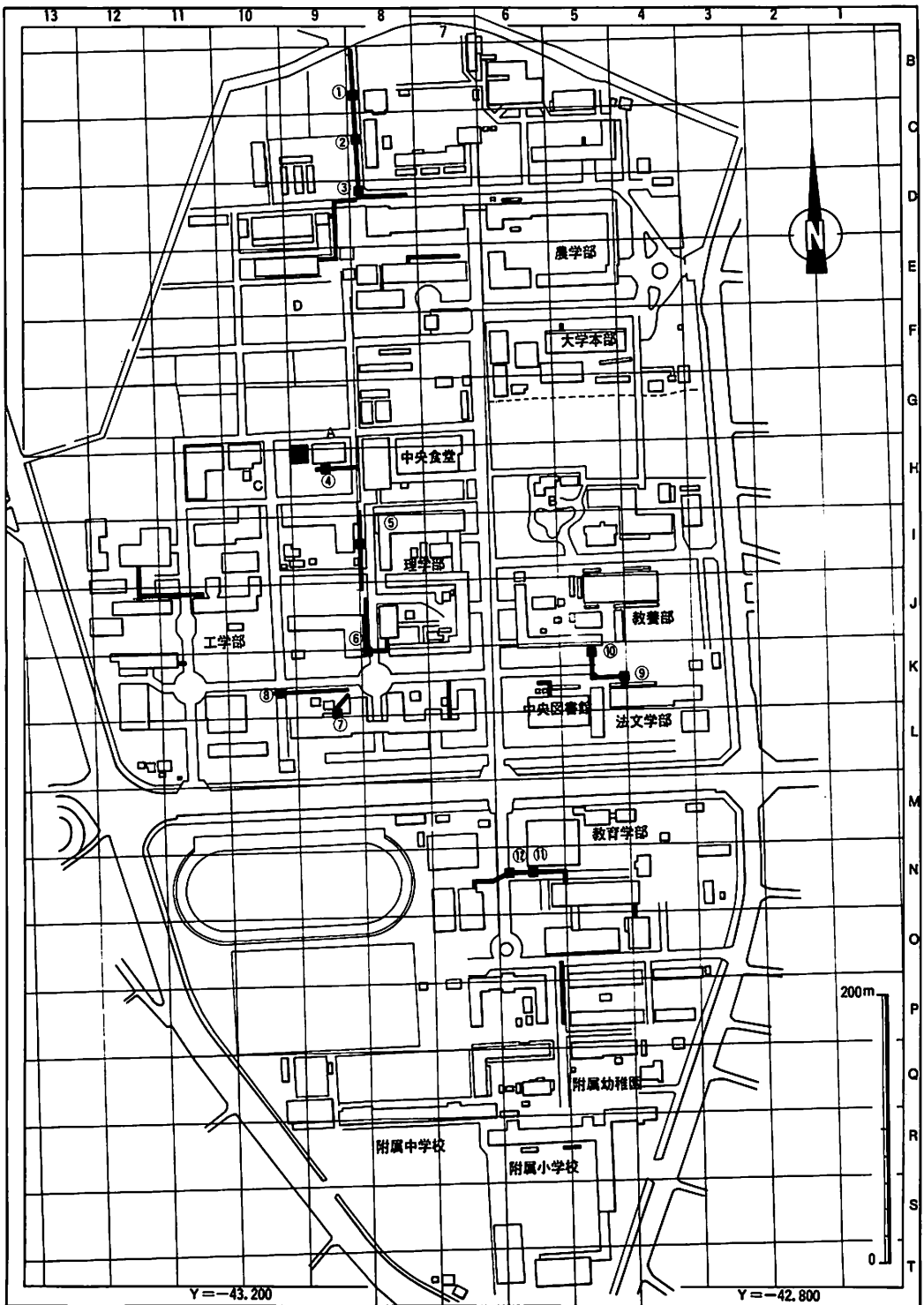
花粉の他、菌類およびシダ植物では *Polypodiaceae* (ウラボシ科) の出現率が比較的高く、*Sphagnum* (ミズゴケ属) も存在している。



第46図 花粉・孢子組成図

圖 版

図版1. 鹿児島大学元団地構内図 (1/5000)

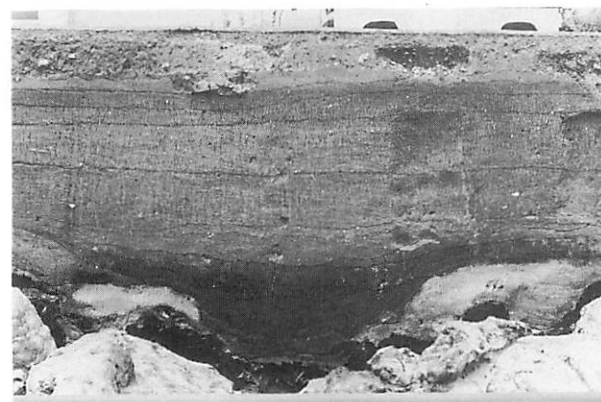
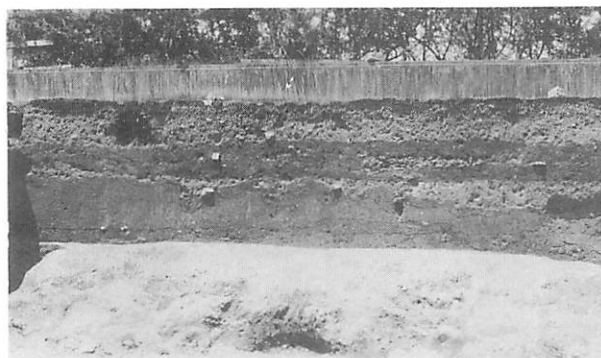


- A. 電子計算機室増築に伴う発掘調査地点 B. 農学部エアコン電源工事に伴う立合調査地点
C. 濾過ポンプ据付工事に伴う立合調査地点 D. 附属農場盤板工事に伴う立合調査地点

—■— 情報処理センター新営通信設備工事に伴う立合調査地点 (①～⑫は土層観察地点)

— 86 —

図版 3 郡元団地 G・H-9・10 区 (電子計算機室増築地)



①

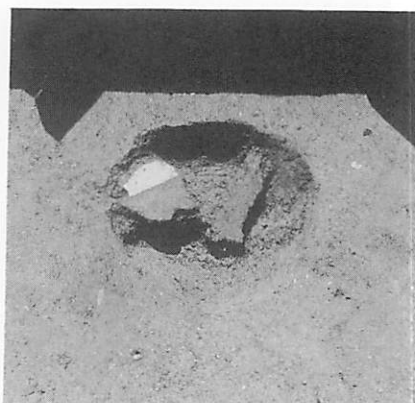
②

③

④

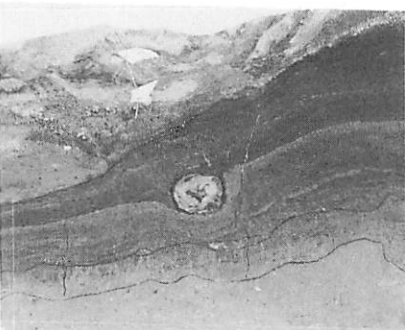
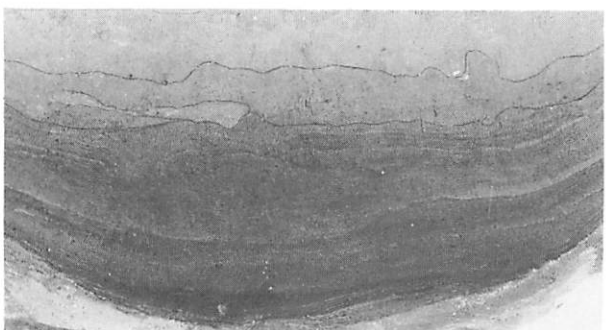
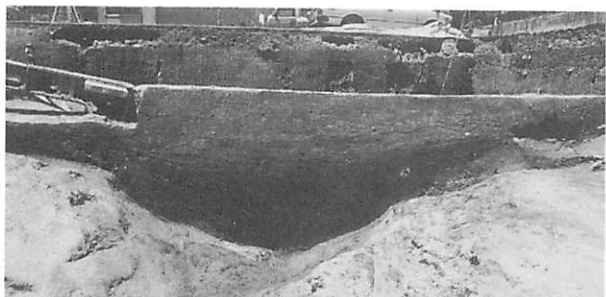
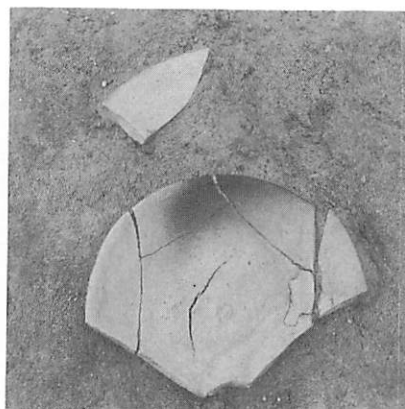
- ① a-④区北壁
- ② c-②区東壁
- ③ d-③区南壁
- ④ b-④区西壁

図版 4 郡元団地 G・H-9・10区 (電子計算機室増築地)



①	④
②	⑤
③	⑥

- ① 2 a号溝完掘状況 (北から)
- ② 2 b号溝完掘状況 (北西から)
- ③ 同 上 (西から)
- ④ 礎石を持つ掘り込み
- ⑤ 1号土壌
- ⑥ 2号土壌



- | | | | |
|---|---|-----------------------|-------------------|
| ① | ⑤ | ① 2 b号溝・3 a号溝全景 (西から) | ⑤ 3 a号溝土器出土状況 |
| ② | ⑥ | ② 同上 (東から) | ⑥ 同上 |
| ③ | ⑦ | ③ 3 a号溝埋土断面 | ⑦ 3 a号溝埋土5層中植物遺存体 |
| ④ | ⑧ | ④ 同上 (部分) | ⑧ 3 a号溝埋土断面 (部分) |

図版6 郡元団地G・H・9・10区（電子計算機室増築地）



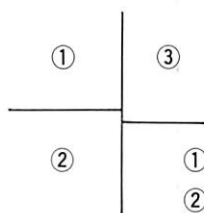
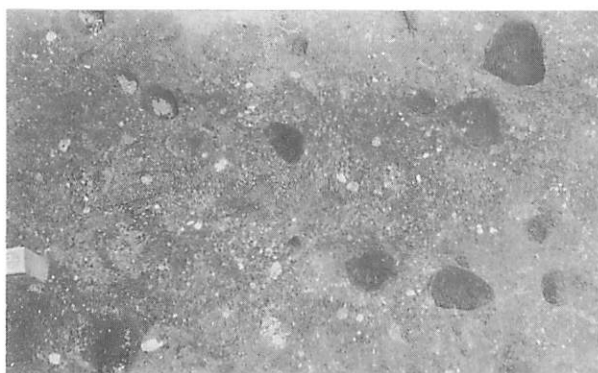
①

②

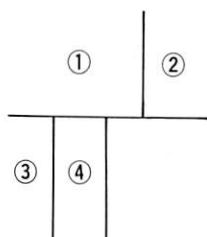
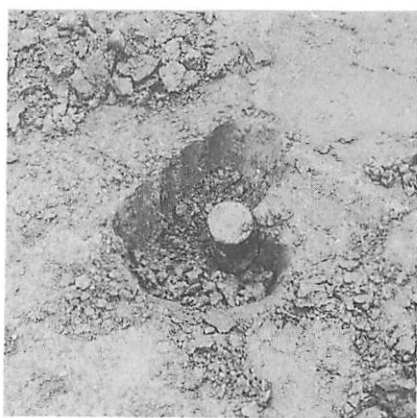
③

④

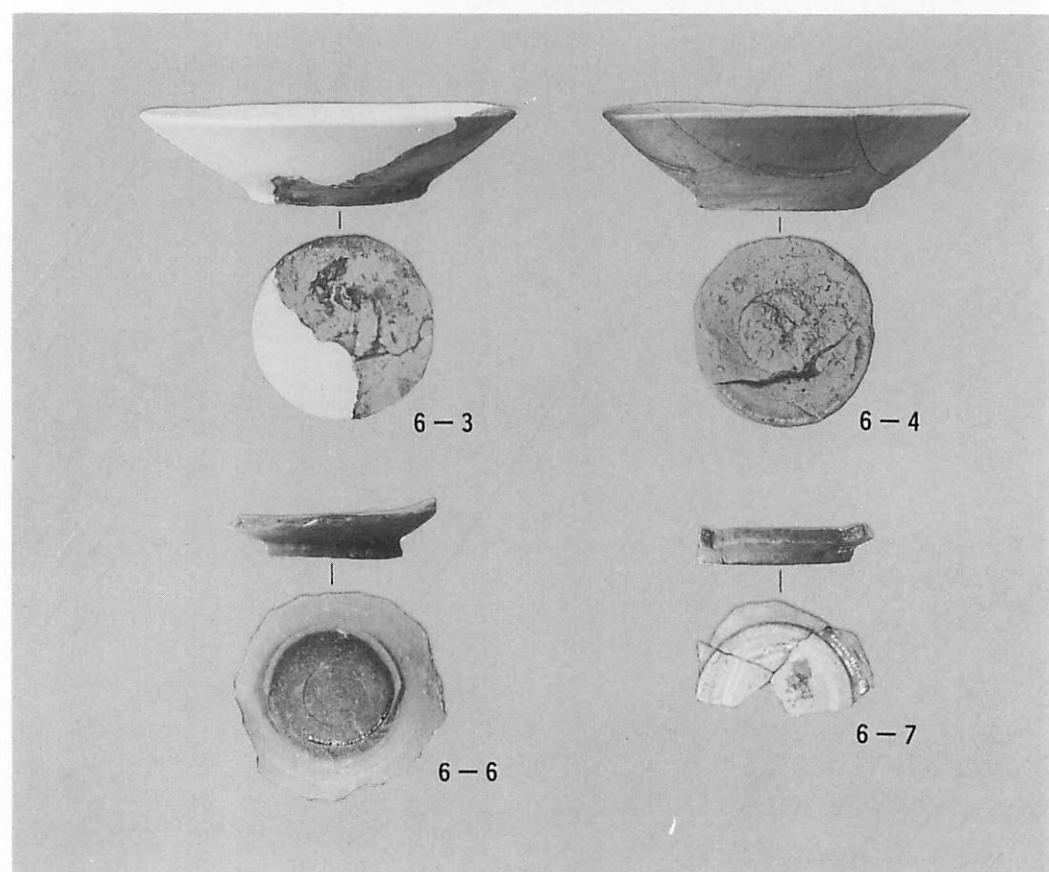
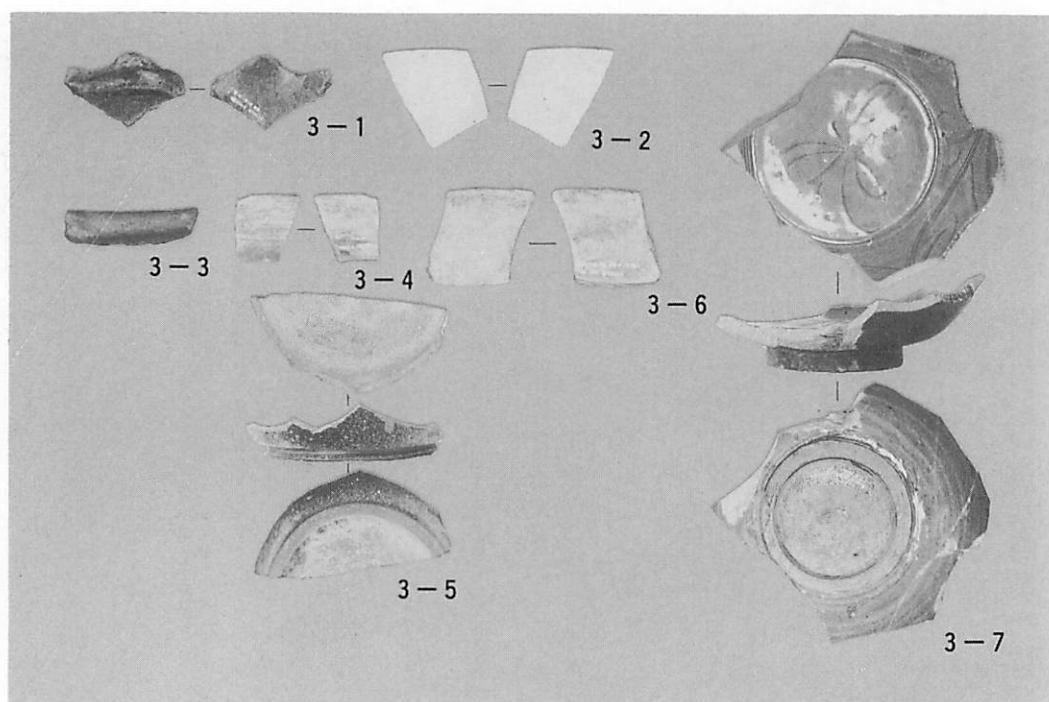
- ① 3b号溝全景（西から）
- ② 3b号溝全景（東から）
- ③ 3b号溝底面（西から）
- ④ 3b号溝底面（東から）



- ① 水田層上面 (西から)
- ② 水田層上面 (部分)
- ③ 水田層上面 (東から)



- ① 砲弾検出状況
- ② 同上
- ③④ 砲弾

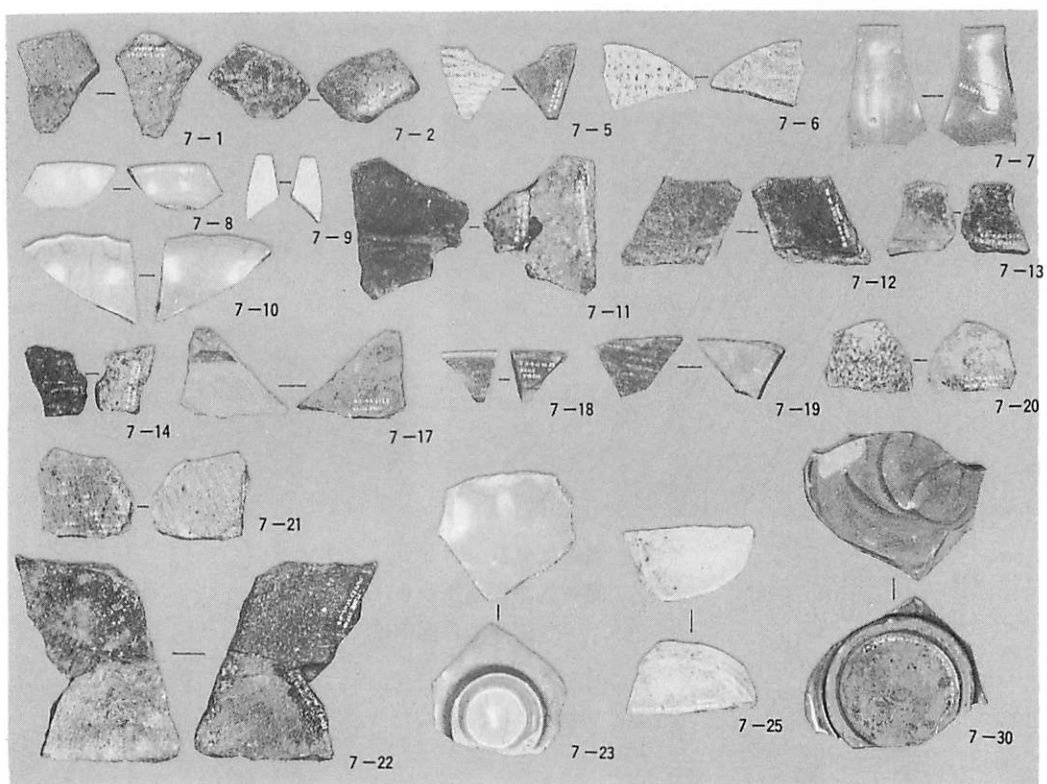
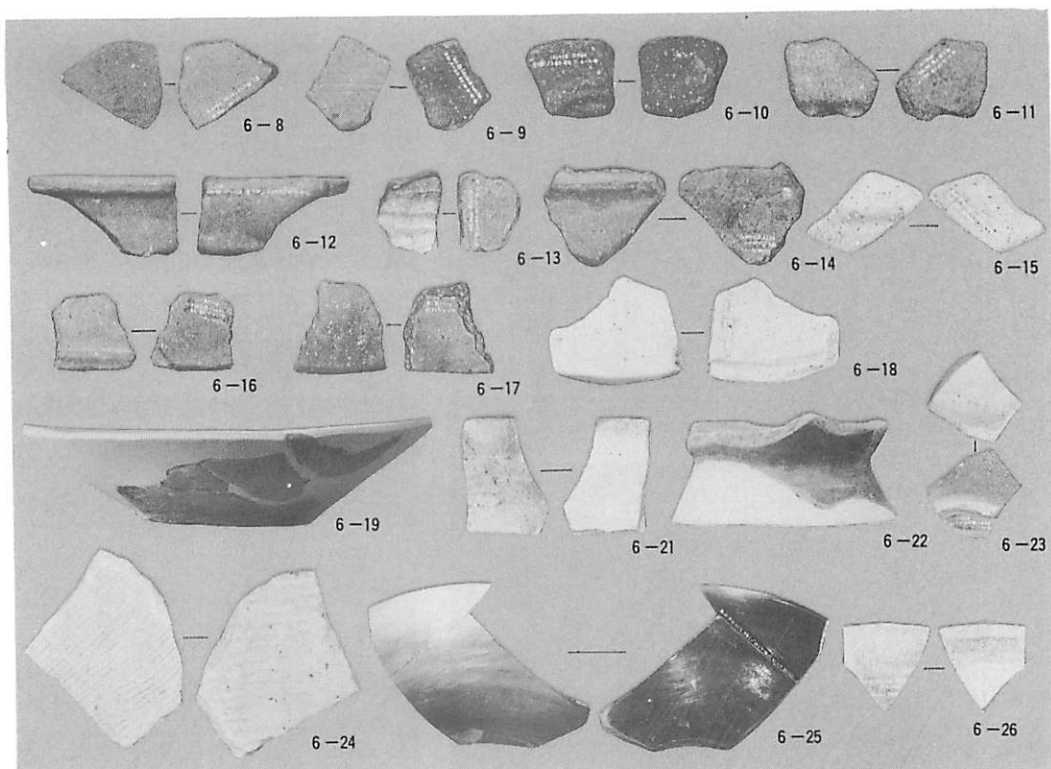


①

②

① 方形掘り込み・1号土壇・2b号溝出土土器

② 3a号溝出土土器



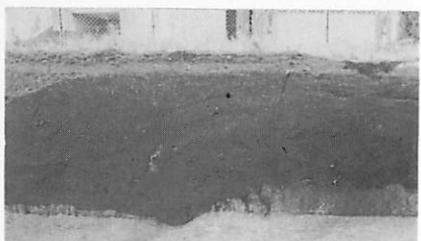
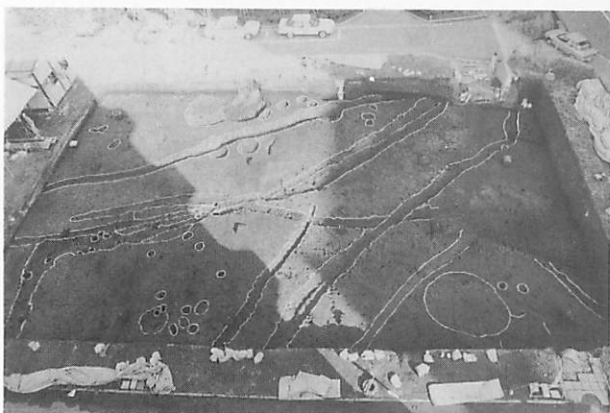
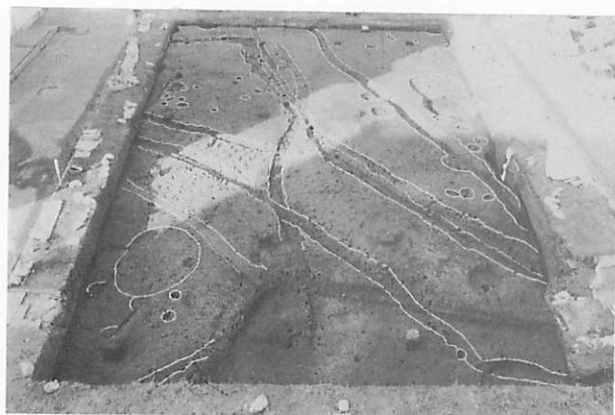
①

① 3b号溝出土土器

②

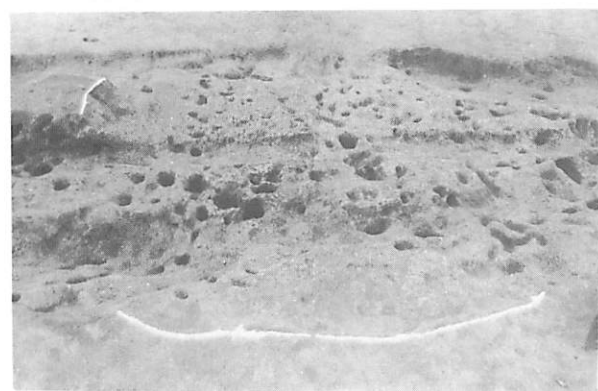
② 包含層出土土器

図版10
宇宿団地——8区



①	④
	⑤
②	⑥
	⑦
③	⑧

- ① 調査区全景（南から）
- ② 調査区全景（西から）
- ③ j-⑤区深掘り部南壁
- ④ d-④区北壁
- ⑤ d-⑥区北壁
- ⑥ f-⑦区西壁
- ⑦ d-③区東壁
- ⑧ j-⑥区南壁



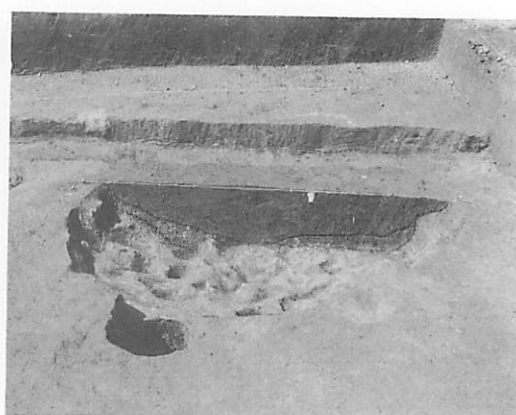
①

②

③

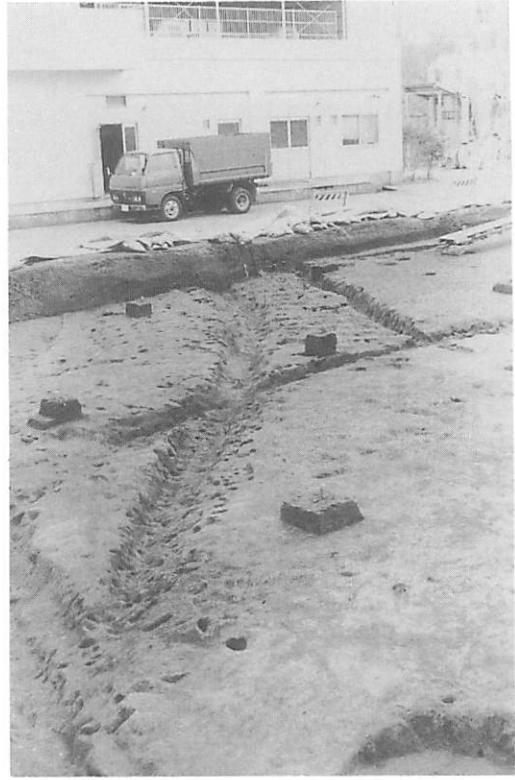
④

- ① 1号住居址（西から）
- ② 2号住居址遺物出土状況（北西から）
- ③ 2号住居址完掘状況（西から）
- ④ 3号住居址（西から）



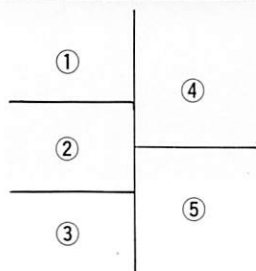
①	④
②	⑤
③	⑥

- ① 土壙6内管玉出土状況
- ② 土壙7内石鏝出土状況
- ③ 土壙14南半部完掘状況（南東から）
- ④ 土壙9（東から）
- ⑤ 土壙7完掘状況（北東から）
- ⑥ 土壙14北半部完掘状況（西から）

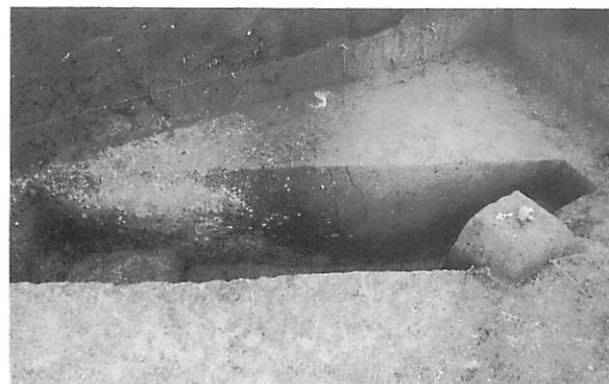
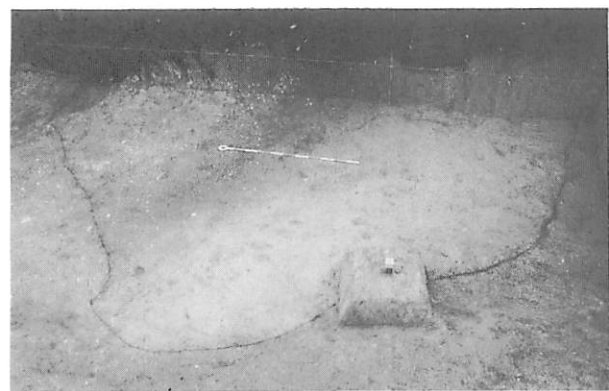
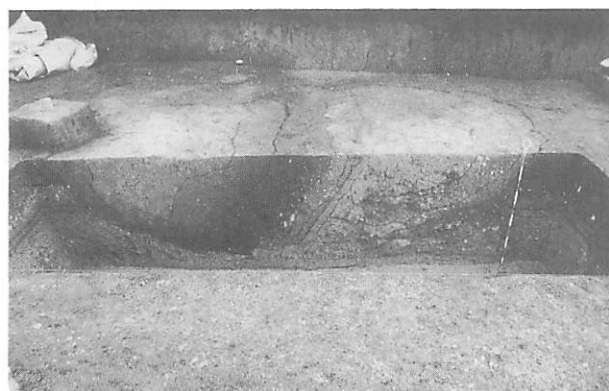


①	③
②	④

- ① 1号溝全景（北西から）
- ② 5号溝完掘状況（北西から）
- ③ 2・7・8号溝（南東から）
- ④ 5号溝遺物出土状況（北から）



- ① 6 a号溝 (北から)
- ② 2・7・8号溝 (東から)
- ③ 8号溝 (南東から)
- ④ 6 a・6 b号溝 (南から)
- ⑤ 6 a・6 b・7号溝 (北から)



①

②

③

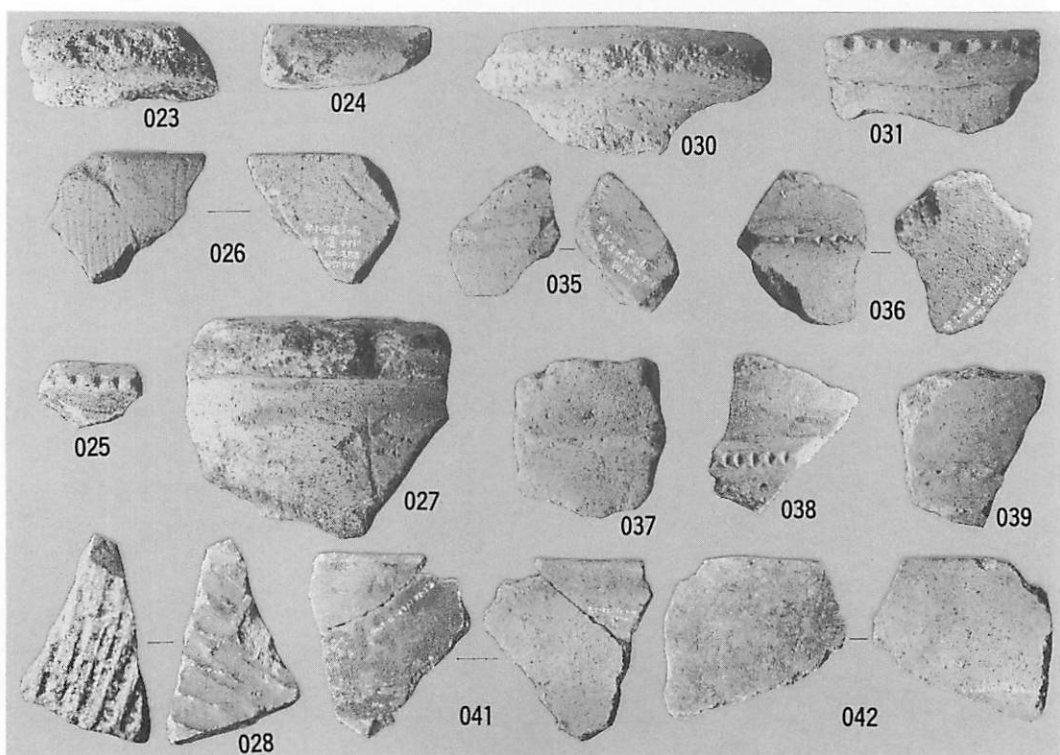
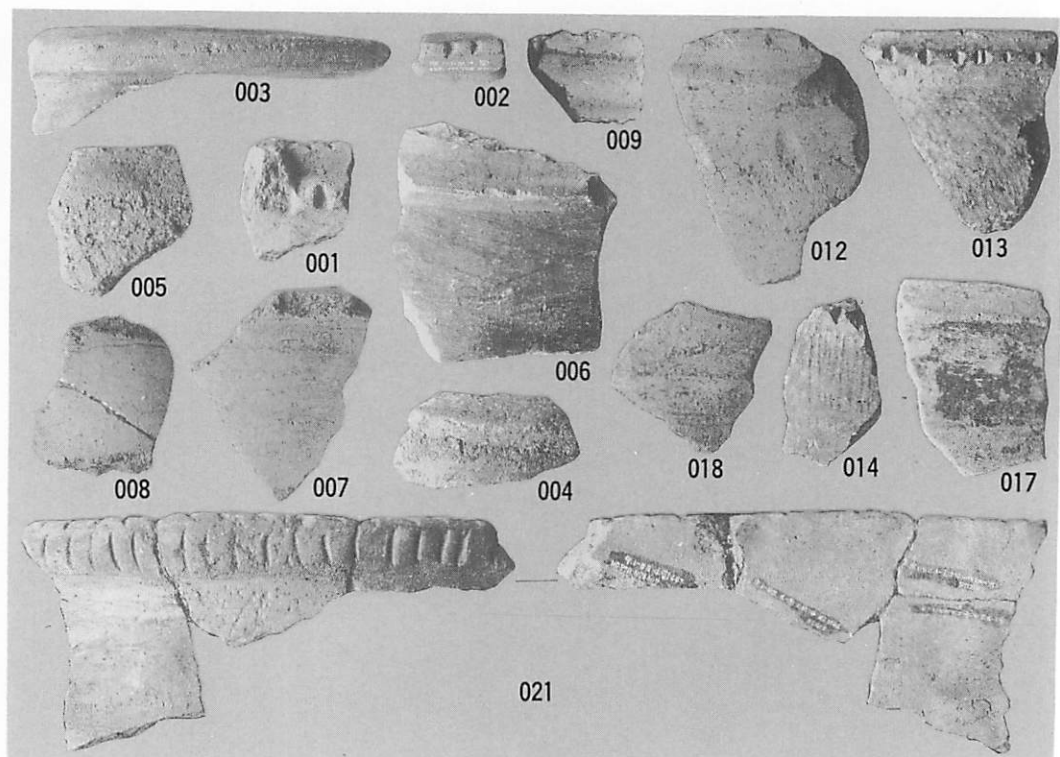
④

① No. 1 局部断層（東から）

② No. 1 局部断層断面

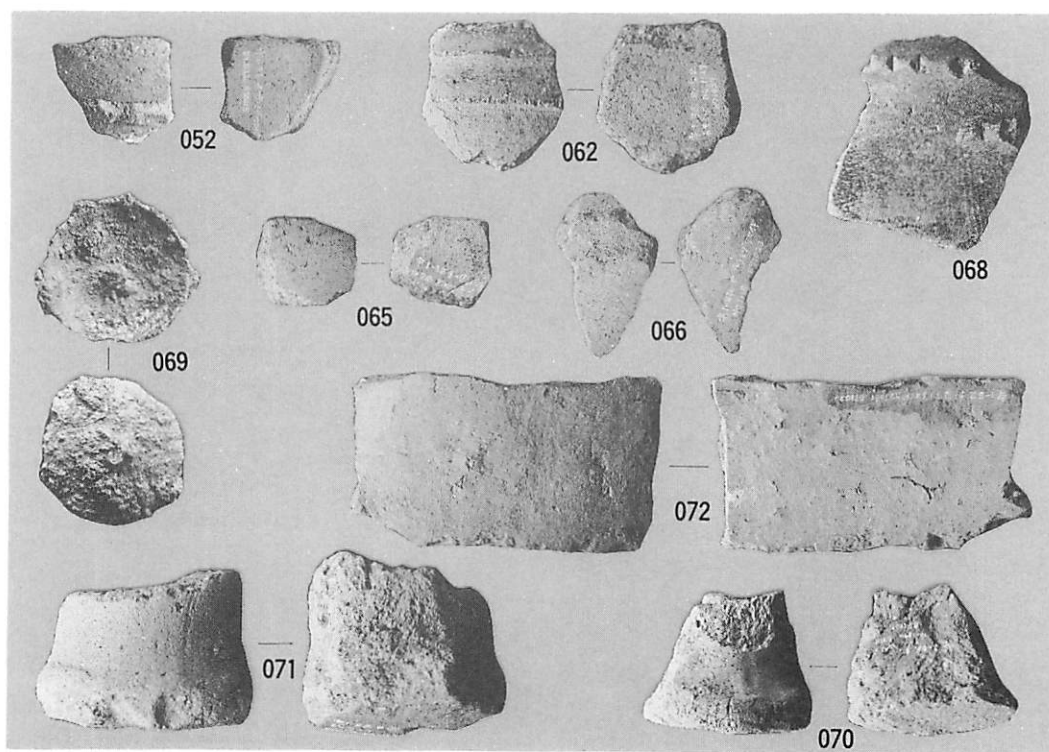
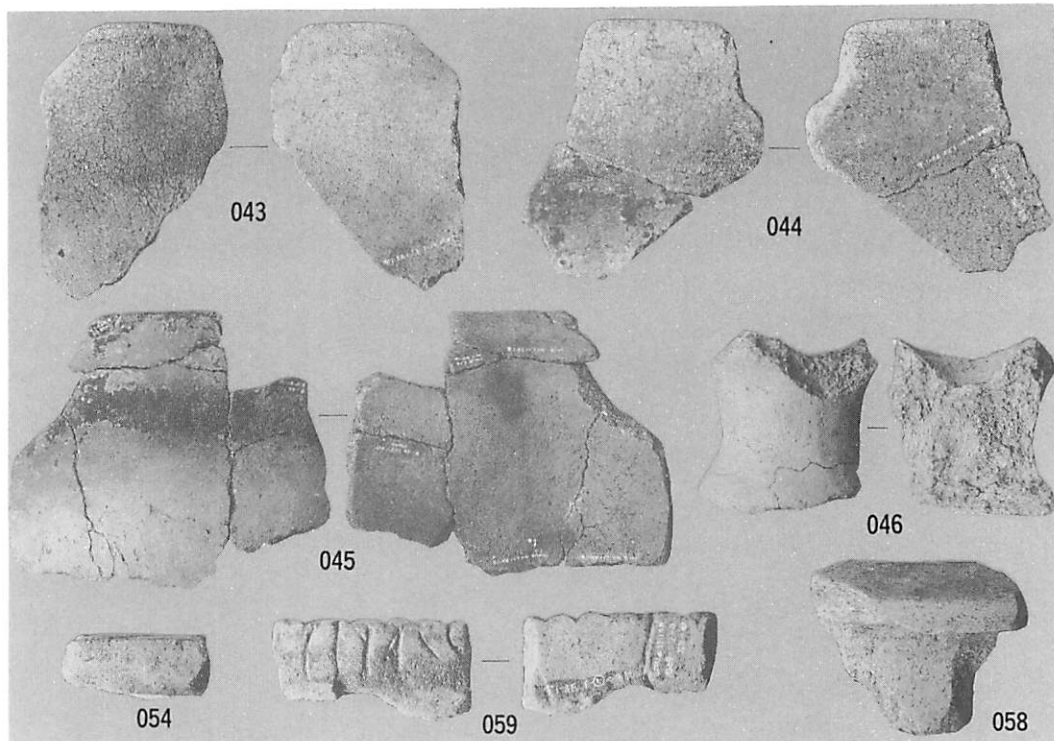
③ No. 13 局部断層（北から）

④ No. 13 局部断層断面



①
②

① 住居址・土壙出土土器
② 溝出土土器(1)

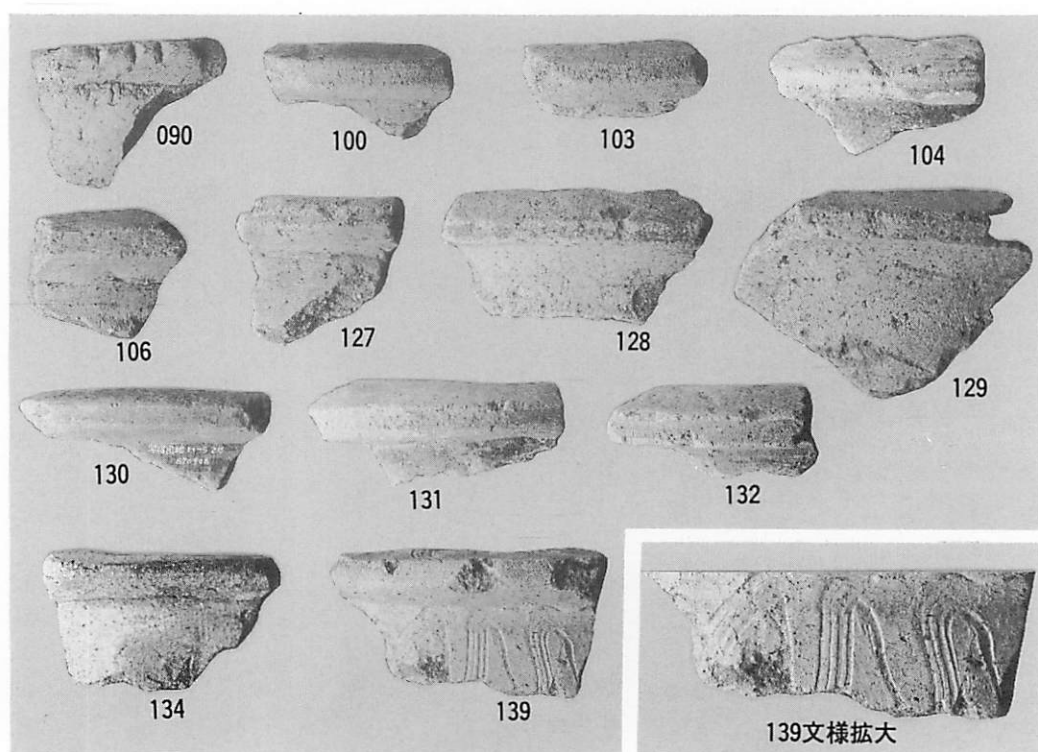
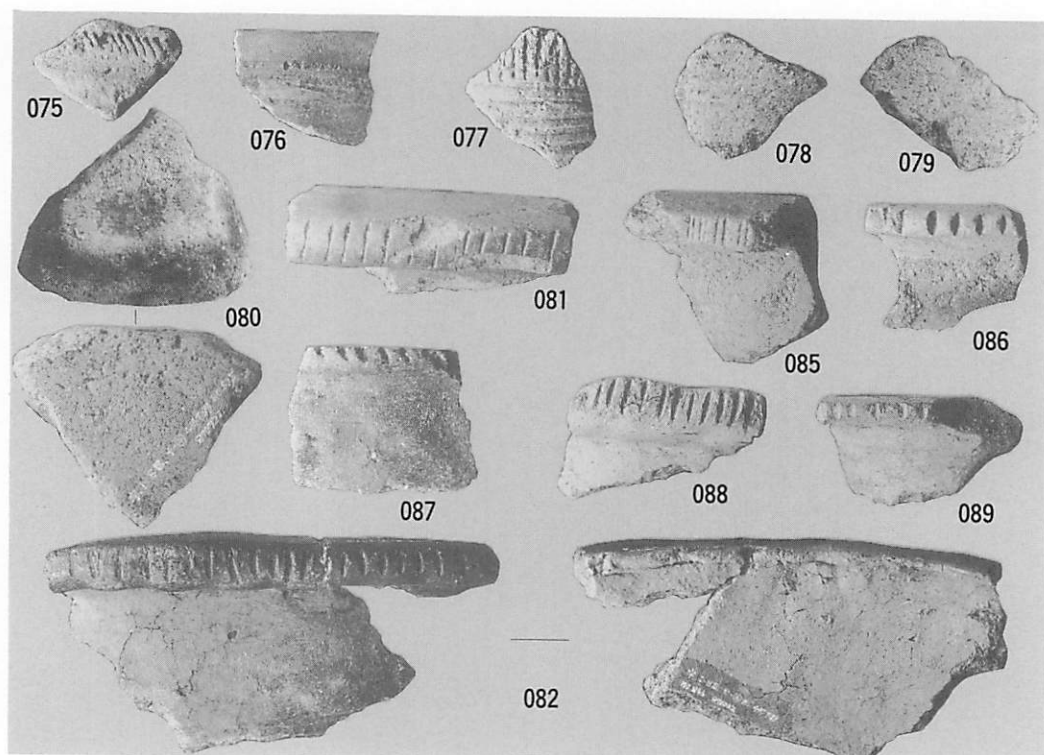


①

②

① 溝出土土器(2)

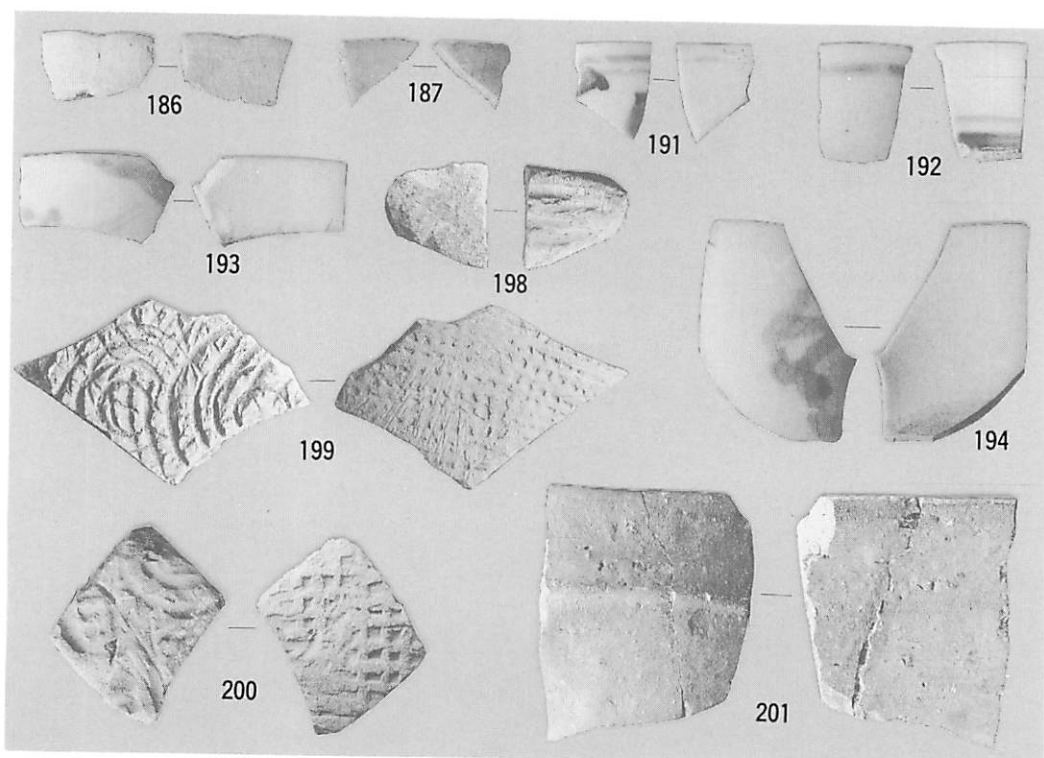
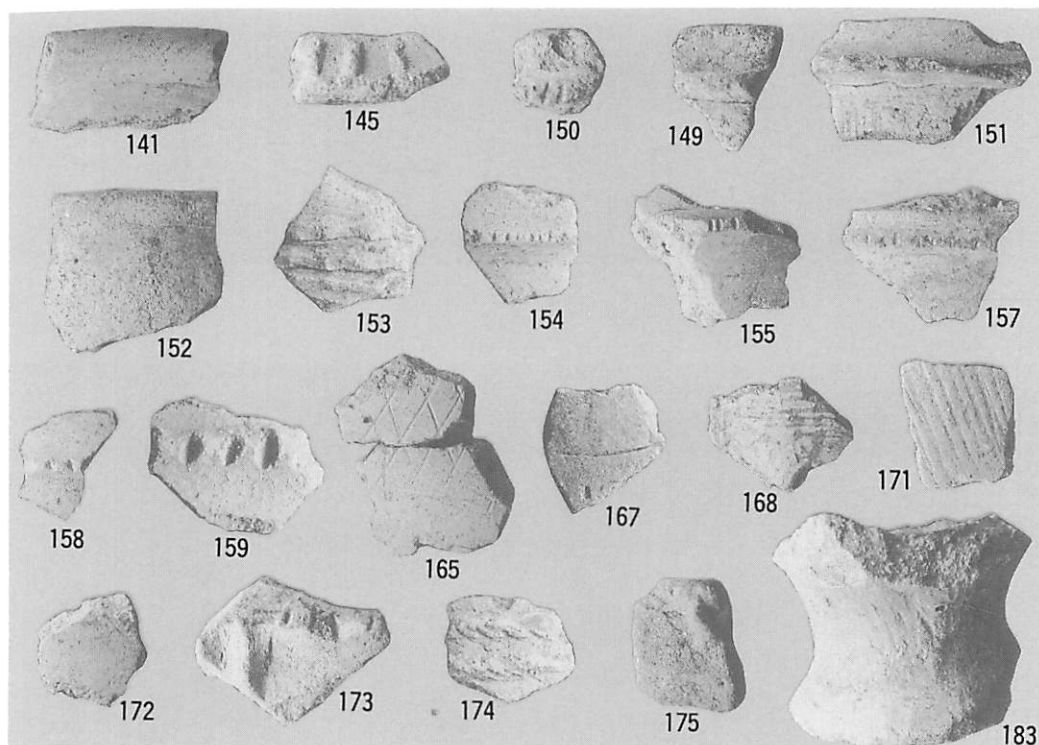
② 溝出土土器(3)



①
②

① 包含層出土土器(1)
② 包含層出土土器(2)

139文様拡大

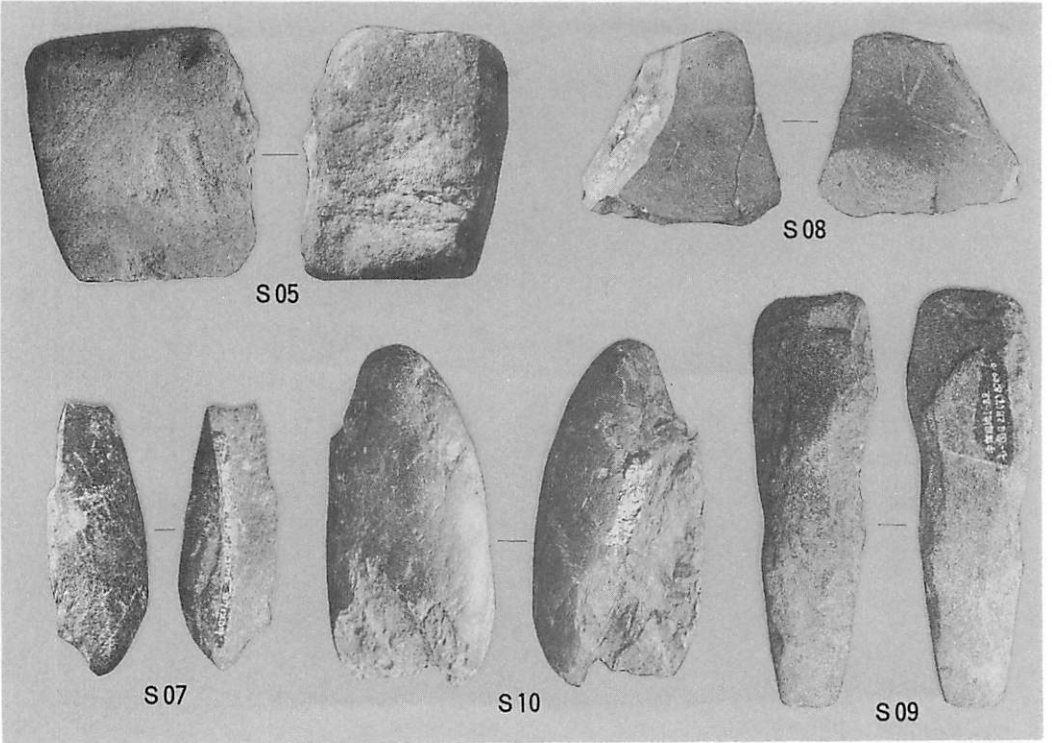
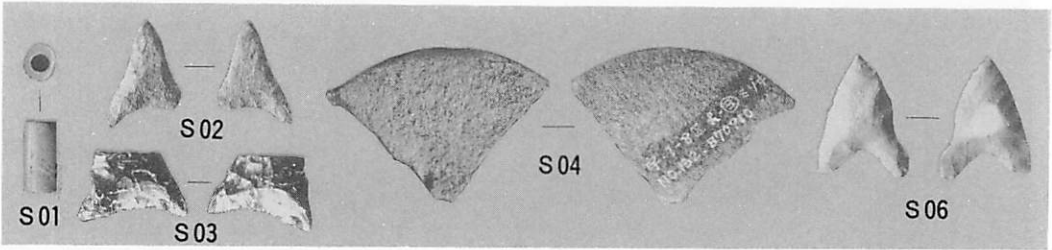


①

① 包含層出土土器(3)

②

② 包含層出土土器(4)



①
—————
②

① 遺構内出土石器
② 包含層出土石器

あ と が き

昭和62年度は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室にとって悲しい出来事があった。

去る（1987年）12月19日、知念朝吉課長が他界された。

知念課長は鹿児島大学施設部企画課長という忙しい職務にありながら、文化財保護法の遵守と鹿児島大学の将来を見据えながら大学の施設計画に支障を来すことのないようにという大きな観点から埋蔵文化財調査室の実現に努力して下さった。

鹿児島大学埋蔵文化財調査室は多くの方々の御理解と御協力によって設立されたが、なかでも事務局サイドにおいて、知念朝吉課長の御努力がなければ、埋蔵文化財調査室の設置はもっと遅れていたかも知れない。

知念課長が琉球大学に転出された後、那覇市で琉球舞踊を見ながら松永幸男助手と三人で飲む機会があった。そのときも埋蔵文化財調査室のことを気にかけておられ、思わず目頭が熱くなったことが思い出される。

亡くなられる1カ月ほど前も、電話で元気なお声を聞いていただけに、訃報が届いたときは俄に信じられない思いであった。

まだまだこれからという時、本当に惜しい方を失ったと思う。

御冥福を心からお祈りしたい。

喜ばしいことではあるが、私にとってもうひとつ辛い出来事があった。埋蔵文化財調査室が発足して以来頑張ってくれた坪根伸也君が3月31日退職し、4月1日付けで大分市教育委員会に正式採用となった。彼の将来を考えれば心から喜ぶべきであろう。坪根君は年度末の忙しい時は、幾晩も泊り込んで徹夜で報告書を完成させてくれた。その心意気にしばしば感動させられたものである。

坪根君、ご苦労様でした。

（上村俊雄）

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅲ

1988年3月

編集	鹿児島大学埋蔵文化財調査室
発行	鹿児島市郡元一丁目21-24
印刷	(有) 朝 日 印 刷
	鹿児島市上荒田町854-1